

ま え だ きょうづかきんせいぼぐん  
前田・経塚近世墓群 7

前田前原A丘陵

—浦添南第一土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書—

2017（平成29）年2月

うらそえし  
沖縄県 浦添市教育委員会





巻頭 1 平成 25 年度調査区全景（北から）



巻頭 2 平成 25 年度調査区全景（西から）



巻頭3 平成26年度調査区全景（南東から）



巻頭4 平成26年度調査区全景（東から）



卷頭 5 27 号墓一次葬検出状況



卷頭 6 59 号墓遺物出土状況



卷頭 7 66号墓遺物出土狀況



卷頭 8 69号墓獸骨埋設狀況

## 序 文

本報告書は、浦添南第一土地区画整理事業に先立ち、平成 25 ～ 27 年度に浦添市教育委員会が実施した埋蔵文化財「前田・経塚近世墓群」前田前原 A 丘陵の発掘調査の成果をまとめたものです。

前田・経塚近世墓群は浦添市前田と経塚に広がる近世を中心に造営・使用された墓群です。その数は 1,000 基余を数え、大部分がフィンチャーと呼ばれる横穴式の掘込墓ですが、ほかに亀甲墓や平葺墓なども散見されます。これらの墓はこれまでの調査により首里の士族から地元の庶民と幅広い階層の人々により造営され使われ続けたことがわかっています。近世墓には数世代にわたる蔵骨器やそれに記された銘書、副葬品などが残されており、これらから近世を生きた人々について多くの情報を得ることができます。このことは、文献資料の少ない近世琉球の人々や家族の歴史にとどまらず、当時の浦添の歴史、ひいては琉球全体の歴史を明らかにできる歴史資料であるともいえます。今回の調査によって、このような貴重な資料の一端を得ることができたと考えております。

本報告書が近世から近現代まで続いた沖縄や浦添の葬制・墓制について知るために多くの方々が活用されますとともに、文化財の保護と活用についてより一層の関心を持っていただけるものになれば幸いに存じます。

末尾になりますが、現地調査および資料整理にあたってご指導・ご協力を賜りました方々並びに事業実施にあたりご協力を賜りました方々に深く感謝申し上げます。

平成 29 年 2 月

浦添市教育委員会  
教育長 池原 寛安

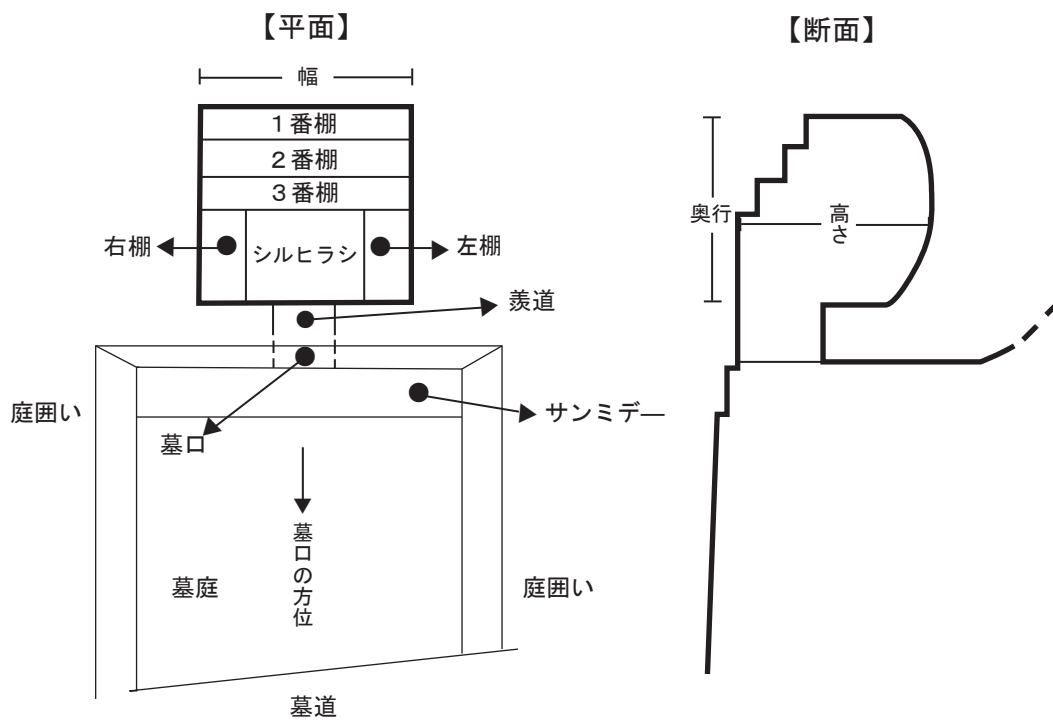
## 例 言

1. 本報告書は、南第一土地区画整理事業に先立ち、沖縄県浦添市前田に所在する埋蔵文化財「前田・経塚近世墓群」前原A丘陵の発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 「前田・経塚近世墓群」は、沖縄県浦添市の字前田から経塚の丘陵一帯に所在する墓群である。なお、発掘調査地点の所在地は沖縄県浦添市前田前原 585 他 20 筆と里道である。
3. 発掘調査は、浦添南第一土地区画整理事業に伴う発掘調査であり、浦添市都市建設部区画整理課の委託を受けて、浦添市教育委員会文化課が実施した。
4. 資料の整理にあたり銘書判読について鈴木悠氏（那覇市歴史博物館）より指導・助言をいただいた。記して感謝申し上げます。
5. 発掘調査に係る現場作業は、平成 25～27 年度に実施した。調査期間は、平成 25 年 10 月 16 日～平成 26 年 1 月 31 日及び平成 27 年 4 月 6 日～平成 27 年 6 月 19 日である。調査の実施にあたっては、株式会社パスコ沖縄支店、株式会社シン技術コンサル沖縄営業所の支援を受けた。
6. 報告書作成は平成 27～28 年度の 2 ヶ年にわたって実施し、浦添市教育委員会文化課職員及び嘱託職員がこれにあたった。
7. 副葬品及び戦争遺物、人骨の実測及び写真撮影については、文化課職員及び嘱託職員がこれにあたった。なお、蔵骨器の実測及び写真撮影等については、株式会社琉球サーベイ、株式会社パスコ沖縄支店に委託した。
8. 発掘調査終了後の平成 28 年 4 月より当該丘陵で厚生労働省による沖縄戦戦没者の遺骨収集作業が行われ、その際のデータを提供いただき本報告に反映させている。データを提供していただいた厚生労働省及び遺骨収集作業受託業者の有限会社ティガネーに感謝申し上げます。
9. 本書の執筆を以下のように分担した。編集は佐伯が行った。  
菅原広史 第 4 章第 1～12 節・21 節・各節人骨の項、第 5 章  
佐伯信之 第 1 章、第 2 章第 3 節（一部）、第 4 章第 13～20 節・22 節、第 6 章  
安斎英介 第 2 章  
瑞慶覧長順 第 4 章第 4 節（石製品）
10. 本文中で使用した引用・参考文献は、各章末に記した。
11. 調査に関わる実測図や写真等の記録は、浦添市教育委員会文化課において保存している。



## 凡 例

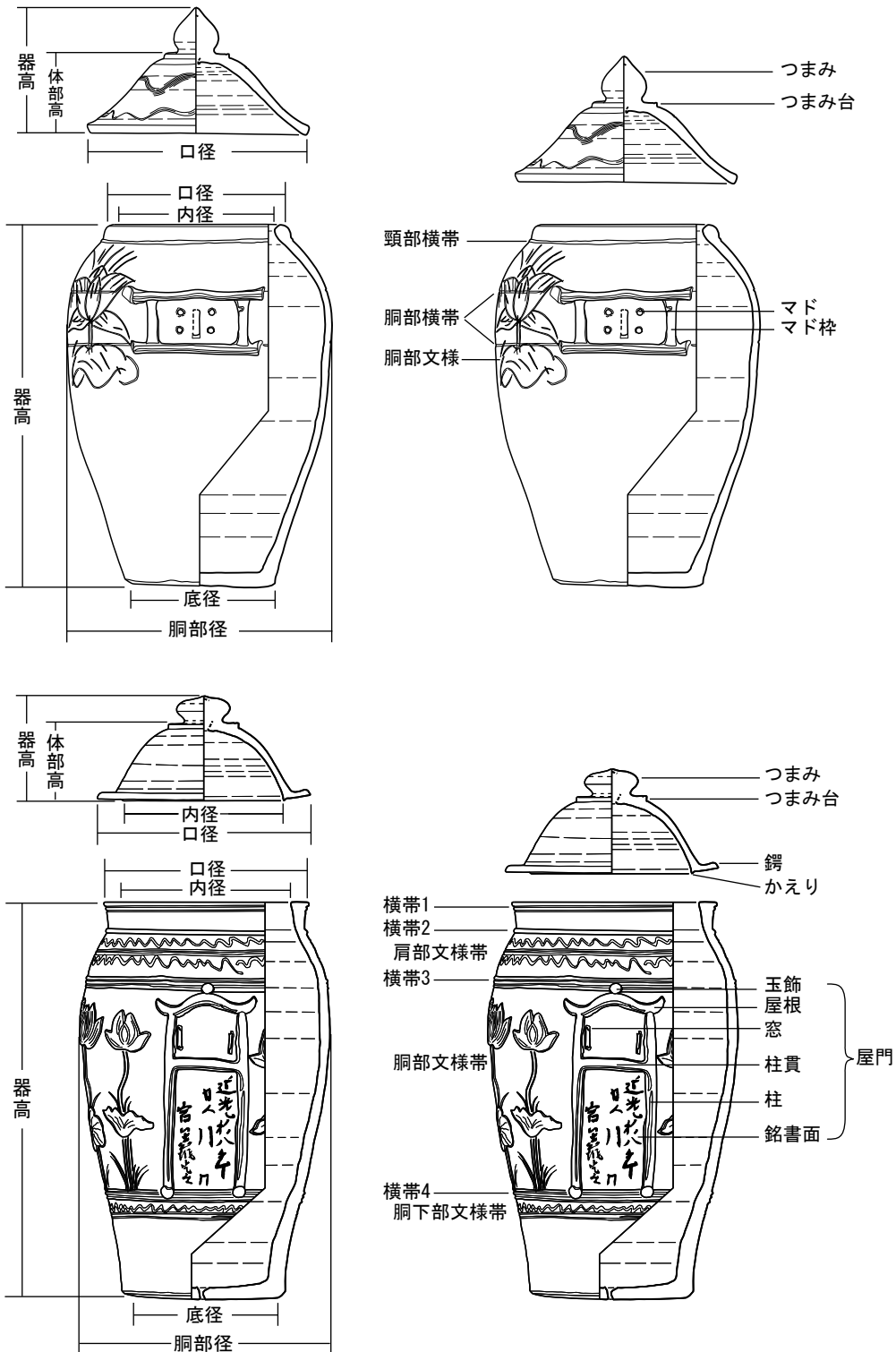
1. 本書に表示した基準高はすべて海拔高を用い、メートル単位で表した。
2. 地形測量図に記した座標は、世界測地系を用いた。日本測地系を用いる場合は、その旨明記した。
3. 平面図に記した方位は、基本的には座標北を示す。磁北を用いる場合は、その旨明記した。
4. 遺構断面図を作成した位置は、遺構平面図に横断ラインを示し、方向は英字で表した。
5. 地形測量図については1/200を基本として作成し、1/500の縮尺で掲載した。
6. 遺構図については、1/20を基本として作成し、1/5～1/80の縮尺で掲載した。
7. 一次葬人骨の出土状況図については1/5を基本として作成し、1/10の縮尺で掲載した。
8. 遺物の実測図は、蔵骨器は1/6、それ以外は1/1～1/3の縮尺で掲載した。それらについては、掲載頁に明示している。
9. 掘込墓の各部名称と計測位置については以下のとおりである。



- ・墓口から墓室に至る通路の名称については、伝統的・一般的な呼称が確認されていないことから「羨道」と仮称した。
- ・墓口の方角は、座標北を表す。主軸方位は墓室奥壁を背にして墓口方向をみている。

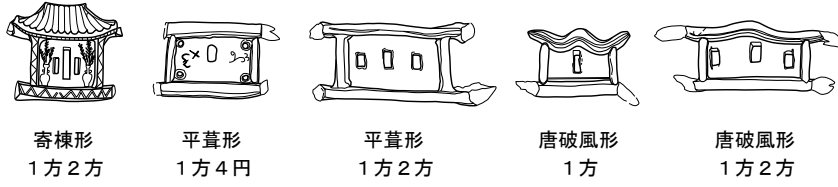
10. 蔵骨器の分類及び名称と、各部名称・計測位置については、浦添市教育委員会刊行の浦添市文化財調査研究報告書第25集『伊祖の入れ御拝領墓の厨子甕と被葬者』（1997年）及び浦添市文化財調査研究報告書『比嘉門中の家族史—家族の数だけ歴史がある—比嘉門中墓の調査概要』（2006年）を参考にしている。

・蔵骨器の各部名称と計測位置（上段：ボージャ形、下段：マンガン釉甕形）

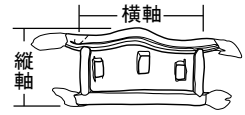


11. 窓・屋門の部位名称と計測位置は下記のとおりである。

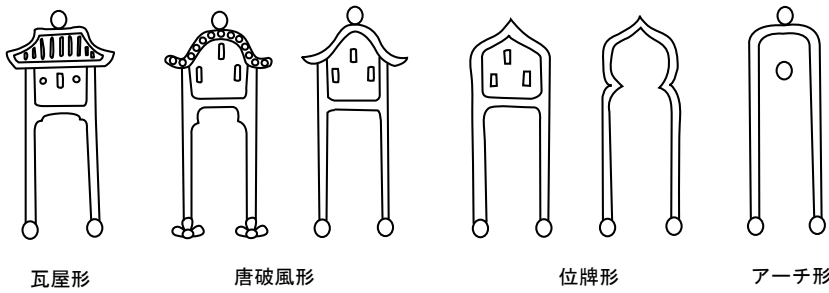
マド枠の分類（ボージャー）



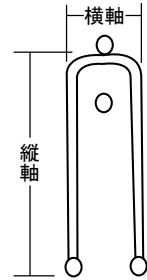
マド枠計測部位



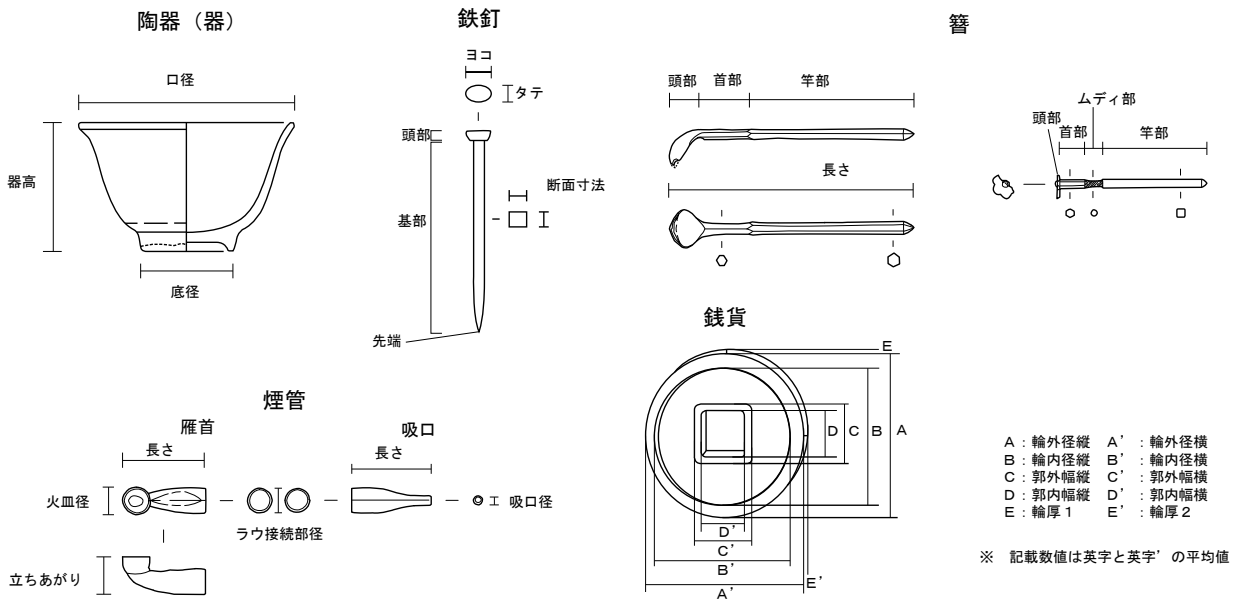
屋門の分類（マンガン釉甕形）



屋門計測部位



12. 下記の遺物の各部名称と計測位置は以下のとおりである。



# 目 次

巻頭図版

序文・例言・凡例・目次

## 第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査の経過	2

## 第2章 遺跡の位置と環境

第1節 浦添の地理的環境	4
第2節 遺跡の地理的環境	4
第3節 遺跡周辺の歴史的環境	6

## 第3章 発掘調査の概要

第1節 調査の方法	8
第2節 層序と遺構	8
第3節 遺物	9

## 第4章 調査の成果

第1節 1号墓	22	第12節 59号墓	64
第2節 27号墓	22	第13節 64号墓	67
第3節 31号遺構	25	第14節 65号墓	68
第4節 33号墓	29	第15節 66号墓	72
第5節 45号墓	33	第16節 67号墓	78
第6節 47号墓	36	第17節 69号墓	82
第7節 48号墓	36	第18節 71号墓	84
第8節 49号墓	46	第19節 72号墓	86
第9節 51・52号墓	48	第20節 73号墓	89
第10節 56号墓	56	第21節 その他の遺物	92
第11節 57号墓	58	第22節 銘書一覧	95

## 第5章 人骨

第1節 資料について	96
第2節 人骨出土状況および分析結果	96
第3節 まとめ	100

第6章 総括 ..... 106

写真図版

報告書抄録

巻頭写真

- 巻頭 1
- 巻頭 2
- 巻頭 3
- 巻頭 4
- 巻頭 5
- 巻頭 6
- 巻頭 7
- 巻頭 8

挿図目次

第 1 図	遺跡の位置	5
第 2 図	前田・経塚の小字	5
第 3 図	前田・経塚近世墓群調査地区の位置	12
第 4 図	前田前原A丘陵の周辺	13
第 5 図	調査地地形と各遺構の位置	14
第 6 図	1号墓 遺構図	23
第 7 図	27号墓 遺構図	24
第 8 図	27号墓 一次葬人骨出土状況	25
第 9 図	27号墓 出土遺物	26
第 10 図	31号遺構 遺構図	27
第 11 図	31号遺構 出土遺物	28
第 12 図	33号墓 遺構図	30
第 13 図	33号墓 出土遺物 (1)	31
第 14 図	33号墓 出土遺物 (2)	33
第 15 図	45号墓 遺構図	34
第 16 図	45号墓 出土遺物	35
第 17 図	47号墓 遺構図	37
第 18 図	47号墓 出土遺物 (1)	38
第 19 図	47号墓 出土遺物 (2)	39
第 20 図	47号墓 出土遺物 (3)	40
第 21 図	47号墓 出土遺物 (4)	41
第 22 図	48号墓 遺構図	44
第 23 図	48号墓 出土遺物	45
第 24 図	49号墓 遺構図	46
第 25 図	49号墓 出土遺物	47
第 26 図	51・52号墓 遺構図	49
第 27 図	51号墓 出土遺物 (1)	50
第 28 図	51号墓 出土遺物 (2)	51

第 29 図	51号墓 出土遺物 (3)	52
第 30 図	51号墓 (4)・52号墓出土遺物	53
第 31 図	56号墓 遺構図	56
第 32 図	56号墓 出土遺物	57
第 33 図	57号墓 出土遺物 (1)	58
第 34 図	57号墓 遺構図	59
第 35 図	57号墓 出土遺物 (2)	60
第 36 図	57号墓 出土遺物 (3)	61
第 37 図	59号墓 遺構図	64
第 38 図	59号墓 出土遺物	65
第 39 図	64号墓 遺構図	66
第 40 図	64号墓 出土遺物	67
第 41 図	65号墓 遺構図	69
第 42 図	65号墓 出土遺物 (1)	70
第 43 図	65号墓 出土遺物 (2)	71
第 44 図	65号墓 出土遺物 (3)	72
第 45 図	66号墓 遺構図	73
第 46 図	66号墓 出土遺物 (1)	74
第 47 図	66号墓 出土遺物 (2)	75
第 48 図	67号墓 遺構図	79
第 49 図	67号墓 出土遺物 (1)	80
第 50 図	67号墓 出土遺物 (2)	81
第 51 図	69号墓 遺構図	83
第 52 図	69号墓 獣骨埋設遺構図	83
第 53 図	71号墓 遺構図	84
第 54 図	71号墓 獣骨埋設遺構図	85
第 55 図	72号墓 遺構図	87
第 56 図	72号墓 出土遺物	88
第 57 図	73号墓 遺構図 (1)	90
第 58 図	73号墓 遺構図 (2)	91
第 59 図	16・40号墓 出土遺物	93
第 60 図	16・40・50号墓 出土遺物	94

表目次

第 1 表	墓室平面形の類型	15
第 2 表	遺構観察一覧 (1)	16
第 3 表	遺構観察一覧 (2)	17
第 4 表	遺構観察一覧 (3)	18
第 5 表	遺構観察一覧 (4)	19

第6表	出土遺物一覧(1)	20
第7表	出土遺物一覧(2)	21
第8表	27号墓 出土陶磁器観察表	26
第9表	31号遺構 出土陶磁器観察一覧表	28
第10表	33号墓 出土蔵骨器(蓋) 観察表	32
第11表	33号墓 出土蔵骨器(身) 観察表	32
第12表	33号墓 出土陶磁器観察表	32
第13表	45号墓 出土蔵骨器(蓋) 観察表	35
第14表	45号墓 出土蔵骨器(身) 観察表	35
第15表	47号墓 出土陶磁器観察一覧表(1)	42
第16表	47号墓 出土陶磁器観察一覧表(2)	43
第17表	48号墓 出土陶磁器観察一覧表	45
第18表	49号墓 出土蔵骨器(蓋) 観察表	47
第19表	49号墓 出土蔵骨器(身) 観察表	47
第20表	51号墓 出土蔵骨器(蓋) 観察表	54
第21表	51号墓 出土蔵骨器(身) 観察表	54
第22表	51号墓 出土陶磁器観察一覧表	55
第23表	52号墓 出土陶磁器観察一覧表	56
第24表	56号墓 出土蔵骨器(蓋) 観察表	57
第25表	56号墓 出土蔵骨器(身) 観察表	57
第26表	57号墓 出土蔵骨器(蓋) 観察表	62
第27表	57号墓 出土蔵骨器(身) 観察表	63
第28表	57号墓 出土陶磁器観察表	63
第29表	59号墓 出土蔵骨器(蓋) 観察表	65
第30表	59号墓 出土蔵骨器(身) 観察表	65
第31表	64号墓 出土蔵骨器(身) 観察表	68
第32表	65号墓 出土蔵骨器(蓋) 観察表	71
第33表	65号墓 出土蔵骨器(身) 観察表	71
第34表	65号墓 出土銭貨一覧	72
第35表	66号墓 出土蔵骨器(蓋) 観察表	76
第36表	66号墓 出土蔵骨器(身) 観察表	77
第37表	67号墓 出土蔵骨器(蓋) 観察表	78
第38表	67号墓 出土蔵骨器(身) 観察表	82
第39表	72号墓 出土蔵骨器(蓋) 観察表	86
第40表	72号墓 出土蔵骨器(身) 観察表	86
第41表	72号墓 出土陶磁器観察表	87
第42表	その他の墓 出土陶磁器観察表	92
第43表	その他の墓 出土蔵骨器(身) 観察表	93
第44表	銘書一覧	95
第45表	出土人骨一覧表	102
第46表	最小個体数集計表	104
第47表	骨にみられる異変等の観察表	104
第48表	上顎骨及び下顎骨の歯列残存状況	105

図版5	1号	115
図版6	2~7号	116
図版7	8~15号	117
図版8	16~21号	118
図版9	22~30号	119
図版10	27号	120
図版11	30~33号	121
図版12	33~39号	122
図版13	40~45号	123
図版14	45~47号	124
図版15	48~49号	125
図版16	50~56号	126
図版17	56~57号	127
図版18	57~59号	128
図版19	59~63号	129
図版20	64~66号	130
図版21	67号	131
図版22	67~71号	132
図版23	71~73号	133
図版24	73~79号	134
図版25	27・31・33号墓出土遺物	135
図版26	40・45・48・49号墓出土遺物	136
図版27	51号墓出土遺物(1)	137
図版28	51(2)・56・57(1)号墓出土遺物	138
図版29	57号墓出土遺物(2)	139
図版30	57(3)・59号墓出土遺物	140
図版31	64・65(1)号墓出土遺物	141
図版32	65号墓出土遺物(2)	142
図版33	65(3)・66(1)号墓出土遺物	143
図版34	66号墓出土遺物(2)	144
図版35	66号墓出土遺物(3)	145
図版36	67号墓出土遺物(1)	146
図版37	67号墓出土遺物(2)	147
図版38	72号墓出土遺物	148

## 図版目次

図版1	調査区全景	111
図版2	調査区近景	112
図版3	調査区近景	113
図版4	調査区近景	114

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

浦添南第一土地区画整理事業は、浦添市を事業主体とする字前田、経塚にまたがる総面積 82.4ヘクタールの土地区画整理事業である。本事業は平成3年度に都市計画決定し、平成4年度より着手されている。

当該事業の実施に伴い浦添市教育委員会は現地踏査を実施し、さらに平成6～9年度にかけて同事業地内の分布調査を実施した。その結果、地内の丘陵各所において方言名で「フィンチャー」と称する横穴式の墓を多数確認、その数は約1,000基にのぼると推定された（浦添市教委1998）。その後の範囲確認調査を経て順次緊急発掘調査を実施している。

同事業地内の前田地区に位置する前原A丘陵では街路・宅地造成が予定されており、発掘調査を実施することとなったが丘陵を北と南に分けて二ヶ年度（予算を繰り越したため厳密には三ヶ年度）にわたって調査を実施した。北半分は平成25年6月25日付、南側は平成26年5月23日付（平成27年2月3日付変更・平成27年3月18日付再変更）で市と市教委の間に緊急発掘調査業務委託契約が締結された。また平成28年5月26日付で新規の現場調査の業務とあわせて、本報告書刊行のための資料整理業務を行う委託契約を締結した。

## 第2節 調査体制

調査の体制は下記のとおりである。

調査主体	浦添市教育委員会	教育長	池原寛安（平成25～28年度）
事業所管	浦添市教育委員会文化部	部長	下地安広（平成25～28年度）
事業総括	同	文化課 課長	松川章（平成25～28年度）
事業調整	同	文化財係長	渡久地政嗣（平成25～28年度）
事業事務	同	文化財係主任	菅原広史（平成25～28年度）
	同	文化財係主任	佐伯信之（平成26～28年度）
	同	文化財係主事	瑞慶覧長順（平成27～28年度）
	同	文化振興係主事	松田奈津子（平成25～28年度）
	同	臨時職員	宮里磨（平成25年度）
	同	臨時職員	上原仁美（平成26年度）
調査員	同	文化財係主任	菅原広史（平成25～28年度）
	同	文化財係主任	佐伯信之（平成26～28年度）

### 資料整理

平成26年度（嘱託職員）	池宮城聡子、糸数永子、浦崎祐子、新城京美、照屋芳美、比嘉美智子
平成27年度（嘱託職員）	糸数永子、小橋川里江、瑞慶覧尚美、玉寄智恵子、照屋葉史、宮城みさ子

平成 28 年度（嘱託職員） 石嶺敏子、新城京美、玉寄智恵子、嘉数さおり

調査協力 志良堂恵、照屋葉史

#### 委託業務

平成 25 年度 発掘支援業務委託 株式会社パスコ沖縄支店

平成 26・27 年度 発掘支援業務委託 株式会社シン技術コンサル沖縄営業所

平成 27 年度 遺物実測等業務委託 株式会社琉球サーベイ

平成 28 年度 遺物実測等業務委託 株式会社パスコ沖縄支店

### 第 3 節 調査の経過

#### （1）丘陵北側（平成 25 年度調査）

○平成 25 年 10 月 16 日～

防蛇網設置、伐採・搬出、空中写真撮影、基準点測量、現況地形測量、磁気探査等作業。

○11 月 12 日～

重機掘削による遺構確認作業。

○11 月 18 日

1 号墓掘削作業開始。以後各遺構の検出・掘削作業を行う。

○11 月 28 日

2・3・4・6 号の遺構測量、以後適宜各遺構の測量を行う。

○12 月 12 日

磁気探査実施中に戦没者遺骨が見つかる。16 日に県戦没者遺骨収集情報センターに引き渡す。  
その後 12 月 20 日、1 月 14 日にも見つかり同様に扱う。

○平成 26 年 1 月 25 日

空中写真撮影。

○1 月 29 日

全遺構測量・遺物取り上げ終了。種子吹き付け（～30 日）。

○1 月 31 日

現場事務所等撤収。

#### （2）丘陵南側（平成 26 年度調査。予算繰越のため実質的な現地作業は平成 27 年度に実施）

○平成 27 年 4 月 6 日～24 日

防蛇網設置、伐採・搬出、基準点測量、現況地形測量、磁気探査等作業。

○4 月 23 日～5 月 15 日

重機掘削による遺構確認作業。

○5 月 13 日

73 号墓検出作業開始。以後各遺構の検出作業を行う。



○5月19日

65・66・73号墓掘削作業。以後各遺構の掘削作業を行う。またこの日から73号墓の遺構測量を始め、以後適宜各遺構の測量を行う。

○6月8日

67号墓掘削作業を最後にすべての遺構掘削終了。

○6月10日

全遺構測量・遺物取り上げ終了。

○6月11日

空中写真撮影。

○6月15日

種子吹き付け。

○6月19日

現場事務所等撤収。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 浦添市の地理的環境

前田・経塚近世墓群が所在する浦添市は、沖縄本島中南部の西海岸に位置し、南側に県都である那覇市、東側に西原町、北側に宜野湾市が隣接する。西側は東中国海に面しており、遠くには慶良間諸島を望むことができる。市域は東西 8.4km、南北 4.6km、面積は約 19.09k m<sup>2</sup>で、人口は 114,217 人、46,458 世帯（平成 26 年 1 月末現在）を擁する市である。市の西部には国道 58 号、市中央部には国道 330 号と県道那覇宜野湾線、東部には沖縄自動車道がそれぞれ南北に走り、島の南北を結ぶ主要交通路が縦貫する。海浜部は、約 270 ヘクタールの地域を米軍牧港補給基地が占めている（第 1 図）。

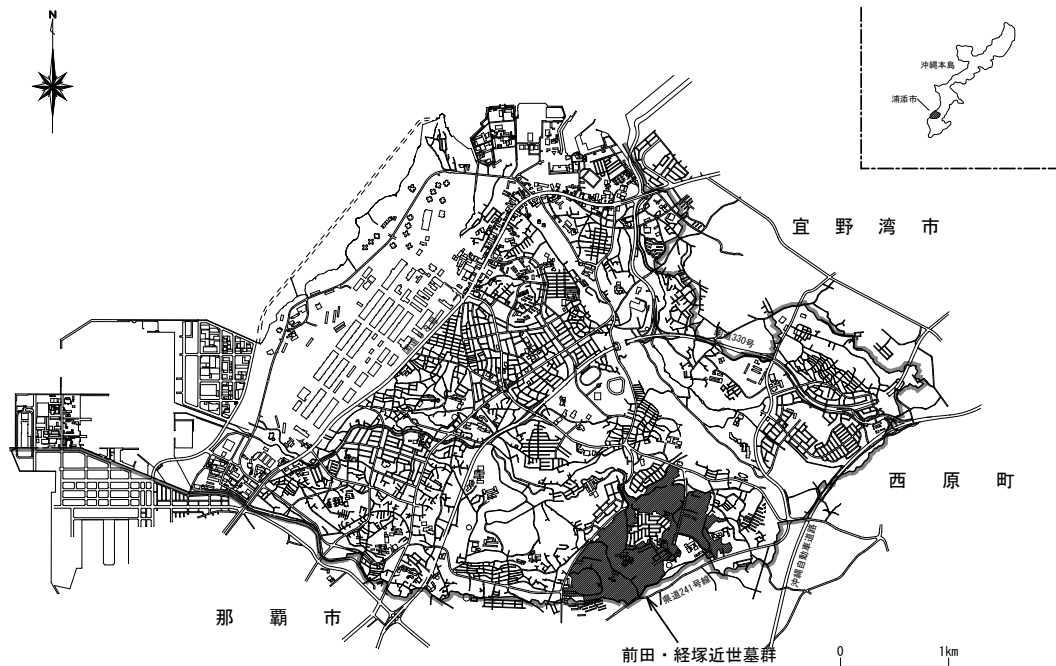
市の地形は、標高約 40m 前後でほぼ二分され、東部は起伏の小さな丘と浅い谷が連なる波浪状の丘陵地、西部は東中国海に続く東高西低の地形である。北部には、北西－南東方向に標高 120～140m の浦添断層崖が形成されている。本市の最高点は、字仲間から前田に所在する国指定史跡浦添城跡内の 138.4m である。それらの丘陵を分水嶺に北流する牧港川、シリン川、西流する小湾川、安謝川の四河川はいずれも東中国海へ注いでいる。海岸線はほぼ全面で沖合にかけ豊かなサンゴ礁が発達している。

本市に分布する地層は、下位から上位に島尻層群、琉球層群、海浜堆積地及び沖積層に大別することができる。島尻層群は、本市の基盤を形成し市の中央部から南東部に広く露出するが、市西部や北部においてはかわって琉球層群が広く分布する。沖積層や海浜堆積物は四つの河川の河口付近や海岸沿いにみることができる。植生については、本市全域が去る大戦の激戦地であったために、ほとんど焼け野原の状態になり、現在残っている植被は二次林となっている。気象は隣接する那覇市において年平均気温 22.3 度、降水量 2107.8 ミリメートルで、冬は北東、夏は南東の季節風が卓越する。気温的には亜熱帯で、降水量は多く特に梅雨期や台風期に多い。風は東アジア季節風帯に属している。

### 第2節 遺跡の地理的環境

前田・経塚近世墓群は、浦添市の南東に位置する字前田と那覇市に隣接する字経塚一帯の丘陵地に分布する墓群の総称である。この地域は小湾川と安謝川の上流域で、その分水嶺にまたがる地域であり、一帯の地形はそれに由来する幾筋もの狭く浅い谷底低地と尾根から構成される。そのため、土地の起伏に富む丘陵地となっており、幾つもの舌状の小丘陵が入り組む複雑な地形が形成されている。これらの表層の地質は、豊見城層（小禄砂岩層）で構成されている。この砂岩は固結度が低い細粒の砂岩層であり、方言名で「ニービ」と呼ばれている。この地域の谷筋は、尾根の森を水源涵養林として古くから水田や畑として開発されてきたが、その斜面にはニービを掘り抜いた多くの掘込墓（方言名：フィンチャー墓）が形成されている。

現在、区画整理事業が進められている前田・経塚近世墓群が所在する丘陵地一帯は、地形上小湾川上流の安波茶川水系と安謝川上流の沢岬川水系に分かれ、現在の行政区域では字前田と字経



第1図 遺跡の位置

塚に属している。この地区の小字は、安波茶水系に属する山川原、前田原、前原、東前田原、西前田原、黒島原、真和志堂原、真知堂、西小島原、南小島原と沢岷水系に属する子ノ方原、上平良大名原、下平良大名原の13小字からなる(第2図)。かつては、安波茶川水系の全ての小字と沢岷川水系の最上流域の子ノ方原が字前田に属し、沢岷川水系の上・下平良大名原が字沢岷に属していたが、大正五年の字経塚の新設にあたり、字沢岷・字前田・字安波茶の小字をそれぞれ割いて設立した時より、現在の帰属になっている。

この地域一帯は、平成3年に浦添市が実施する浦添南第一土地区画整理事業が都市計画決定され、その翌年から着手された。同事業が進行する過程で、上記の墓群が次々に発見され、現在までにその数が1,000基を超えている。墓は、西前田原、東前田原、真和志堂原、前原、真知堂、南小島原、下平良大名原、子ノ方原に主に分布し、特に真知堂に集中している。平成21年度調査では、前田・経塚近世墓群が市域をまたいで南側の那覇市大名区域まで広がる事が明確になった(浦添市教育委員会2011)。



第2図 前田・経塚の小字

### 第3節 遺跡周辺の歴史的環境

浦添市が所在する沖縄本島中南部の遺跡分布の特徴としては、貝塚時代後期には海浜部に遺跡群が形成され、比較的内陸部の遺跡は少ない。グスク時代には、畑作や稲作が行われるようになり、遺跡も内陸部の石灰岩台地周辺に展開した。前田・経塚地区のように石灰岩台地がなく谷底低地が発達した地域は、グスク時代遺跡の分布が希薄な地域であるといわれている。

古琉球期の状況については不明な点が多い。「浦添城の前の碑文」によると、1597（万暦25）年に尚寧王が「宿道」と呼ばれる街道の整備を行い、首里から浦添に至る道を石畳にした。この時、木橋だった安波茶橋が石橋に替わり、経塚を通る「宿道」が石畳に改められたとされる。また、1609（万暦37）年に島津軍が琉球に侵攻した際には、首里への侵攻路として利用された。

近世には地方統治制度として「間切・村制度」が採用され、南第一地区一帯については1621（和暦元和7・中国暦天啓元）年の浦添王子朝良宛知行目録に「前田村」・「度支村」（沢岬村）が、1649（順治3）年に作成された『琉球国絵図郷村帳』には「前田村」・「沢岬村」・「あはき村」（安波茶村）の3ヶ村の名がみえる。「前田」は仲間村もしくは浦添グスクの前にある田、が名の由来だとされる。『琉球国高究帳』（1645年頃）によれば水田の石高は他村に比べ決して高いわけではないが、畠を合わせた石高のうち水田が占める割合は浦添間切全体が49.4%であるのに対し前田村は88.3%と水田卓越の村といえる。その後サトウキビ生産による畠の面積が増えたようで明治36（1903）年の統計では前田村の田畠に占める水田の割合は19.5%と激減しているが、水田の面積では間切内他村と比べ圧倒的に前田村が広い。一方「経塚」の地名は尚真王代（1477～1526）に日秀上人が、現在「経毛」と呼ばれる場所に経塚を建立したことに由来する。同集落は首里士族の屋取集落として成立、発展した。その成立年代は明らかではないが、1800年代前半には屋取集落が成立していたとされる。その後、1879（明治12）年のいわゆる「廃藩置県」によって職を失った士族が多く移り住んだことによって、現在の字経塚の基ができた。1916（大正5）年には、沢岬・安波茶・前田から一部を分割し字経塚が成立した。

前田・経塚近世墓群では1700年頃の銘書がある蔵骨器もみられることから、この頃には墓地としての利用が始まったと考えられる。これまで確認されている同墓群の所有者については、概ね北側の前田一帯の墓は、前田の人のものが多く、南側の経塚一帯の墓は、首里の人が多いというデータがある。経塚は首里の近郊に位置するため、首里の士族層を中心に多くの墓が建立された。そして近世以降も現在に至るまで墓の造営は続けられ、墓域としての利用が続いている。

また、去る沖縄戦において前田・経塚地域は激戦地となった前田高地（浦添城跡）と首里の司令部との中間地点に位置したため、多くの部隊が戦闘の経過とともに入れ替わり駐留したようである。その際に丘陵斜面に坑道式の壕を構築することもあれば、墓を転用することもあり、これまでの調査で戦争に関連する遺構が確認されている。また、墓は民間人の避難場所にもなっており、これらの墓については多くの証言が得られている。

〈引用・参考文献〉

浦添市教育委員会 1980 『うらそえの文化財』

浦添市史編集委員会 1981 『浦添市史 第二巻 資料編 1』 浦添市

浦添市史編集委員会 1983 『浦添市史 第四巻 資料編 3』 浦添市

浦添市史編集委員会 1984 『浦添市史 第五巻 資料編 4』 浦添市

浦添市史編集委員会 1987 『浦添市史 第六巻 資料編 5』 浦添市

浦添市史編集委員会 1987 『浦添市史 第七巻 資料編 6』 浦添市

浦添市史編集委員会 1989 『浦添市史 第一巻 通史編』 浦添市

浦添市教育委員会 1998 『浦添間切前田村・沢岬村域の近世墓と水田跡分布調査』

経塚自治会 2006 『字経塚史』

浦添市教育委員会 2011 『前田・経塚近世墓群 2 首里大名地区』

浦添市教育委員会 2013 『市内遺跡発掘調査報告書 (3) ー平成 18 ～ 23 年度調査報告ー』

浦添市 2015 『広報うらそえ 平成 27 年 1 月号』

## 第3章 発掘調査の概要

### 第1節 調査の方法

今回報告する前田前原A丘陵は浦添市字前田のほぼ中央、前田集落の南側に位置する。独立した小丘陵で標高は92～119m、南側から南西側の丘陵裾は区画整理事業以前に里道整備等で削られている。調査面積は約3,560 m<sup>2</sup>である。

現地調査は区画整理事業の進捗に合わせ、丘陵北側（平成25年度）と南側（平成26・27年度）に分けて実施した。

細粒砂岩（ニービ）の丘陵に造営する墓は、地山を掘削して形作っているため地山まで掘り進めることによって遺構を確認できる。そのため重機により地山を覆っている土を全て除去し、遺構が確認された時点で人力掘削に移行、遺構検出後は遺構埋土の掘削を実施した。遺構番号は調査年度は異なるが同一丘陵であることから連番とし1号から79号までごく一部を除き遺構確認順に付与したが、これらのうち壕（墓を改造した痕跡のうかがえないもの）や、本来ならば同一遺構番号である本墓と脇墓に個別の番号を与えたものなどがあり、最終的に墓は42基確認された。このうち遺構や遺物の残存状況が比較的良好もしくは残存状況は良くなくとも遺物が大量に出土した情報量の多い墓は21基あり、その他は攪乱・移転などにより情報量の少ない「空き墓」であった。情報量の多い墓は1/20の遺構実測図を作成し、そのうち一次葬人骨は1/5で実測図を作成した。情報量の少ない墓は略測図を作成した。写真撮影は調査開始から完了まで適宜行い、発掘開始前・終了後にラジコンヘリによる空中撮影を行った。

### 第2節 層序と遺構

前節で述べたように本墓群は細粒砂岩の丘陵に地山を掘削して造成しているため、地山の確認が遺構の有無の確認に直結することとなる。このような遺構の埋土とは基本的には墓造営後に斜面崩壊や墓室の天井崩落によるものであり、また戦時中の利用による拡張が行われている場合はその廃棄された掘削土である場合もある。いずれにしてもそれらの土を分層することにより得られる情報はほぼないに等しい。

遺構は横穴式の掘込墓が42基、壕が34基である。天井が残っていた墓は大方近年まで使用されていたもので、蔵骨器等は区画整理にともないあるいはそれ以前に移転されている。一方の天井が崩壊した墓は崩壊によりその所在が不明確となってしまうその結果蔵骨器が納められたままの状態つまり墓が機能していた状態で発見される（ただし崩壊時の衝撃により転倒もしくは破損してしまう場合もある）。これが最も墓としての情報量が多い遺構であり45・49・56・57・59・65・66・67号墓がこれに該当する。墓42基のうち14基は壕に改造されており一方の34基の壕には墓を改造したか否か不明なもの含まれるのだが、両者あわせ全遺構のうち少なくとも64%が壕として使用されていた。壕として使用されることにより遺構の拡張・変形が行われたり蔵骨

器が廃棄されるなど本来の状況が失われてしまっているのである。

遺構は丘陵のほぼ全体に存在する。北側（平成 25 年度調査区）は丘陵裾と尾根の比高差が少ないためほとんど裾部のみに存在するが、南側（平成 26 年度調査区）特に南斜面では三段に分布している。南側でも東斜面や西斜面では遺構の分布は希薄であるが傾斜が急か逆になだらか過ぎて数段にわたっての造営が難しかったのではなかろうか。ただし丘陵南端から南西端は過去に切土が行われておりまた 76 号遺構周辺は丘陵頂部まで大規模な崩落を起こしていることから、本来の地形と遺構の有無は不明である。これら遺構の特徴は第 2～5 表に概要を掲載しているが表中の「蔵骨器の出土状況」は比較的良好な状態であるか否かを示している。なお、墓の類型については浦添市教育委員会 2007『市内遺跡発掘調査報告書(1)』掲載の表に準拠している(第 1 表)。

### 第 3 節 遺物

遺物は総計で 1,072 点出土しその数量と内訳は第 6・7 表に示した。ただし完形品及び破片を接合しほぼ完形品となったものは 1 点とし、破片のままのものも 1 点としているため正確な数量ではないがある程度の傾向は表していると思われる。主な遺物として蔵骨器とそれ以外の陶磁器類が挙げられる。そのほか副葬品として簪・キセル・銭貨などが出土しているが数量的にはわずかである。そして戦時利用に伴う戦争遺物が出土している。

以下出土遺物の概要を種類別に述べる。

#### (1) 蔵骨器

近世墓の主たる遺物である蔵骨器については今回の調査では決して多いという出土量ではない。これは全遺構の 64%が壕もしくは壕に改造された墓であったことによることが大きいであろう。石製はなく全て陶製である。完形品もしくは復元できたもののうち形式別で最も多いマンガン釉甕形が蓋 22 点、身 19 点であるのに対し、ボージャー形は蓋が 13 点、身が 14 点とやや少ない。出土傾向としてマンガン釉甕形は丘陵北側の遺構で多く出土しており一方のボージャー形は全て丘陵南側南斜面の墓で見つかっている。これは同一丘陵での墓の使用時期の一端を示しているといえよう。そのほかマンガン釉底付甕形 1 セット、陶製の御殿形（家形）2 セット、転用品が蓋 1 点、身 5 点出土している。転用品は器高 20～30 cm 程度の小型品と水甕などの大型品がある。

なおボージャー形は安里分類（安里・新里 2006）の蓋Ⅱ～Ⅶ、身Ⅱ～Ⅵが、マンガン釉甕形は安里編年（1997）のⅡ～Ⅵ期のものが出土しており、これらは 18 世紀前後から 20 世紀までの範疇に納まるものである。

#### (2) 蔵骨器以外の陶磁器類

器種別で最も多いのが碗で、湯呑、皿と続くがこれらが出土陶磁器の大半を占める。これらは多くの遺構から出土しているのだがそのほとんどが壕もしくは壕に改造された墓であり、また特定の遺構からまとまって出土しているのが特徴といえる。その主なものとして第 4 章で述べているものでは 41 号墓、47 号墓が挙げられる。どの遺構も沖縄産は少なく近代の砥部産もしくはは

美濃産など内地の製品が卓越している。直接墓にかかわるものでなく戦時中に持ち込まれたものと考えられるが、湯呑は墓前祭祀に用いられていたものかもしれず注意を要する。破片数ではあるものの壺も数が多く、甕、アンダガーミなどの貯蔵容器類は何かしらの食料・調味料などを入れて戦時中に運び込んだものであろうか。

これらに対し小杯も戦時中に持ち込んだものもあることを否定はしないが、一次葬の副葬品とみなせるものもあり特に27号墓のもの(第9図1)はまさしくそれである。

### (3) 金属製品

金属製品には簪、指輪がある。簪は男性用の髪差が1点、女性用のジーファー3点である。被葬者が生前に使用していたもので副葬品として墓に存在するのが一般的であると思われるが、今回は一次葬人骨もなく壕に転用された墓からの出土もあり洗骨時の取りこぼしも含めその経緯は不明である。しかし65号墓出土の1点(第44図5)はボージャー形蔵骨器に納められていたもので、蔵骨器の編年と相まって該当ジーファーの時代観を考えるのに良好な資料といえよう。

51号墓から指輪が出土しているが(第30図2)、これも簪同様副葬品として納められるものだが該墓は戦中に攪乱にあっていることからやはり指輪のもつ背景が不明となってしまう。また一般には金属製品とはいわないが金属製ということで寛永通宝が65号墓から出土している(第44図1～4)。

### (4) 獣骨

69号墓と71号墓の2基から埋設された獣骨が出土している(第52・54図)。前田・経塚近世墓群では過去の調査においても埋設された獣骨の出土例は決して珍しくはないのだが、統計はとっていないものの全墓数量からみれば埋設行為は限られており普遍的なものとはいえその意図や時期など不明な点が多い。今回の調査で発見された2例についても墓は戦時中に利用されており時代をうかがわせるような遺物は一切発見されていない。

### (5) その他

27号墓の一次葬に伴ってガラス瓶が出土しているが埋葬時期を示唆するものである(第9図4)。また同墓や53号墓で鉄釘が出土したがこれは一次葬での木製棺箱に使用していたものであろう。

### (6) 戦争遺物

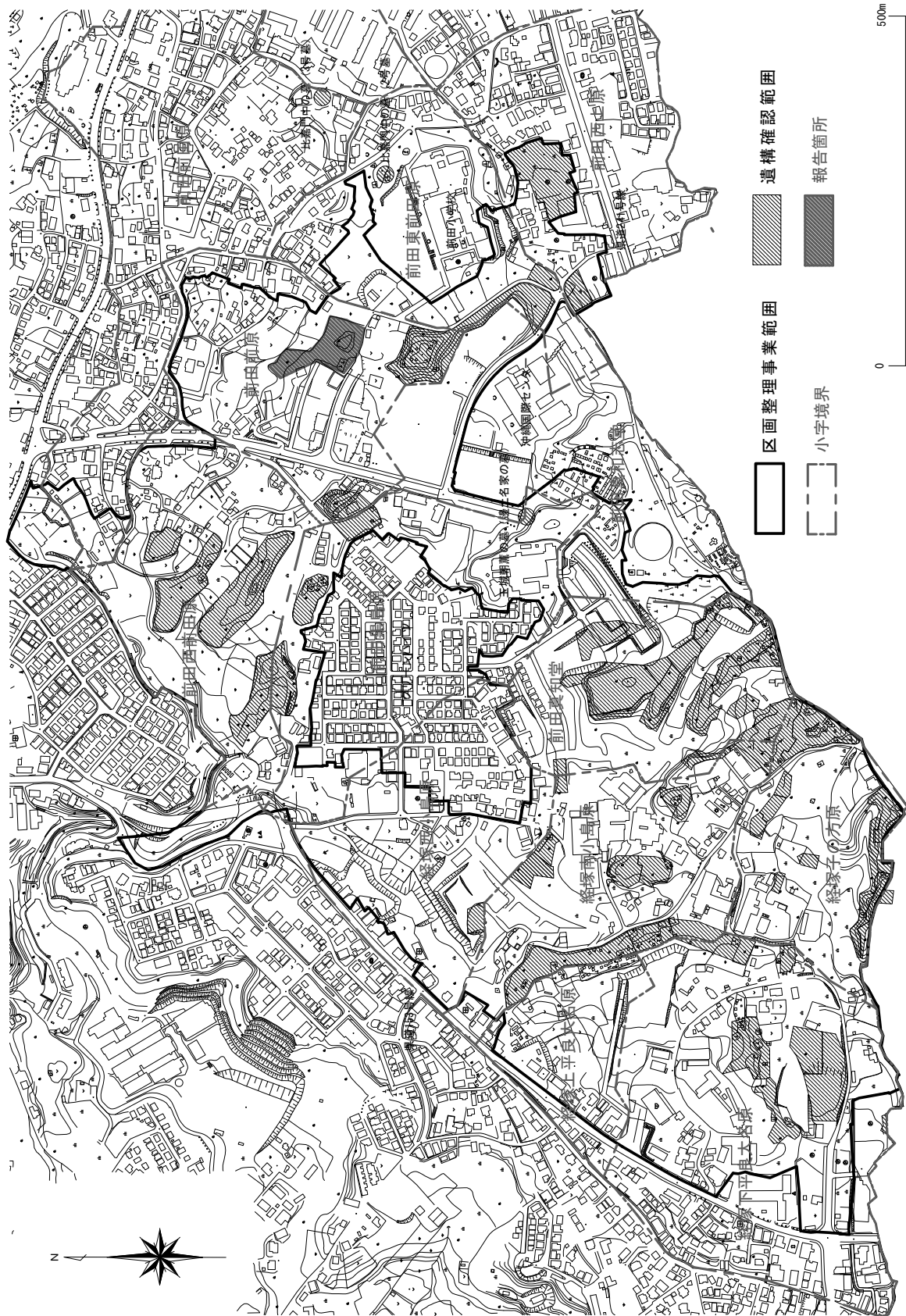
先に述べた戦時中に持ち込まれた陶磁器類も広義では戦争遺物であるが、それ以外にも様々な戦争遺物が出土している。最も多いのが鉄片であるがこれには砲爆弾片や鉄カブト片、缶詰片などがあると思われる。形の残るものとしては軍装備に関するものは極端に少なく37号遺構の薬莖1点、38号遺構の飯盒2点、47号墓の水筒1点くらいである。31号・38号遺構で出土した鋤先は壕を掘削するのに使用したものであろうか。また壕使用時の煮炊きに使ったものであろうか羽釜(38号遺構)、鍋(表採)が見つかったほか、算盤(31号遺構)、定規(51号墓)がある。なお第6・7表にある「ボタン」などは全て一次葬に由来するとはいえ、「ガラス製品」にも戦争遺物に分類すべきものも多分に含まれているはずである。47号墓の銭貨も大部分が昭和16～19年のアルミ製銭貨であり戦争遺物といえる。



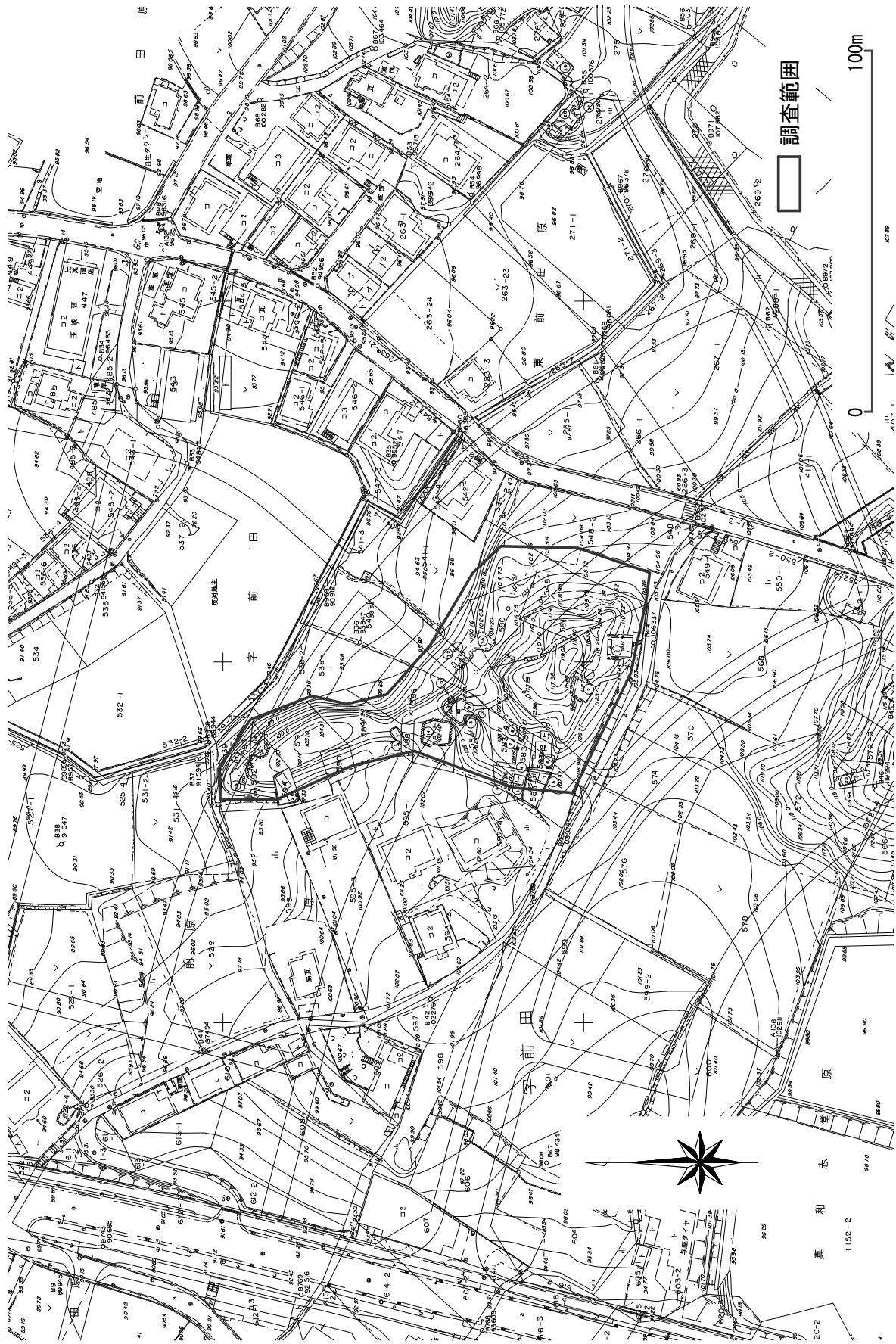
以上、本調査区での出土遺物の概要を示したが詳細については第4章に述べているとおりである。先にも述べたように戦時中に壕が掘削され、また墓が壕に転用されており墓としての遺物が限られている。しかし一方でこれだけ戦時利用されたにもかかわらず戦争に関わる遺物は非常に少なく、砲弾小片等の鉄片がその大半であった。それはこの丘陵では早くから遺骨収集が行われていたようで、その際に遺骨と一緒に遺物が持ち出されたことによると考えられる。

〈参考文献〉

- 安里進 1997 「伊祖の入れ御拝領墓の厨子甕と被葬者－近世墓の考古学的調査による家族復元－」  
『伊祖の入れ御拝領墓の厨子と被葬者』浦添市文化財調査研究報告書第25集
- 安里進・新里まゆみ 2006 「比嘉門中墓の家族史－家族の数だけ歴史がある－」『比嘉門中墓の家族史－家族の数だけ歴史がある－比嘉門中墓の調査概要』浦添市文化財調査研究報告書
- 浦添市教育委員会 2007 『市内遺跡発掘調査報告書 (1)』
- 浦添市教育委員会 2014 『前田・経塚近世墓群 5 経塚南小島原A丘陵』
- 浦添市教育委員会 2015 『前田・経塚近世墓群 6 前田真知堂A丘陵 (1)・前田西上原A丘陵・前田西前田原A丘陵』



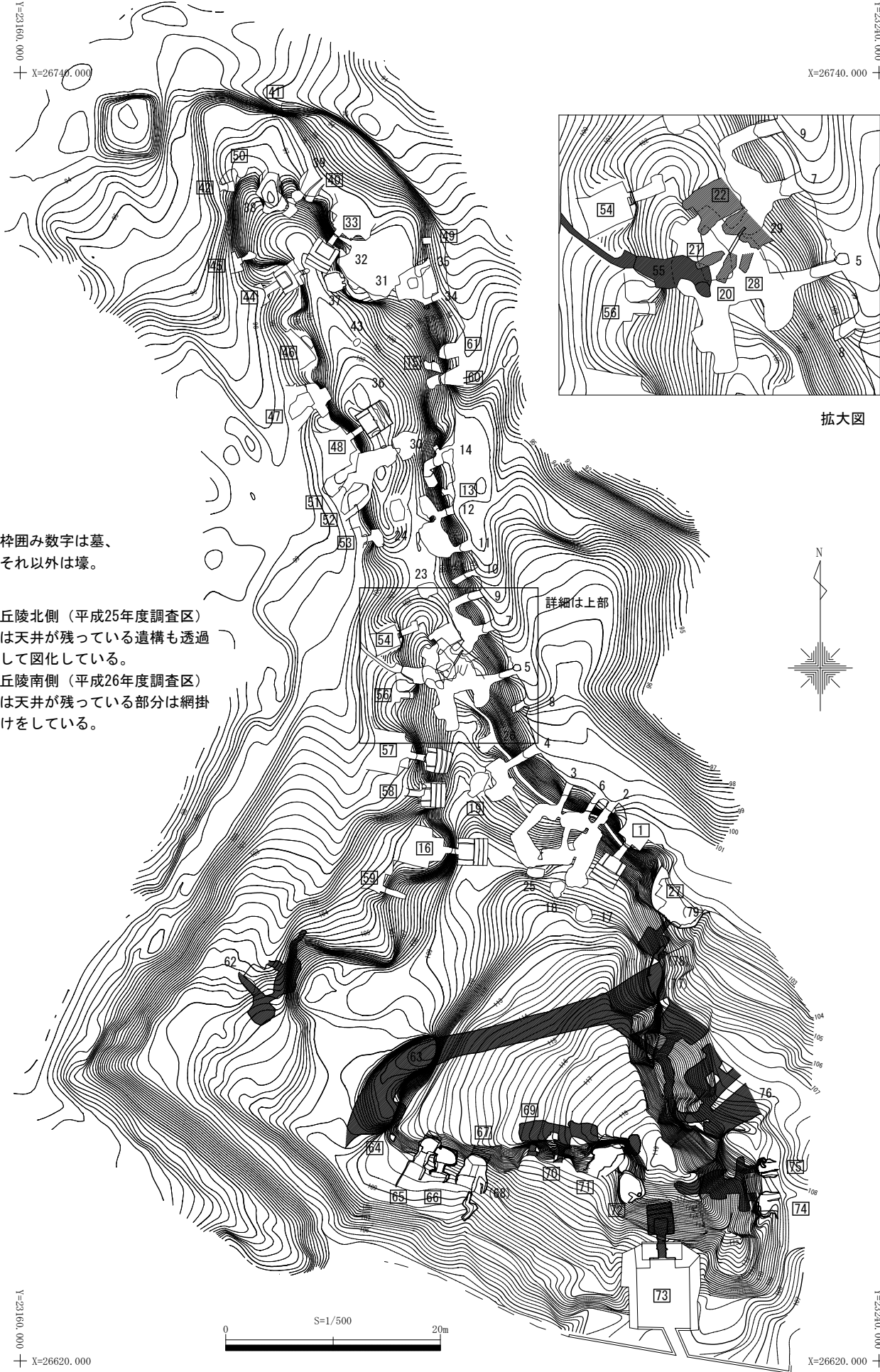
第3図 前田・経塚近世墓群調査地区の位置



第4図 前田原A丘陵の周辺

Y=23160.000  
+ X=26740.000 +

Y=23240.000  
+ X=26740.000 +



拡大図

※枠囲み数字は墓、  
それ以外は塚。

※丘陵北側（平成25年度調査区）  
は天井が残っている遺構も透過  
して図化している。  
丘陵南側（平成26年度調査区）  
は天井が残っている部分は網掛  
けをしている。

Y=23160.000  
+ X=26620.000 +

Y=23240.000  
+ X=26620.000 +

第5図 調査地地形と各遺構の位置

第1表 墓室平面形の類型(浦添市教育委員会2007『市内遺跡発掘調査報告書(1)』を一部改変、加筆修正)

類型	墓室平面形と棚の形状		墓室及び棚の特徴や構築方法
1類	a		楕円またはいびつな形状。
	b		直線的な規格性をもって造る。
	c		蔵骨器が数点置けるくらいの広さで、墓口から奥壁まで直線的に造る。平面形は縦長の方形となる。1人(一次葬人骨)を安置する墓として造られる。棺箱は遺構形状と同様に縦置きとなる。 ※ 奥壁の片側または両側を拡張して蔵骨器を安置する場合もある。
	d		蔵骨器が数点置ける広さで平面形は楕円に近い。1c同様一次葬人骨を安置する墓として造られる。1cでは棺箱を縦置きするが、1dは横置きになる。
2類	a		正面の奥壁を凸状(=出窓状)に成形。棚幅がシルヒラン幅より短くなる。
	b		正面奥壁と左右側壁を凸状に成形。
	c		正面奥壁と、左右側壁のいずれか片側を凸状に成形。
3類	a		平面形が「コ」字を90度左に回転した形状。棚は平坦になる。 ※ 左右棚の片側いずれかと正面棚の接地部に段差ができることもある。 ※ 棚の高さで分類できる可能性あり。
	b		平面形は3類aと同じだが、正面棚と左右棚の接地部に段差ができる。正面に比べて左右の棚が低くなる。
	c		奥壁(正面)と側壁のいずれか片側のみ棚を造る。平面形は「L」字を90度または180度、右に回転した形状。
4類	a		墓室内が楕円またはいびつな形状で、ほぼ平行するように正面1段の棚を造る。
	b		墓室内が直線的な規格で造られ、正面に1段の棚を造る。 ※ 棚の高さで細分類できる可能性あり。
	c		墓室内が直線的な規格で造られ、正面に2段の棚を造る。
5類	a		3類a+4類c
	b		3類b+4類c
	c		3類c+4類c
6類	a		3類a+4類b
	b		3類b+4類b
	c		3類c+4類b

第2表 遺構観察一覧(1)

墓室面積・サイズの( )は残存値

番号	外観形式	墓室類型	墓室(m <sup>2</sup> )	墓口方位 (入口方位)	墓室サイズ(m)			蔵骨器 の出土 状況	一次葬 の出土 状況	備考
					高さ	幅	奥行			
1	掘込墓	5b	6.31	北東 N42° E	2.08	2.59	2.79	×	×	天井が残存する遺構。羨道の中央を通り墓口の外まで延びる暗渠あり。
2	塚	—	(10.38)	北東 N41° E	—	—	—	×	×	天井が残存する遺構。6・3・4号遺構と内部でつながる。天井には掘削痕多数あり。戦争遺物が出土。
3	塚	—	(9.8)	北北東 N30° E	—	—	—	×	×	天井が残存する遺構。2・6・4号遺構と内部でつながる。
4	塚	—	(6.69)	東北東 N62° E	—	—	—	×	×	天井が残存する遺構。2・6・3号遺構と内部でつながる。1.5×2mほどの部屋があり、その奥の通路は縦横50cmと狭い。戦争遺物が散乱。
5	塚	—	(15.03)	東北東 N75° E	—	—	—	×	×	天井が残存する遺構。7・9号遺構につながる。最奥の天井には上部の55号遺構とつなぐ穴がある。戦争遺物が多数残存。
6	塚	—	(10.38)	北東 N40° E	—	—	—	×	×	天井が残存する遺構。2・3・4号遺構と内部でつながる。天井に掘削痕が多数残る。戦争遺物が出土。
7	塚	—	(21.34)	東北東 N76° E	—	—	—	×	×	天井が残存する遺構。5・9号遺構につながる。戦争遺物多数残存。
8	塚	—	1.08	東北東 N61° E	0.70	0.65	1.28	×	×	塚と思われるが奥行がない。クチャ層に突き当たったため掘削をあきらめた可能性がある。
9	塚	—	(2.61)	東北東 N77° E	—	—	—	×	×	天井が残存する遺構。5・7号遺構につながる。戦争遺物多数残存。
10	塚	—	1.56	東北東 N69° E	1.01	0.71	2.21	×	×	奥行がなく、クチャ層に突き当たったため掘削をあきらめた可能性がある。
11	塚	—	(8.38)	東北東 N65° E	—	—	—	×	×	天井が残存する遺構。12号遺構とつながる。戦争遺物が散乱する。
12	塚	—	(3.5)	東北東 N64° E	—	—	—	×	×	天井が残存する遺構。11号遺構とつながる。戦争遺物が散乱する。
13	掘込墓	1d	0.39	東 N89° E	0.56	0.75	0.40	×	×	奥行がなくその形状から塚としての機能が果たせないため、墓の可能性が高い。類型は1dであるが、成人の一次葬用としては小さい。
14	塚	—	3.30	東北東 N66° E	1.45	(0.98)	(3.75)	×	×	壁面に20cm程の灯火用の小窟が掘りこまれている。
15	掘込墓	1c	1.04	東 N82° E	0.85	0.20	0.66	×	×	内部は出入り口より低くなる。
16	掘込墓	5b	2.25	西 N82° W	1.99	2.56	2.77	×	×	天井が残存する遺構。墓室に厨子壘片や陶磁器が散乱する。
17	塚	—	1.97	不明	—	1.54	(1.78)	×	×	天井が崩落し、出入り口も不明。遺物はない。塹塚(タコ壺)か。
18	塚	—	1.63	不明	—	1.36	(1.62)	×	×	天井が崩落し、出入り口も不明。遺物はない。塹塚(タコ壺)か。
19	掘込墓	?	2.88	北北東 N34° E	0.99	1.62	2.69	×	×	天井は崩落しているが奥に一部残る。
20	掘込墓	?	0.84	北北東 N32° E	(0.51)	0.63	(1.62)	×	×	天井は崩落しているが奥に一部残る。
21	掘込墓	1c	0.64	東北東 N62° E	(0.79)	0.55	1.61	×	×	天井は崩落しているが奥に一部残る。
22	掘込墓	?	3.46	北東 N35° E	—	2.02	(2.11)	×	×	墓室奥に小規模の横穴が2ヶ所あり、塚に改造の可能性あり。

第3表 遺構観察一覧 (2)

番号	外観形式	墓室類型	墓室 (m <sup>2</sup> )	墓口方位 (入口方位)	墓室サイズ (m)			蔵骨器の出土状況	一次葬の出土状況	備考
					高さ	幅	奥行			
23	塚	—	2.05	東北東 N57° E	—	1.45	1.76	×	×	丘陵頂部にある方形のくぼみ。壙塚 (タコ壺) とみられる。
24	塚	—	2.16	—	—	1.92	1.38	×	×	丘陵頂部にある方形のくぼみ。壙塚 (タコ壺) とみられる。
25	塚	—	1.33	東 N85° E	—	1.45	1.76	×	×	横穴だが塚とみられる。
26	塚	—	1.88	東北東 N70° E	—	1.34	—	×	×	床は平坦。
27	掘込墓 (袖墓)	(1d)	0.5	南東 N125° W	0.46	0.85	0.55	×	○	79号墓の袖墓。一次葬の人骨 (幼児骨) が出土、周囲から鉄釘が出土しており棺箱に納められていた可能性あり。副葬品としてガラス瓶など出土。
28	掘込墓	1c	0.44	北北東 N18° E	—	0.47	(1.01)	×	×	天井と出入り口が崩壊した遺構。平面形からは墓と思われるが、床が出入り口側に向かって下り傾斜となっている。遺物は出土していない。
29	塚	—	1.25	—	(0.34)	2.17	(1.50)	×	×	天井から出入り口部分は崩落。床は平坦。
30	塚	—	4.24	—	—	1.88	(2.72)	×	×	天井から出入り口部分は崩落。
31	塚	—	10.4	—	(1.44)	(2.38)	—	×	×	出入り口付近は崩落し、天井は奥部分が残る。床から壁まで赤く変色し、被熱によるものと思われる。陶磁器片が大量に散乱した状態で出土。
32	塚	—	7.0	—	(2.15)	—	—	×	×	天井から出入り口部分は崩落。31号遺構と隣接し内部でつながっていたようである。
33	掘込墓	5a	6.24	北東 N40° E	2.26	2.49	3.14	×	×	天井が残存する遺構。ただし奥側は上へと掘削 (拡張) された形跡がある。厨子蓋片等の遺物が出土。
34	塚	—	(1.0)	東北東 N71° E	—	—	—	×	×	天井が残存する遺構。35号遺構とつながる。入って左手奥に灯火用の小窟が掘りこまれる。
35	塚	—	(5.6)	東北東 N66° E	—	—	—	×	×	天井が残存するが出入り口部分は崩落している。34号遺構とつながっている。中央に天井を支えるため削り残して柱としている。
36	塚	—	2.55	—	—	2.23	1.46	×	×	丘陵頂部にある平面楕円形の堅穴で、最大の深さは約1m。床は平坦。
37	塚	—	2.61	—	—	1.93	1.66	×	×	方形の堅穴で最大の深さは約1m。床は平坦。長軸の東側側面に小さな横穴 (一辺約20cmの方形) が2個ある。
38	塚	—	6.56	北 N0° E	(1.81)	2.44	(2.96)	×	×	奥部分を残して天井が崩壊した遺構。奥は一段 (約30cm) 高くなった奥行約1mの平場があり、39号遺構とつながる。陶磁器やガラス瓶等が出土。
39	塚	—	1.0	北東 N45° E	(1.95)	1.02	(1.49)	×	×	奥部分を残して天井が崩壊した遺構。奥で38号遺構とつながる。
40	掘込墓	1c	1.6	東北東 N60° E	(1.35)	1.03	3.17	×	×	天井が崩壊した遺構。生活雑器を中心とした陶磁器片が大量に出土。
41	掘込墓	—	0.9	北 N0° E	1.76	1.10	(1.64)	×	×	一部クチャ層を削っており、掘削途中で廃棄された可能性あり。
42	掘込墓	1c?	0.9	西 N94° W	0.92	1.03	0.7	×	×	墓室の天井は残存するが、墓口部分は崩壊している。
43	塚	—	0.34	—	—	(0.55)	(0.7)	×	×	丘陵頂部に位置する平面楕円形の堅穴で、最大の深さは約80cm。
44	掘込墓	6a	1.27	西南西 N115° E	(1.90)	2.38	2.65	×	×	天井と墓口が崩壊した遺構。

第4表 遺構観察一覧 (3)

番号	外観形式	墓室類型	墓室 (㎡)	墓口方位 (入口方位)	墓室サイズ (m)			蔵骨器の出土状況	一次葬の出土状況	備考
					高さ	幅	奥行			
45	掘込墓	1c	0.6	西南西 N104° E	0.90	0.85	1.55	○	×	天井が残存する遺構。墓口が石灰岩の蓋で塞がれていた。厨子壺は1基で、墓口側に傾いていた。墓口付近で20cm大のニーブスフニが出土。
46	掘込墓	?	(10.8)	西南西	—	3.65	(2.66)	×	×	天井が崩落し、出入り口も不明。奥壁に出窓状のくぼみあり。戦争遺骨、爆弾の破片とみられる鉄塊等出土。
47	掘込墓	?	6.5	南西及び西	(1.28)	(3.50)	(1.66)	×	×	天井が崩落した遺構。出入り口は2ヶ所ある。戦争遺骨、重ねて置かれた陶磁器等が出土。
48	掘込墓	5b	1.9	西南西 N119° W	1.89	2.59	2.99	×	×	天井が残存する遺構。簪や陶磁器片が出土。左棚側の壁に隣の51号墓につながる通路を掘削している。
49	掘込墓	1c	0.5	東 N90° E	(0.63)	0.68	(0.77)	○	×	天井は奥の一部を残し崩落。厨子壺は立った状態で土を被っていたが、蓋は落ち手前に人骨片が散乱していたため、一度転倒したものを再び立て直したとみられる。
50	掘込墓	?	0.6	北	—	1.08	(0.87)	×	×	天井が崩落した遺構。出入り口の位置は不明。ガラス瓶と小杯がセットで出土。右壁に灯火用小窟状の15cm大のくぼみがある。
51	掘込墓	?	(8.82)	南西 N140° W	1.63	(2.24)	(7.49)	×	×	形状から塚ではあるが、出入り口の形状や厨子壺片の出土から、墓を塚に改造したとみられる。奥に掘り込み隣の52号とつながる。壺や陶磁器片などが大量に出土。
52	掘込墓	?	(1.3)	南西 N124° W	0.81	0.62	(1.82)	×	×	天井が残存する遺構。奥に掘り込み隣の51号墓とつながる。形状・規模から墓であった可能性あり。
53	掘込墓	1b	2.2	西 N99° W	1.01	1.72	1.11	×	×	天井が残存する遺構。骨片が若干出土。
54	掘込墓	1c	0.63	西南西 N105° W	0.93	1.10	1.81	×	×	天井が残存する遺構。墓室右側に高さ5cmほどの低い段がある。
55	塚	—	3.6	西北西 N66° W	—	—	—	×	×	天井が残存する遺構。出入り口は溝状の通路で幅は狭い。最奥には下へ続く堅穴があり、丘陵東側の5・7・9号遺構とつながる。陶磁器類や鉄製品などが多く出土。
56	掘込墓	1c	0.7	西 N85° W	—	0.67	(1.20)	○	×	奥の一部を残し天井は崩落している。小型の厨子壺1基出土。
57	掘込墓	5b	1.2	西北西 N74° W	1.86	2.25	2.44	○	×	天井が残っている遺構。墓口は閉じていた。厨子壺5基を安置。
58	掘込墓	5b	5.7	西 N83° W	2.09	2.54	2.44	×	×	墓口部分の天井は崩落している。墓室から遺物が数点出土しているが厨子壺はない。
59	掘込墓	1c	2.1	西北西 N60° W	0.95	0.67	1.99	○	×	天井が残存する遺構。崩落した形跡はないが内部は土が充満していたことから、意図的に埋めた可能性がある。厨子壺1基出土。
60	掘込墓	?	4.5	東	1.74	1.43	2.76	×	×	天井が残存するが、墓口付近は崩落している。内部は一段高くなっている。形状から塚として拡張されている可能性あり。
61	掘込墓	?	3.2	東 N88° E	1.10	1.57	(1.56)	×	×	奥の一部を残し天井は崩落している。
62	塚	—	1.4	北西 N36° W	1.28	(60)	(4.10)	×	×	出入り口付近は崩落し、天井は奥部分が残る。地山削り出しのかまどを造る。
63	塚	—	—	西南西	—	—	—	×	×	大規模な塚で丘陵反対側へつながる。
64	掘込墓	?	(0.23)	不明	(0.33)	(0.49)	(0.48)	○	×	墓室のごく一部が残る埋没墓で、全体の様子は不明。
65	掘込墓	4b	3.05	南南西 N147° W	(1.93)	1.46	3.36	○	×	天井が崩落した遺構。墓口に蓋石が残る。厨子壺が4基出土。



第5表 遺構観察一覧 (4)

番号	外観形式	墓室類型	墓室 (㎡)	墓口方位 (入口方位)	墓室サイズ (m)			蔵骨器の出土状況	一次葬の出土状況	備考
					高さ	幅	奥行			
66	掘込墓	1b	2.79	南南西 N147° W	(1.28)	1.86	2.45	○	×	天井が崩落した遺構。墓口に蓋石が残る。蔵骨器が8基出土。
67	掘込墓	4b	2.78	南南西 N158° W	(2.03)	1.85	2.56	○	×	天井が崩落した遺構。墓口はニーブヌフニ、墓室前壁には石灰岩を積んでいる。庭に塹壕が掘られている。墓室から厨子壘4基出土。
(68)	掘込墓?	3a?	(1.20)	?	(0.48)	(0.81)	(1.49)	×	×	67号墓の墓庭にわずかに痕跡が残る。墓の可能性はあるが不確定 (墓であれば崩壊後、67号墓が造られた)。
69	掘込墓	2a	—	南南西 N172° W	—	2.8	2.7	×	×	墓庭に獣骨埋設遺構。塚に改造され70号墓とつながる。
70	掘込墓	?	—	南南西 N168° W	—	1.1	—	×	×	塚に改造され69号墓とつながる。
71	掘込墓	2a	?	南南西 N147° W	—	2.3	2.8	×	×	墓口前に獣骨埋設遺構。ニーブヌフニと石灰岩を使ってサンミデーが作られている。塚に改造され70号墓とつながる。
72	掘込墓	1b?	(5.75)	不明	(1.33)	(2.31)	(2.49)	○	×	天井、墓口、側壁が崩落した遺構。墓庭は71号墓と共有していたか、もしくは丘陵斜面崩壊により消失している。厨子壘、転用蔵骨器が出土している
73	平葺墓	5a	7.50	南南西 N141° W	2.09	2.27	4.98	×	×	空き墓。墓室は掘り込みによって形成し、外部は琉球石灰岩・マチナト石灰岩による平葺墓。一部セメント使用。
74	掘込墓	1c?	(3.60)	東 N89° E	(1.45)	1.96	(1.84)	×	×	天井が崩落した遺構。墓室を拡張し塚に改造、75号墓とつながっている。墓庭はもともとないか、丘陵斜面崩壊により消滅している。
75	掘込墓	1c?	(2.84)	東 N82° E	(1.05)	1.60	(1.78)	×	×	天井が崩壊した遺構。墓室を拡張し塚に改造、74号墓とつながっている。炭化物が集中した焼け跡あり。墓庭はもともとないか、丘陵斜面崩壊により消滅している。
76	塚	—	—	—	—	—	—	×	×	掘り込み (横穴) があり通路で63号遺構とつながる。墓を改造したものは不明。
(77)	塚	—	—	—	—	—	—	×	×	63号遺構と同一の遺構。
(78)	—	—	—	—	—	—	—	×	×	77号遺構と79号墓をつないだ通路。
(79)	掘込墓	—	—	—	—	—	—	×	×	天井が残存する遺構。塚に改造されているが、崩落の可能性があったため未調査。墓庭の一部に石灰岩の石積みが残る。27号墓は袖墓 (厳密には同一墓)。

第6表 出土遺物一覧(1)

墓・塚 種類	3号	4号	8号	10号	11号	12号	13号墓	14号	16号墓	19号墓	27号墓	31号	33号墓	34号	35号	36号	37号	38号	39号	40号墓	41号墓	45号墓	46号墓	47号	小計 1		
	壕内	壕内	壕内	壕内	壕内	壕内	墓庭	壕内	墓室	墓室	墓室	壕内	墓室	壕内	壕内	壕内	壕内	壕内	壕内	墓室	墓室	墓室	墓室	壕内			
蔵骨器	ボー ジャー形	蓋																								0	
		身																									0
		破片																									0
	マンガン 釉 甕形	蓋								2				1									1	1		5	
		身								1				1										1		3	
	マンガン 釉 応付甕形	蓋																									0
		身																									0
	御殿形 (陶製)	蓋												1													1
		身												1													1
		破片																						1		1	
転用	蓋																									0	
	身																				1					1	
現代もの								1																	1		
陶磁器	瓶	完形		1					1																	2	
		破片							2										1			1				4	
	皿	完形		1	1				1										1			5			12	21	
		破片		1	2				2										2	2	1	18		5		33	
	小杯	完形							1		1		1									1			1	5	
		破片																				1				1	
	湯呑	完形			2	2		1		2		1			1				1	2	1	12			10	35	
		破片			3	2			3			1							4			12			1	26	
	碗	完形		1	3							1							6		3	22			8	44	
		破片		5	3				1			1			1				4	2	2	33		18	1	71	
	壺	完形										1									2				2	5	
		破片			19	2	1			1		6		1	1				3	7	2			4	6	53	
	アンダ ガーム	完形																				1			1	2	
		破片			1											1						3		1		6	
	壺	完形																								0	
		破片																				1		1		2	
	鉢	完形			1																		1			2	
		破片			2					1		3								1		2				9	
	急須	完形											2												1	1	
		破片											2							2		1			1	6	
蓋	完形	1		1								4							1		4			2	13		
	破片																				1		4	3	8		
不明	破片			4															10				2		16		
陶質土器																		1							1		
キセル	雁首																							1	1		
	吸口																								0		
簪											1														1		
指輪																						1			1		
櫛									1										1						3		
銭貨		2																							22		
瓦				1																	2				3		
釘											15					3	15							7	40		
ボタン										2	30					37								5	74		
ガラス製品			5	4		2			1	1	5		1	2			2	4	4	4	4		1	2	42		
石												10	1										1		12		
木片																									0		
戦争遺物			7	1						1	4	1	1				2	7	3				3	7	37		
その他				1								2	1		1	5				1		3		2	16		
合計	1	2	21	49	6	3	1	10	6	5	20	72	8	3	7	45	19	38	32	16	128	3	50	91	554		

第7表 出土遺物一覧(2)

墓・塚 種類	48	49	50	51	52	53	56	57	59	60	64	65		66		67		72	73		75	79	表 探	小 計 2	合計 (小計1+2)	
	号墓 墓室	号墓 墓室	号墓 墓室	号墓 墓室	号墓 墓庭	号墓 墓室	号墓 墓室	号墓 墓室	号墓 墓室	号墓 墓室	号墓 墓室	号墓 墓室	号墓 墓庭	号墓 墓庭	号墓 墓室	号墓 墓庭	号墓 墓室	号墓 墓庭	号墓 墓室	号墓 墓庭	号墓 墓室	号墓 墓庭				
蔵骨器	ボー ジャー形	蓋										4		6		1		1					1	13	13	
		身										2	4		6		1		1						14	14
		破片			1							3					4	4						10	22	22
	マンガン 釉 壺形	蓋		1	7			1	4	1							3								17	22
		身		1	6			1	4	1							3								16	19
		破片	6		12	1					2			1									3	17	42	43
	マンガン 釉 底付壺形	蓋							1															1	2	2
		身							1																1	1
	御殿形 (陶製)	蓋			2																				2	3
		身			2																				2	3
破片				1																			1	2	3	
転用	蓋													1										1	1	
	身			1										2				1						4	5	
現代もの																							1	1	2	
陶磁器	瓶	完形																						4	4	6
		破片																						2	2	6
	皿	完形									1														0	21
		破片	1		1		5				1													8	16	49
	小杯	完形		1					1									1							3	8
		破片					1																	1	2	
	湯呑	完形									1														1	36
		破片																						11	11	37
	碗	完形	3		8	2	1											1						3	18	62
		破片	3	2	5		4				1							4						36	55	126
	壺	完形			1																				1	6
		破片					1												4					16	21	74
	アンダ ガーム	完形																							0	2
		破片																						1	1	7
	甕	完形			1	1																			2	2
		破片																						4	4	6
	鉢	完形																							0	2
		破片		1		1					2													3	7	16
	水注・急 須	完形																							0	1
		破片																							0	6
蓋	完形			3						1														4	17	
	破片			1																			1	2	10	
不明	破片					1							3		1	4	2	6	1		2		5	25	41	
陶質土器																								0	1	
キセル	雁首																	2						2	3	
	吸口							1																1	1	
簪		1						1				1												3	4	
指輪				1																				1	2	
櫛																								0	5	
錢貨												4												4	28	
瓦		1																					3	4	7	
釘						23		2										5					1	31	71	
ボタン		1		2		3																	3	9	83	
ガラス瓶	1		1	6	1	3		1															4	17	59	
石					1																			1	13	
木片				3																				3	3	
戦争遺物	1	1		4	1	2																	8	17	54	
その他													12			2		5		3			4	26	42	
合計	16	8	2	68	9	43	2	16	2	8	5	13	16	15	1	18	6	31	1	3	2	3	148	436	1,072	





## 第4章 調査の成果

調査では合計42基の墓が確認された。これらの遺構と遺物の概要については、第3章で示したとおりである。本章では、これらの墓の中から遺構と遺物の残存状況が良好である遺構を図示した上で、その詳細の報告を行うこととする。なお、遺物の取り上げ番号については遺構図中に番号を図示した。

本章で詳細な報告を行う墓以外については、第5・59・60図と第2～7・42・43表及び巻末に掲載した図版をもって報告とする。

### 第1節 1号墓

#### (1) 遺構 (第6図)

柄鏡状の形を呈する本丘陵の、「柄」部分にあたる北半で東側に面した急斜面には1号墓から14号遺構までが連続して横並びに構築される様子が窺われた。しかしこれらのほとんどは戦時中に避難壕に改造されており、蔵骨器の破片が各所に散見されるものの、遺構として墓の形態を維持するものはわずかであった。その中であって1号墓は墓遺構の形態が残存する状況を確認することができた。

1号墓は、ほぼ垂直に近いニービの崖面を掘りこんで構築された掘込墓で、入口壁面から天井までが残存する。墓口は幅0.62m、高さ0.87mで墓口方位を北東(N42°E)に向ける。入口から羨道部の中央床面には幅13cm、深さ26cmの溝が掘られ、内部に石灰岩礫が埋め込まれた暗渠が検出された。墓室は幅2.59m×奥行2.79mで平面形は正方形を呈し、シルヒラシから天井までの高さが2.08mと比較的規模の大きな遺構である。左右の壁面側に1段・奥壁側に3段の棚を有しており、5類bの墓室形態に分類される構造である。

墓室にはシルヒラシ中央から右棚直下にかけて、コの字状に並べられた状態の石灰岩礫が検出された。浅い溝を掘り込んだ中にシルヒラシ中央では大きく、右棚直下では細かな礫が用いられている。入口から羨道にかけて検出された暗渠と同様の構造であるが、これとは連結しない。また、シルヒラシ中央と左棚の中間地点には直径約22cmの円形のピットが検出されている。

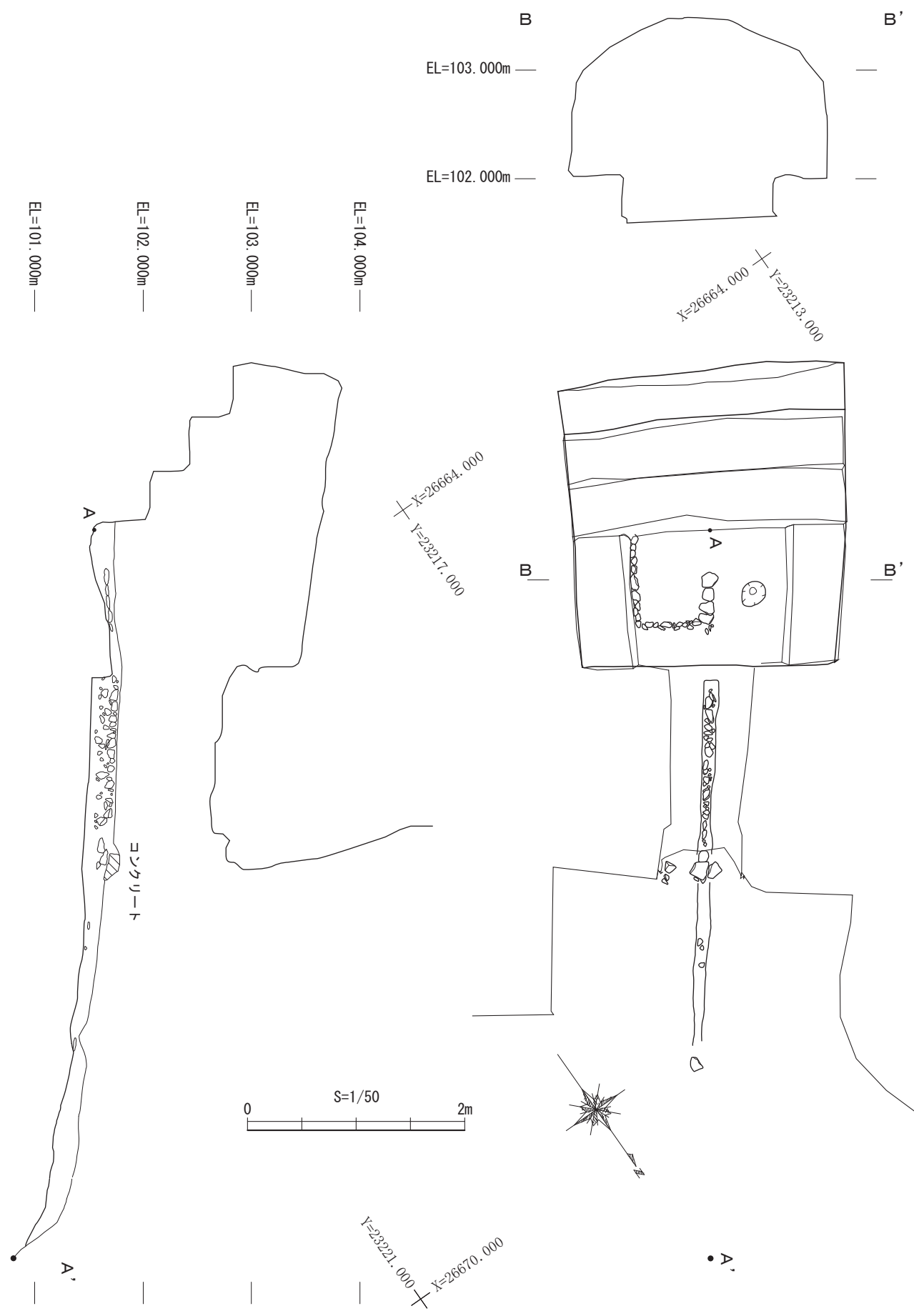
#### (2) 遺物

1号墓から出土した遺物の種類及び数量の内訳は第6表に記載した。出土は主に覆土中から蔵骨器の破片等が確認されたものの、墓室内に設置状態で残存する蔵骨器等は検出されなかった。

### 第2節 27号墓

#### (1) 遺構 (第7図)

本遺構は79号墓の墓庭の壁面にニービの地山を掘り込んで構築された掘込墓である。墓室形状は横長の長方形で、幅0.85m×奥行0.55mの小規模な墓で、墓口方位は南東(N125°E)を向き、棚などは持たない。墓室内からは一次葬人骨が検出された。頭位を左壁(東)に向け、仰



第6図 1号墓 遺構図

臥の状態概ね全身の部位が残存している状況が確認された。脳頭蓋や手足の骨がやや散乱しており、原位置からは外れているものの、人骨を取り囲むように鉄釘や木片が検出されていることから、棺箱に入れられた状態で納められたものであると考えられる。寛骨の隣に小杯が、それに隣接してガラス製の瓶が、また、頭部付近からは貝製のボタンが出土しており、同様に棺箱の中に納められていたものではないかと想定される。

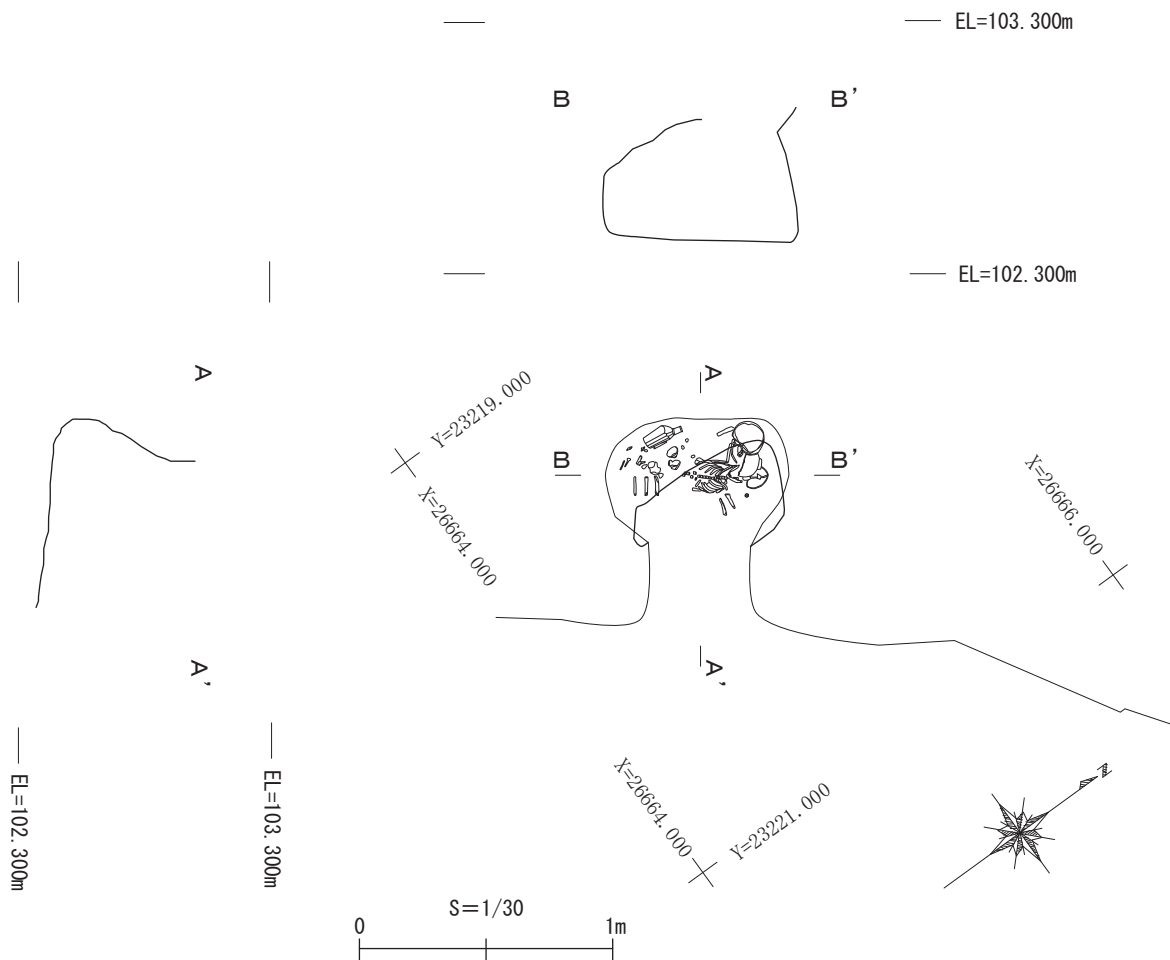
規模からすると本遺構は当該一次葬を目的として構築されたものと考えられ、79号墓の袖墓であったと捉えられる。

(2) 遺物 (第9図、第8表)

本遺構内からは一次葬に伴うとみられる小杯・貝製品2点・ガラス製品および鉄釘・木片が出土した。このうち前者の4点について図化するとともに観察所見を以下に記載する。

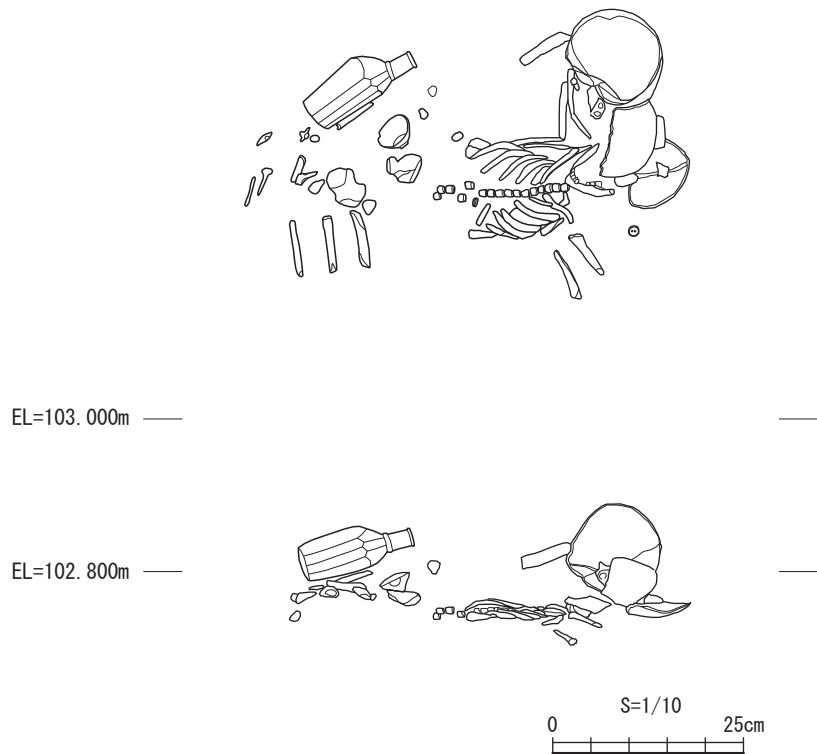
第9図1は、沖縄産施釉陶器の小杯である。

第9図2および3は、貝製のボタンである。2点とも表面の中央に円形のくぼみを掘りこみ、糸通し用の孔を二つあける。内面ともに真珠層の光沢を良好に残しているが、残存状態はやや不良で、風化による剥離が縁辺部に観察される。



第7図 27号墓 遺構図





第8図 27号墓 一次葬人骨出土状況

第9図4は、ガラス製の瓶である。前面には鳥の模様と「TRADE MARK」の文字が陽刻され、ボトルネックの部分から先端部分が胴部に対して斜めに取り付けられている。その形状からガラス製の哺乳瓶であると考えられる。被葬されている一次葬人骨は乳児と想定されることから、使用品を副葬したものではないかと思われる。

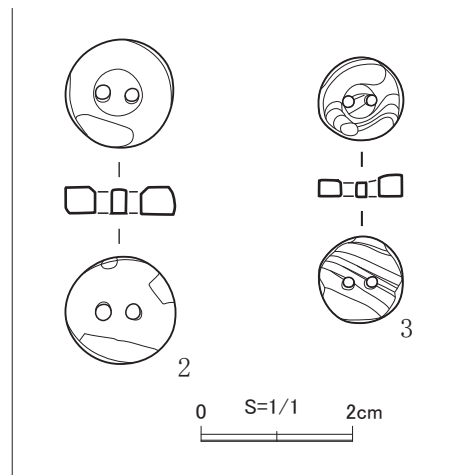
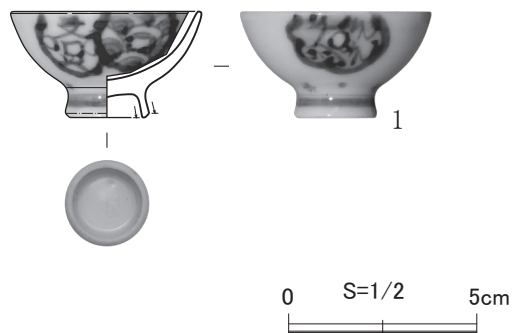
### (3) 人骨

一次葬で検出された未成人骨は、残存する上顎骨と下顎骨の乳歯の萌出状況から乳児～幼児期（1歳前後）の年齢であったと推測される。詳細については第5章に記載するため参照いただきたい。

## 第3節 31号遺構

### (1) 遺構（第10図）

31号墓は丘陵北端近くで東側に向けて急激に下る斜面の中腹に掘り込まれて構築された遺構である。残存状態は悪く、奥壁と奥壁に接する左右の壁面と天井及び床面がわずかに残存する状態で検出された。遺構の残存幅は2.38mで、床面上からは多量の陶磁器類が出土した。出土遺



第9図 27号墓 出土遺物

第8表 27号墓 出土陶磁器観察表

単位: cm

図番号	出土地点	器形	残存部位	口径	器高	底径	施釉	釉色・色調	貫入	文様等	備考
第9図 1	墓室	小杯	完形	5.1	2.8	2.2	コバルトでの絵染付後、全体に透明釉を掛ける。畳付は露胎。	全面:透明色 文様:コバルトの鮮やかな発色。	なし	外面の2カ所に銭文。うち一つは表裏。高台を取り囲むように点と枝葉が交互に3カ所ずつ描かれる。	底部に「円山」の押印。

物は概ね近代の陶磁器であることから、戦時中に壕として転用された遺構であると考えられ、墓遺構としての要素を窺うことは難しい状態である。また、床面から壁面にかけて赤色を呈しており、被熱による変色が疑われる。

(2) 遺物 (第11図、第9表)

陶磁器類を中心に多量の遺物が床面上から出土しており、その種類及び内訳については第6表に記載した。基本的には近代の陶磁器類が主体であることから、戦時中に持ち込まれたものであろうが、金属製の簪などは墓遺構からも出土することから、改変前からあったものかどうか判断

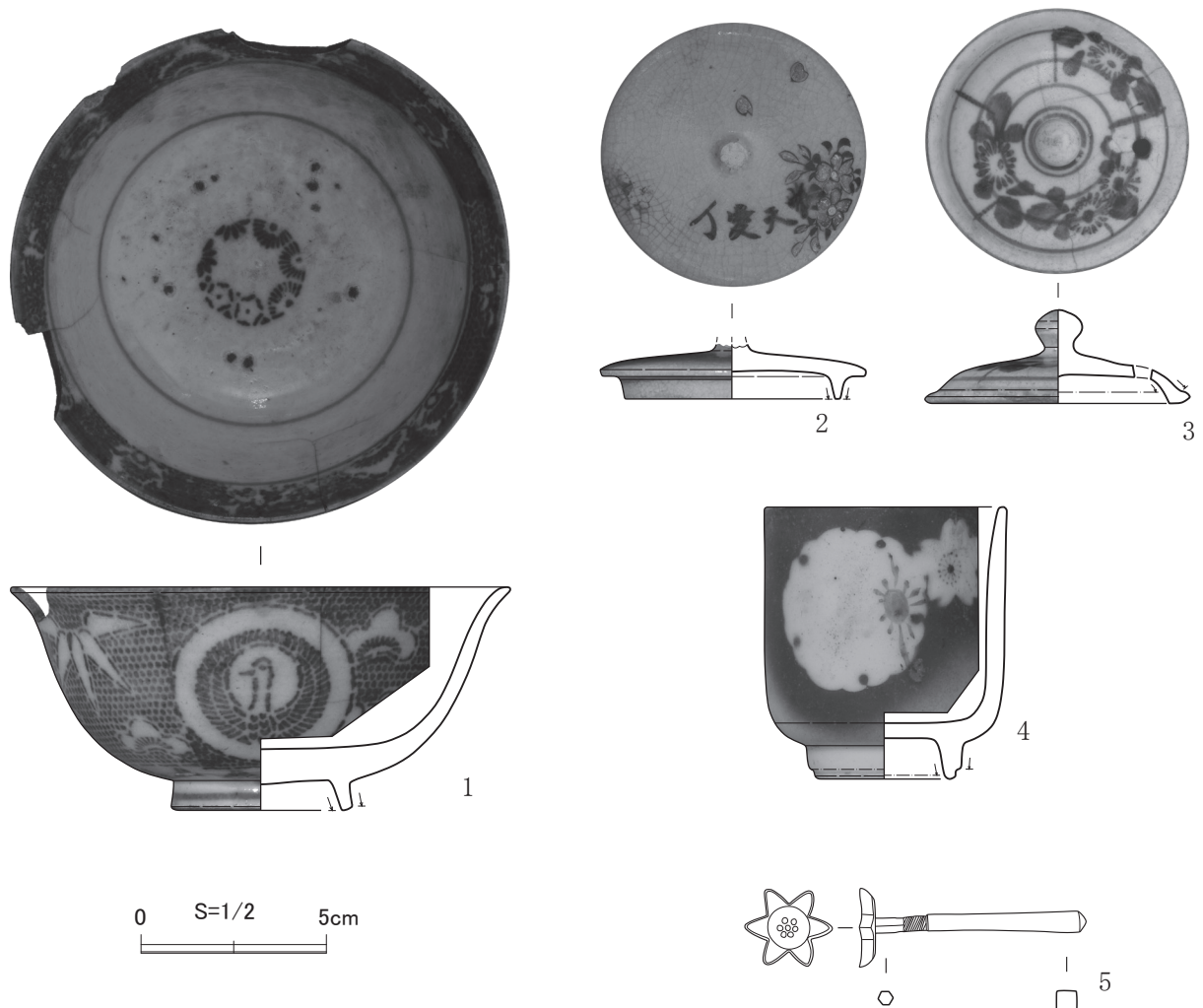


第10图 31号遺構遺構図

第9表 31号遺構 出土陶磁器観察一覧表

単位: cm

図番号	出土地点	器形	残存部位	口径	器高	底径	施釉	釉色・色調	貫入	文様等	備考
第11 図1	奥壁際	碗	ほぼ完形	13.04	6.0	4.9	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。見込に目痕あり。置付は露胎。	全面: 透明色 文様: コバルト。内面は褐色にくすむ	なし	外面は点描を全体に描く中に、松竹梅文と3カ所の鶴。内面は口縁に沿って点描と松竹梅文を、見込に松竹梅文を配する。	スキャンマイク/砥部産/大正~昭和/底部に印なし
第11 図2	奥壁際	蓋	つまみ欠損	—	—	5.8	全体に透明釉を施釉後、絵付け。最下面は露胎。	全面: 透明釉 文様: 葉を褐色、花弁を銀色、花芯を黄色で彩色。	あり	上面に花と枝葉の文様と「敬天愛人」の文字が描かれる。花弁は顔料を厚く載せ、立体感を出す。	
第11 図3	奥壁際	蓋	完形	1.25 ※	2.5	7.1	外面にコバルト絵の絵染付後、全面に透明釉を施釉。合口面は露胎。	全面: 透明釉 文様: コバルトの鈍い発色	なし	花と花を囲む葉で構成される文様が3カ所に描かれる。つまみを中心とする圏線が五条みられる。	※口径はつまみ径。
第11 図4	奥壁際	湯呑	完形	6.5	7.3	3.8	緑色の顔料による絵染付後、全面に透明釉を施釉。置付は露胎。	全面: 透明釉 文様: 緑色および褐色	なし	正面に桜と五稜形の異形雪紋?、旭日旗の文様が配される。	



第11図 31号遺構 出土遺物

の難しいものである。ここでは、完形ないしほぼ完形の遺物について図示するとともに観察所見を記載する。

第11図1は、砥部産の碗である。コバルトによる型絵付けがなされたもので、口縁の一部が欠損するが概ね完存する。高密度の点描により文様が描かれ、同一の型による3単位の文様で、コバルトの色調は濃淡が一定しない。

第11図2～4は、完存する湯呑および湯呑の蓋であるが、文様が異なることから、セット関係にはならないものである。

第11図5は、金属製の簪である。頭部が花の形状であることから、男性用の髪差である。表面を緑錆が覆うことから銅製であると思われる。頭部の花卉は6枚、首部の断面は六角形、ムディ断面は円形、竿部断面は正方形を呈しており、竿部の先端に向かい太くなる。

## 第4節 33号墓

### (1) 遺構 (第12図)

33号墓は丘陵北端近くで東側に向けて急激に下る斜面の中段を掘り込んで構築された掘込墓で、墓庭から入口および墓室までが残存している様子が確認される。墓庭は壁面が攪乱されているものの、元の形状が概ね想定できる状態である。また、墓室側と右壁直下の隅に方形のピットが検出された。墓口は幅0.64m・高さ0.87mを測り、方位を北東(N40°E)に向ける。墓口の壁面には幅約8cmの段差が設けられており、その地点から墓室側の幅は0.48mと狭くなる。扉石をはめ込むための構造であると考えられる。遺構検出時には、扉石が墓庭側へ向けて倒れた状態で検出された。

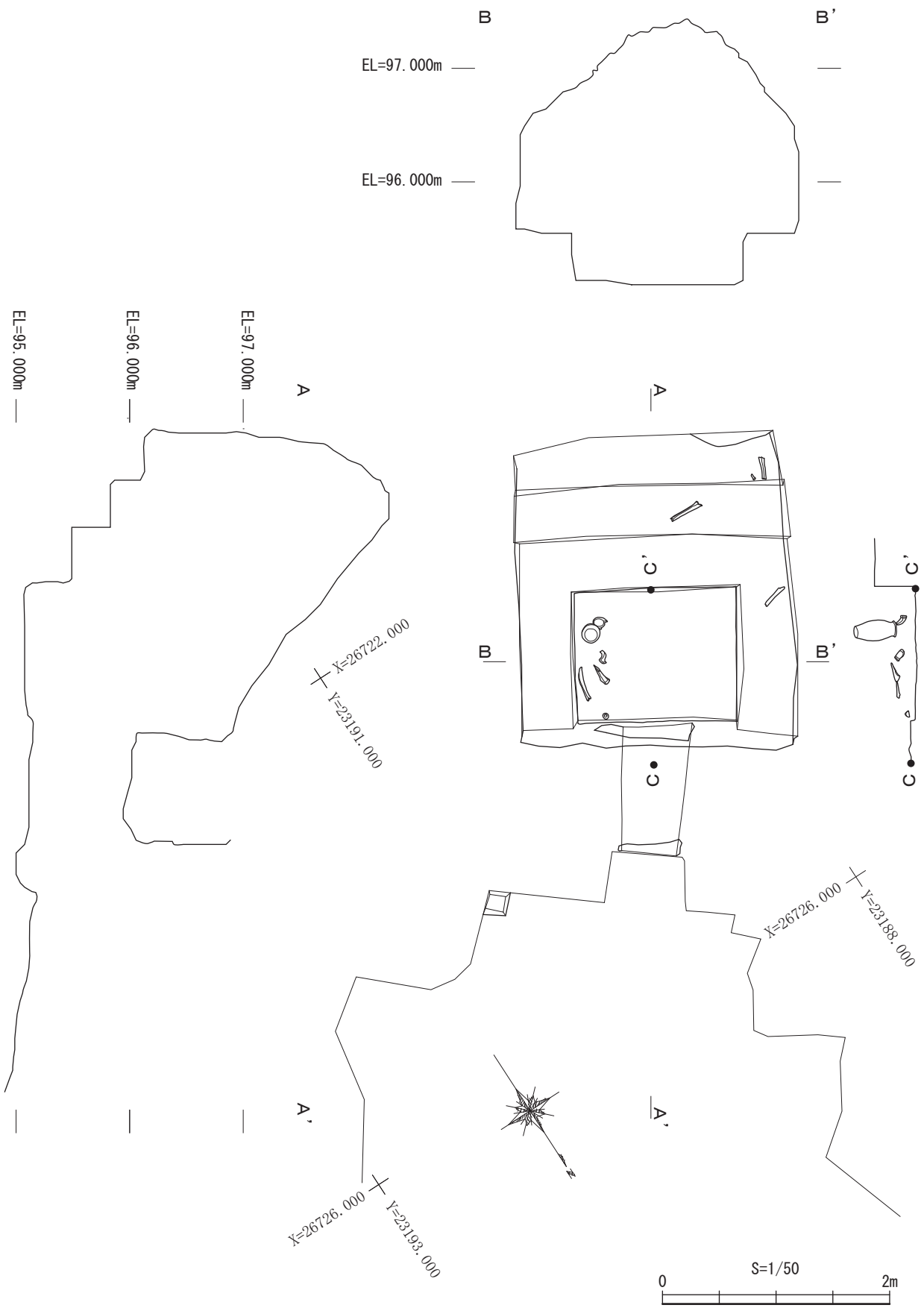
墓室は幅2.49m・奥行き3.14mで奥に長い方形の平面観を呈し、左右の壁面と奥壁側にコの字状の棚を設け、奥壁際には更に2段の棚を造る。墓室形状の分類における5類aに区分される形態である。墓室内には多量の土砂が堆積しており、一方で、天井はシルヒラシ直上で約2m超を測り、奥壁側に向かうにつれてレベルが上がってゆくことから、崩落により墓室を埋没させ、天井は元来の形状とは異なる状態で検出されたものと考えられる。

シルヒラシの床面近くの堆積土中からはマンガン釉甕形蔵骨器の身が倒立状態で検出された。また、その直下からは割れた状態の蓋も出土している。その他、近隣に人骨が散乱して出土している。天井崩落に伴い転倒した状態で埋没したのではないかと推測される。

### (2) 遺物 (第13・14図、第10～12表)

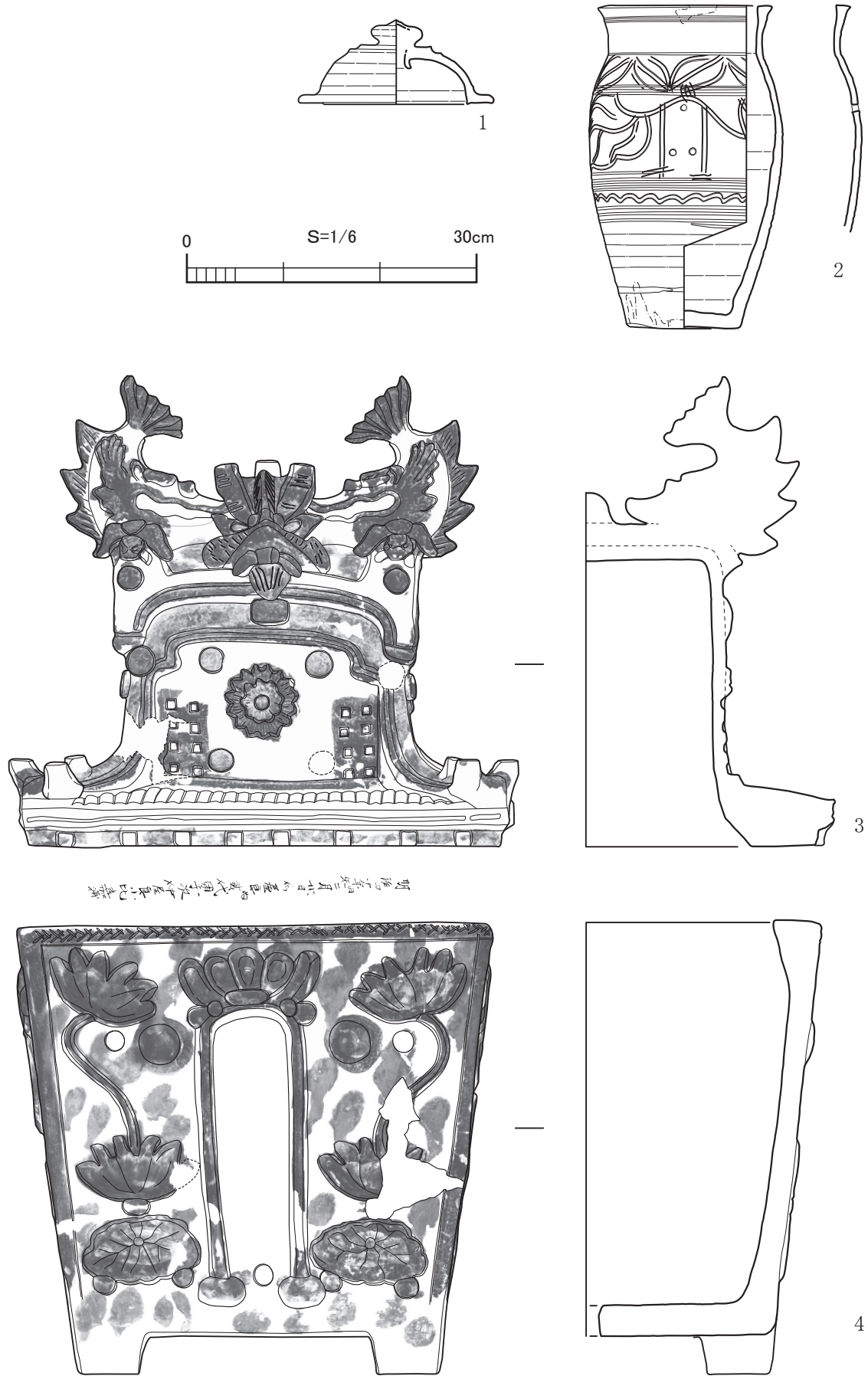
本遺構から出土した遺物の種類及び内訳については第6表に記載した。ここでは、完形で残存しているマンガン釉甕形と家形蔵骨器各1点と、陶磁器の小杯および石製品を図示するとともに観察所見を記載する。

第14図2は砥石である。表札形に加工する。全面に研磨面が見られるが、裏面左上部および下部に敲打痕が残る。基本的に長軸に沿った擦痕が見られるが、両側面には横方向に線状の短い刻み、裏面右上部にはU字状の溝を有する。裏面右側縁部は角が取れ丸みを帯びる。表面右側下、



：

第 12 图 33 号墓 遺構図



第 13 图 33 号墓 出土遗物 (1)

右側面下、裏面左側面下にかけて錆が付着し、特に左側面下部は一部薄く板状にはがれている箇所が見られることから、これらは使用痕と判断される。粘板岩製。長さ 20.15cm、幅 7.50cm、厚さ 0.80cm。

### (3) 銘書

御殿形蔵骨器の身の縁に直線に並べて書かれた銘書が確認できた。洗骨年や被葬者名が書かれており、詳細について第 11 表及び第 44 表に記載している。

第10表 33号墓 出土蔵骨器(蓋)観察表

※計測値は上から壘形:つまみ台径・口径・内径・器高・体部高  
御殿形:棟長・桁長・梁長・器高

図番号	取上番号	出土地点	形式	計測値 (cm)	つまみ形 つまみ接合部 孔 つまみ台 鏝 かえり	文様	調整痕	釉薬	銘書	死去年	洗骨年	備考
第13図 1 図版 25-4	—	墓室	マンガン 釉壘形	7.3 20.2 14.7 8.7 6.2	宝珠型 有孔 2段 有(2.8cm) 有(2mm)	なし	外面:つまみ台の2段目の上面は凹む。庇と胴部の境界に凹線が廻る。つまみ台下部はヘラケズリ。 内面:ナデ調整	外面:全体にマンガン釉 内面:露胎	有(判読不能)	—	—	
第13図 3 図版 25-6	—		御殿形 (陶製)	43.3 50.7 39.2 31.2	—	大棟両端に鮫を配し、中央に獣面、左右に獅子頭がそれぞれ貼付。上部の軒は唐破風形で、正面中央に花文。一階瓦屋根の四隅にはツノが貼付られる。	型作り成型後、ナデ調整。	外面:全体を白化粧後、コバルト・緑・褐色釉で彩色後、透明釉。 内面:露胎	なし	—	—	

第11表 33号墓 出土蔵骨器(身)観察表

※計測値は上から壘形:口径・胴径・底径・器高  
御殿形:口縁外法・底部外法・器高外法・口縁内法・器高内法

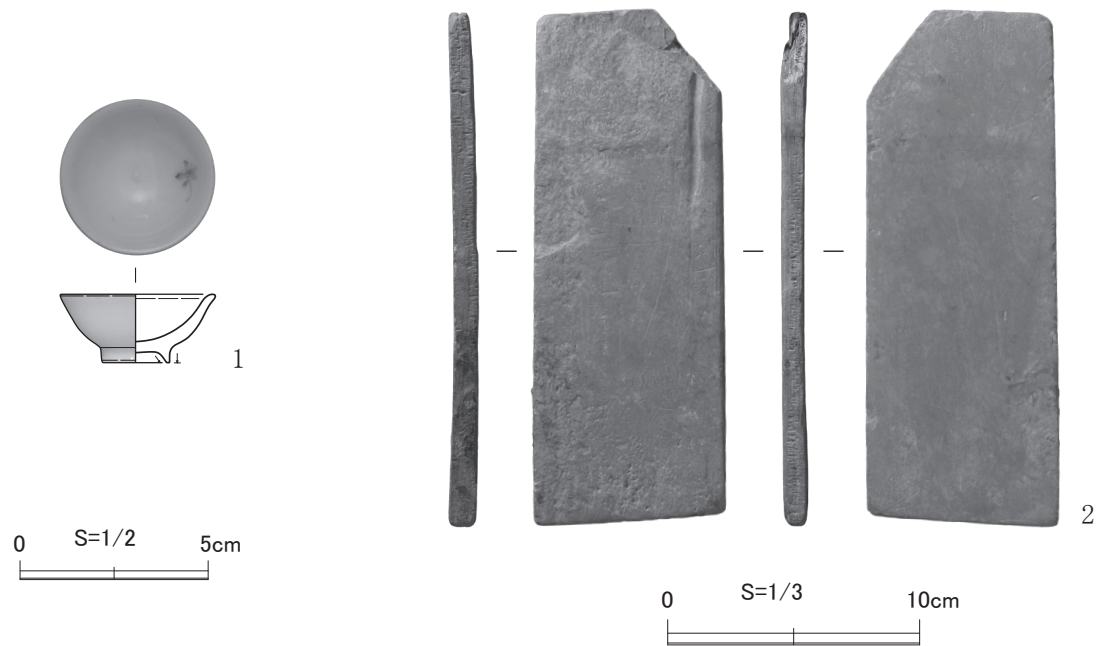
図番号	取上番号	出土地点	形式	計測値 (cm)	窓枠 / 屋門	窓数 / 形	横帯	文様	調整痕	底面孔	釉薬	窯印	銘書	備考
第13図 2 図版 25-5	—	墓室	マンガン 釉壘形	18.0 20.1 11.7 33.5	唐破 風形	3個 円形	凹2 凹1 凹3 凹3	又状工具による沈線で、肩部に葉文、胴部に屋門及び蓮華文?、横帯4と5の間に波状文。	外面:ナデ調整。下部はヘラナデ調整。 内面:横位のヘラ調整。	12個 方形	外面:口縁~底部際までマンガン釉。底部近くでは釉垂れ。	なし	なし	
第13図 4 図版 25-7	—	墓室	御殿形 (陶製)	49.5×38.2 37.5×26.5 47.2 38.5×26.5 39.3	アー チ形	1個 円形	—	正面に貼付けによる屋門と蓮華文、左右の面に貼付けによる蓮華文にコバルト及び褐色釉で彩色。間には緑釉及び褐色釉で丸文を配するが釉垂れが著しい。	型作り成型後、ナデ調整。	5個 円形	外面に白化粧後、コバルト・緑・褐色釉で彩色のうえ透明釉を施釉。口唇と内底面は白化粧のみ。胴部内面と外底面は褐色釉。	なし	明治四十年 旧朱二月廿日(仲)屋良 ぬ貳代男子 次仲屋良小 比嘉浦	

第12表 第33号墓 出土陶磁器観察表

単位: cm

図番号	出土地点	器形	残存部位	口径	器高	底径	施釉	釉色・色調	貫入	文様等	備考
第14 図1	墓室	小杯	完形	4.1	1.8	1.8	全面に透明釉を施釉。量付は露胎。	全面:白色 文様:赤色	なし	内面に紅葉を一葉。	





第14図 33号墓出土遺物(2)

## 第5節 45号墓

### (1) 遺構(第15図)

45号墓は丘陵北端域の西側の斜面部に形成された掘込墓で、西側へ向けた急斜面部の低位で検出された遺構である。ニービの地山を掘りこんで作られており、入口から天井を含む墓室までが残存している。墓口は幅0.85m・高さ0.90mで、方位を西南西(N104°W)に向け、石灰岩製の蓋石を2枚積むことにより閉塞された状態で検出された。

墓室は円形に近い不定形で、幅0.85m・奥行1.55mの規模を測り、残存する天井までの高さは0.9mである。入口近くにニービが流れ込んでいたものの、墓室全体は埋没せずに空間が保たれていた。棚は造られておらず、墓室中央の地山床面直上からマンガン釉甕形蔵骨器が1基出土した。蔵骨器は入口方向に向けて傾き、入口側の壁面に寄り掛かった状態で残存しており、蓋は外れて羨道に落ちた状態であった。蓋の更には手前で蓋石との間からはニービの礫が出土しており、何らかの意義を有するものであったかと推測される。

蔵骨器に蓋内に記載された銘書には「光緒七年」の文字が確認できることから、近世末期に使用されていたことが窺われる。小規模な遺構であることから、当該蔵骨器を納めるために構築されたと考えると、造営時期も同時期である可能性が指摘できよう。

### (2) 遺物(第16図、第13・14表)

45号墓に伴う遺物は墓室内から出土した前述の蔵骨器のみである。蓋と身をそれぞれ図化して示すとともに、計測値などを観察表に記載した。

蔵骨器の蓋は、全体的な形状は一般的なものであるが、つまみ接合部に2つの孔がつけられている点で特徴的である。身は貼付の屋門に線彫りによる葉文・蓮華文・波状文などが描かれてお

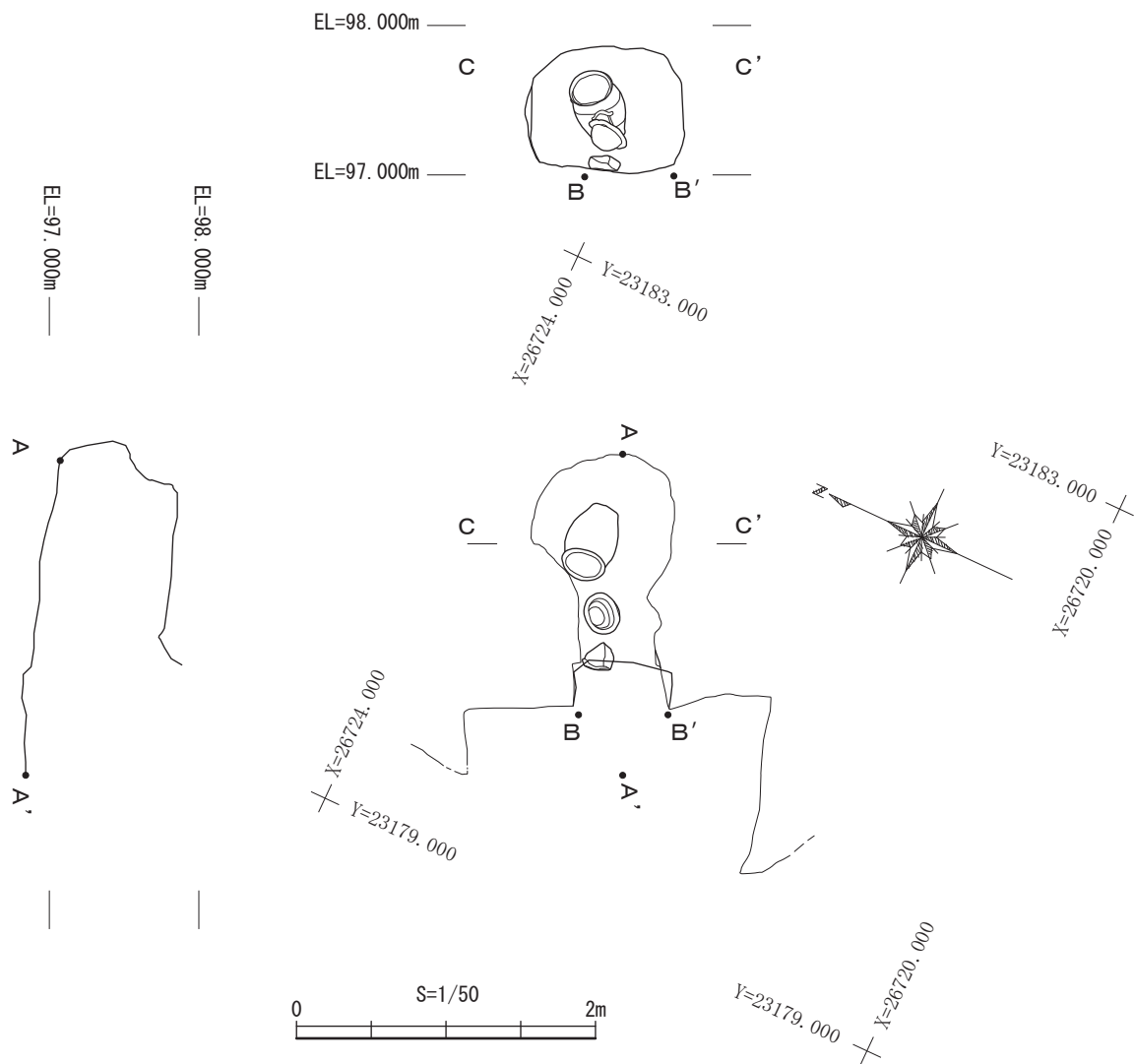
り、他に比べマンガン釉が厚く掛けられているためか濃い黒褐色を呈する。底面には石灰が厚く付着しており、底面孔を塞いでいる状態である。

(3) 銘書

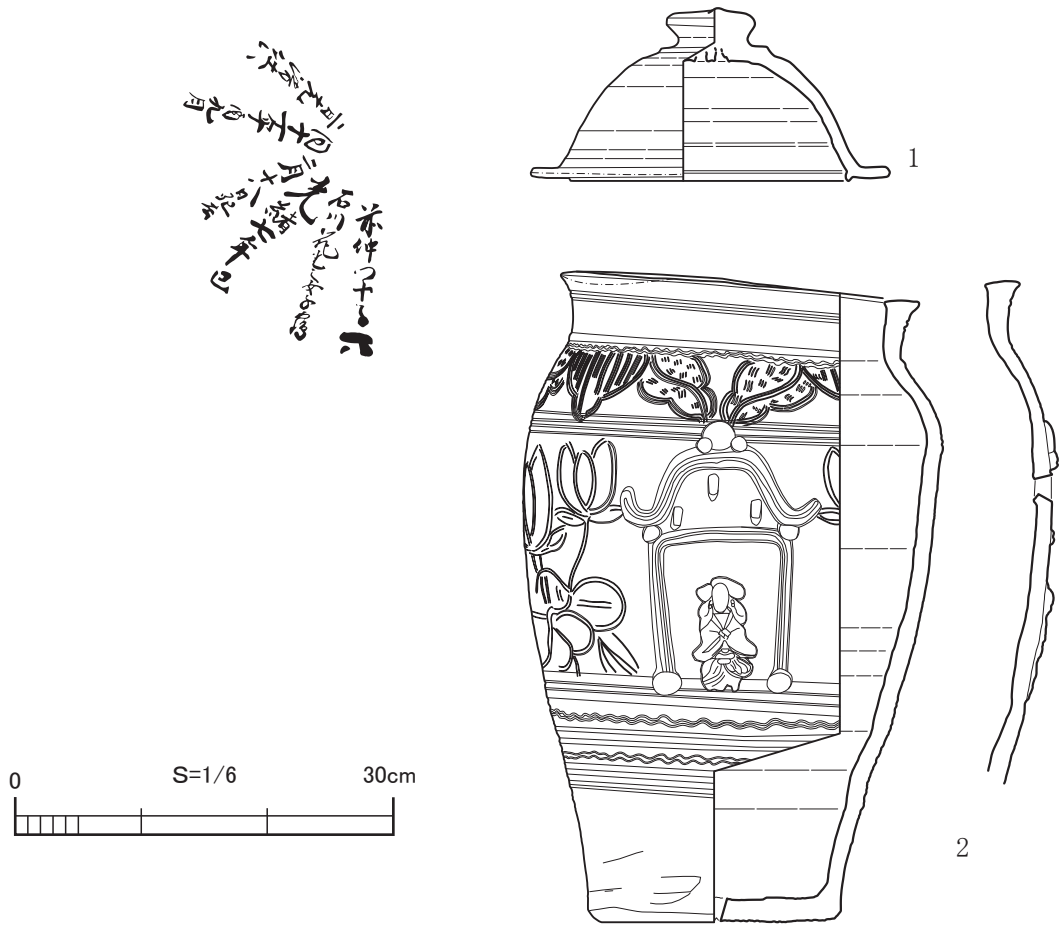
蓋内面に銘書が中央から縁に向けて放射状に書かれており、被葬者の姓名や死去年などを窺うことができる。詳細は第13表及び第44表を参照いただきたい。

(4) 人骨

蔵骨器内の人骨の残存状況は極めて不良で分析可能な資料は残存していなかった。



第15図 45号墓 遺構図



第16図 45号墓 出土遺物

第13表 45号墓 出土蔵骨器(蓋)観察表

単位: cm

図番号	取上番号	出土地点	形式	つまみ台径 口径 内径 器高 体部高	つまみ形 つまみ接合部孔 つまみ台 鏝 かえり	文様	調整痕	釉薬	銘書	死去年	洗骨年	備考
第16図 1 図版 26-5	1	墓室	マンガン 釉甕形	8.5 28.5 22.0 13.7 10.6	扁平型 有孔(2孔) 1段 有(3.4cm) 有(3mm)	なし	外面: 胴上部は ヘラケズリ調整 内面: 横位のナ デ調整	外面: マンガン 釉を底の際ま で 内面: 露胎	前仲門[小]口/石川 筑登之女子露/光緒 七年巳/二月十八日 死去/同十一年酉九 月/二日先滑仕[候]	光緒7 (1881)	光緒11 (1885)	

第14表 45号墓 出土蔵骨器(身)観察表

単位: cm

図番号	取上番号	出土地点	形式	口径 胴径 底径 器高	窓枠/ 屋門	窓数/ 形	横帯	文様	調整痕	底面孔	釉薬	窯印	銘書	備考
第16 図2 図版 26-6	1	墓室	マンガン 釉甕形	28.5 32.6 18.6 51.7	唐破 風形	3個 方形	凹2 凹1 凸3 凹3 凹2 凹3	叉状工具による沈線 で肩部に葉文、胴部 の屋門の左右に蓮華 文、胴下部の横帯4と 5及び5と6の間に波状 文。屋門は貼付で、銘 書面に法師を貼付。	外面: ナデ調 整。下部はヘラ ナデ。 内面: 横位のナ デ調整。	6個 半裁竹 管形	外面: 口縁~ 底部際までマ ンガン釉。底 面露胎 内面: 露胎	なし	なし	底面に石灰 が厚く付 着。

## 第6節 47号墓

### (1) 遺構 (第17図)

調査区北側の丘陵西側の斜面地の低位に構築されたニービの地山を掘りこんで作られた遺構の一つである。天井及び入口部分は検出されず、崩落により失われたものと考えられる。検出された床面及び壁面の形状は、奥壁及び左壁が出窓状に掘り込まれている様子を窺うことができるが、戦時中の壕として改造されたものと想定される。入口を2か所もつことから、元来2基の墓であったものを、墓室同士をつなげて一つのものとして使用したものではないかと想定されるが、墓としての原型を窺うことは困難である。

遺構内の床面直上からは陶磁器類などが多量に出土しており、近代期の本土産の陶磁器類を中心とする様相が見てとれる。

### (2) 遺物 (第18～21図、第15・16表)

47号墓から出土した遺物の種類及び数量については第6表に記載した。本遺構から出土した陶磁器類は砥部産あるいは美濃産などの本土産陶磁器を中心とし、本丘陵の中でも比較的多くの数が出土している。ここでは、砥部産の碗・美濃産の碗あるいは皿などについて代表的あるいは特徴的な文様がみられる資料について図示した。観察所見の詳細については、一覧表に記載しているためご参照いただきたい。

## 第7節 48号墓

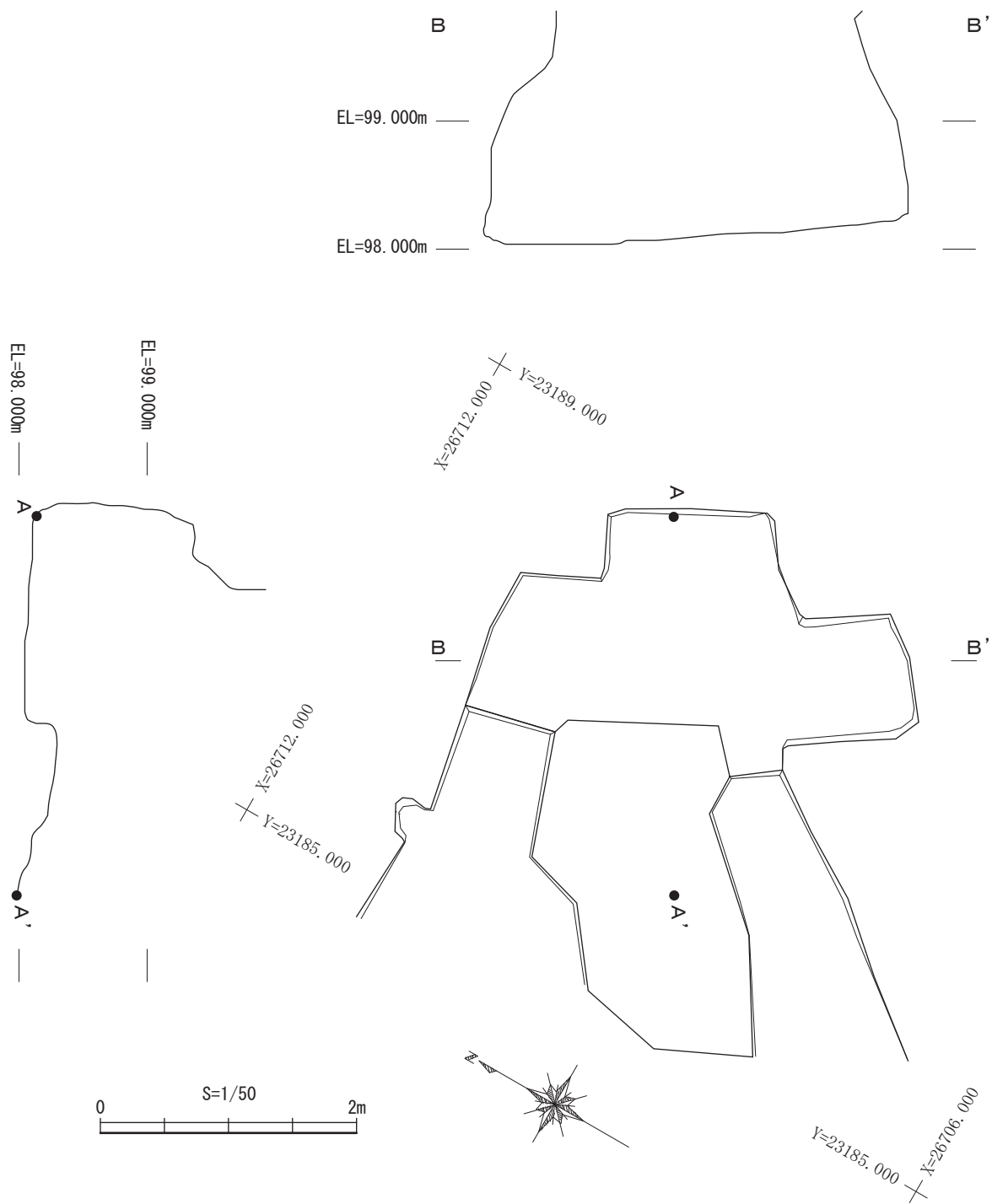
### (1) 遺構 (第22図)

調査区北側の丘陵西側の斜面地で、前節に述べた47号墓の南側に隣接する遺構で、比較的低位に構築されたニービの地山に構築された掘込墓の一つである。墓庭から入口、天井を含む墓室までが残存している。墓口は幅0.54m・高さ1.00mを測り、方位を西南西(N119°W)に向ける。墓室は幅2.59m・奥行2.99mのやや奥に長い方形の平面観を呈し、シルヒラシから天井までの高さで1.89mを測る。左右の壁面に1段の棚、奥壁に3段の棚が構築された5類bの類型に区分される構造である。左の壁面は掘り込まれており、隣接する51号墓の墓室と連結されている。両遺構をつなぐ通路として使われたものとみられ、墓遺構としての形状を残しつつも戦時中に壕として使用された状況が窺われる。

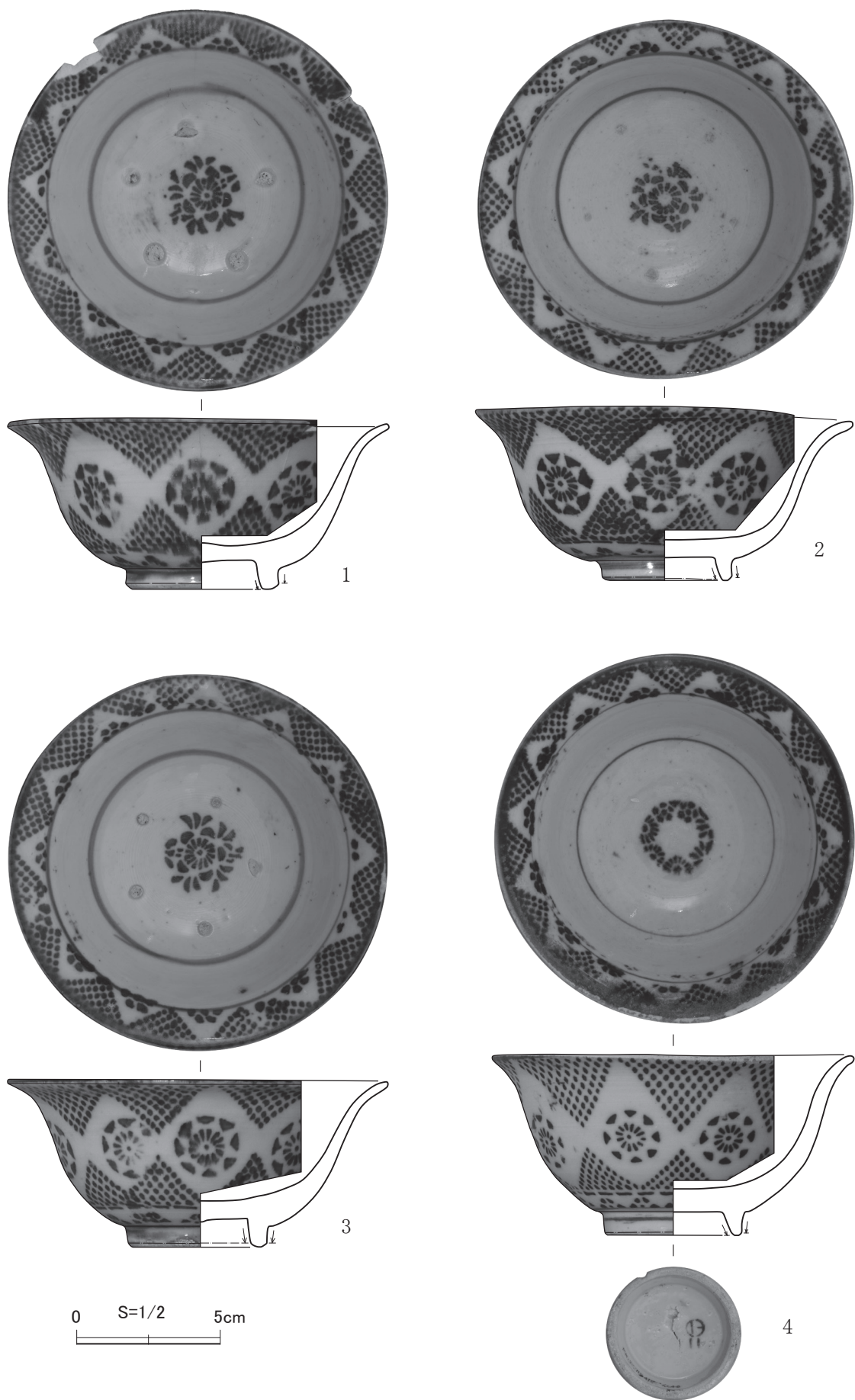
墓室内には蔵骨器は残存しておらず、墓室に入っすぐの墓室壁面側、右棚直下の床面上から近代の陶磁器及び簪がまとまって出土した。壕としての使用時に持ち込まれたものと思われる。墓遺構としての造営年代・使用年代については、棚の構造から近世墓では比較的新しい時期のものとして推定されるものの、詳細は不明である。

### (2) 遺物 (第23図、第17表)

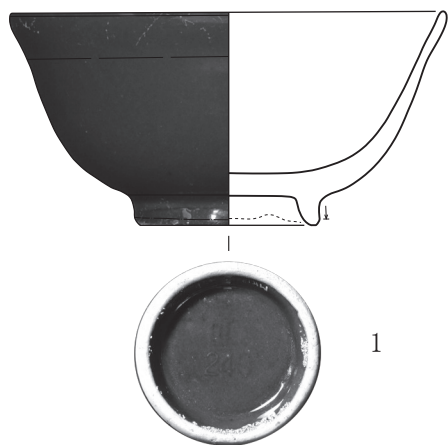
48号墓から出土した遺物の種類及び数量については第7表に記載した。ここでは、墓室床面から出土した陶磁器のうち完形の碗3点と金属製の簪について図示した。陶磁器のうち2点は砥



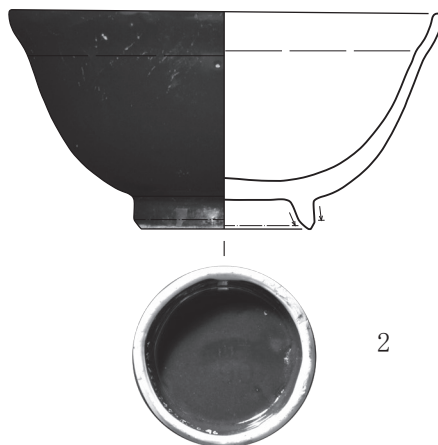
第 17 图 47 号墓 遺構図



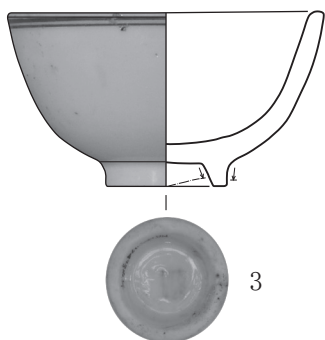
第 18 图 47 号墓 出土遗物 (1)



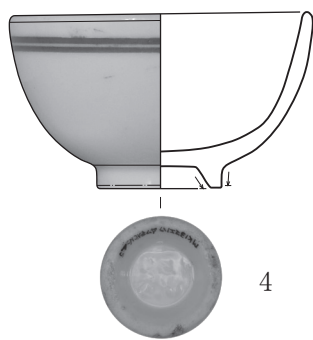
1



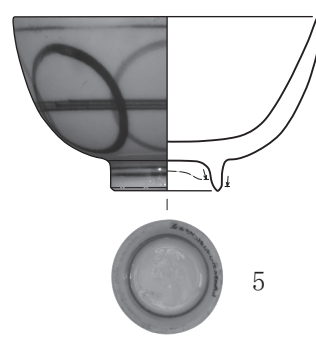
2



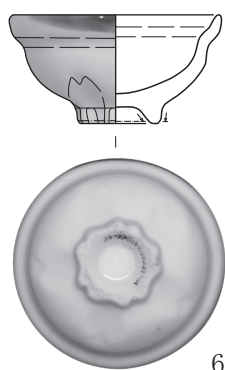
3



4

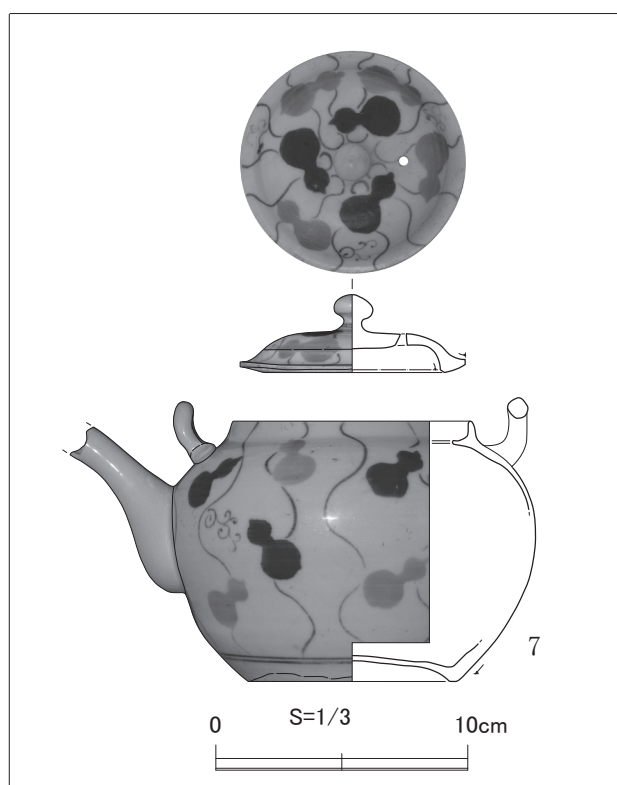


5



6

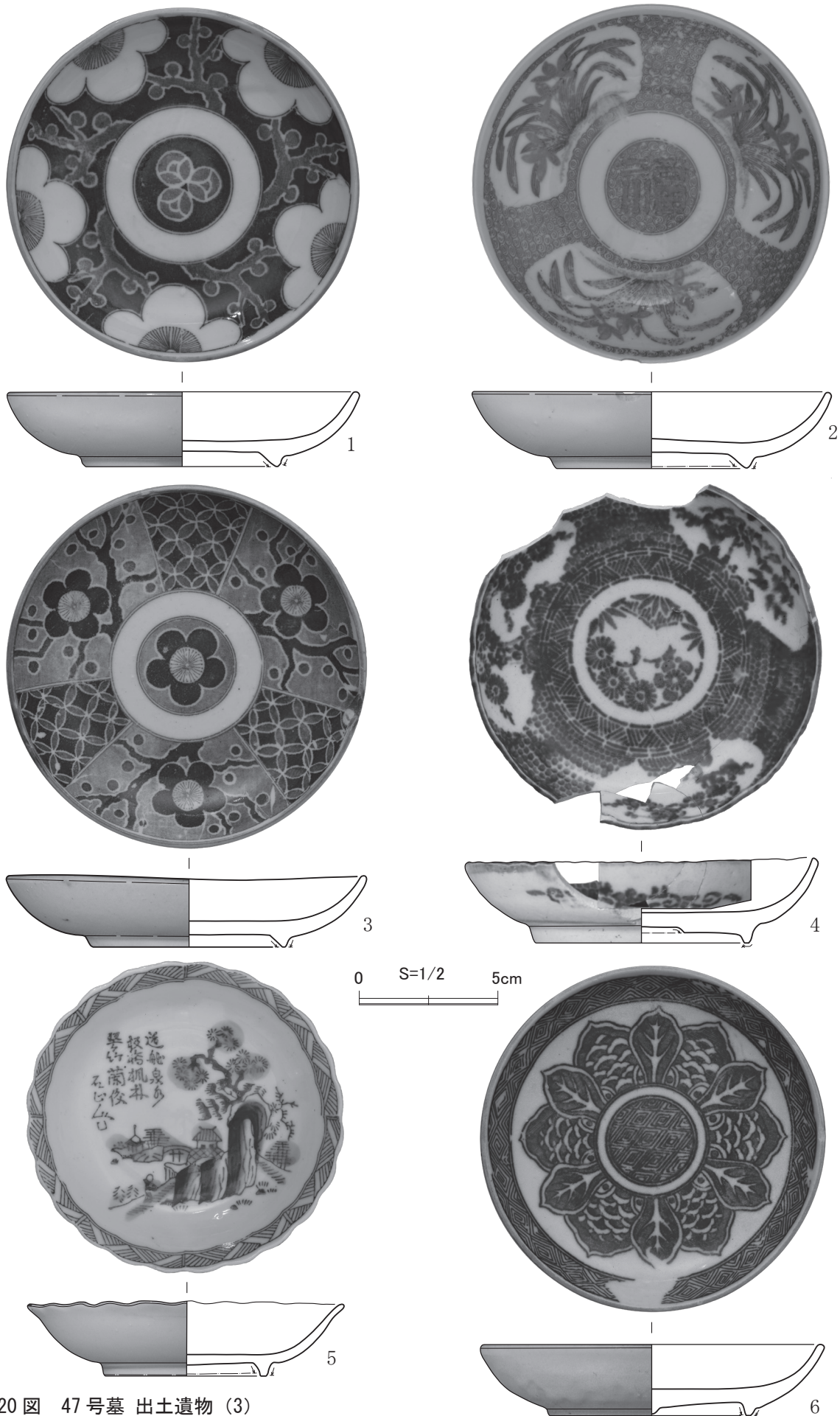
0 S=1/2 5cm



7

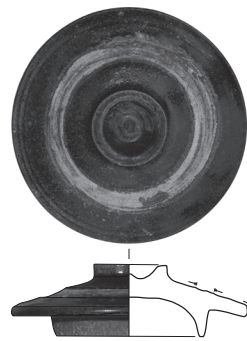
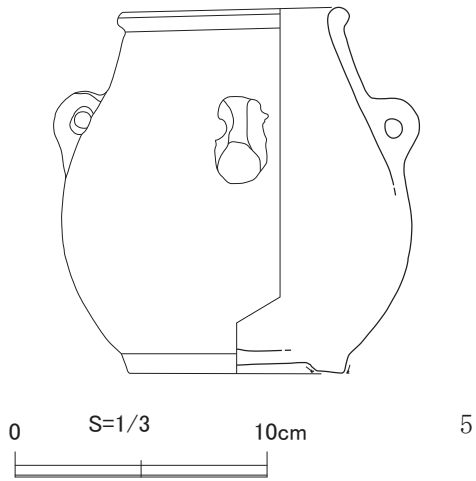
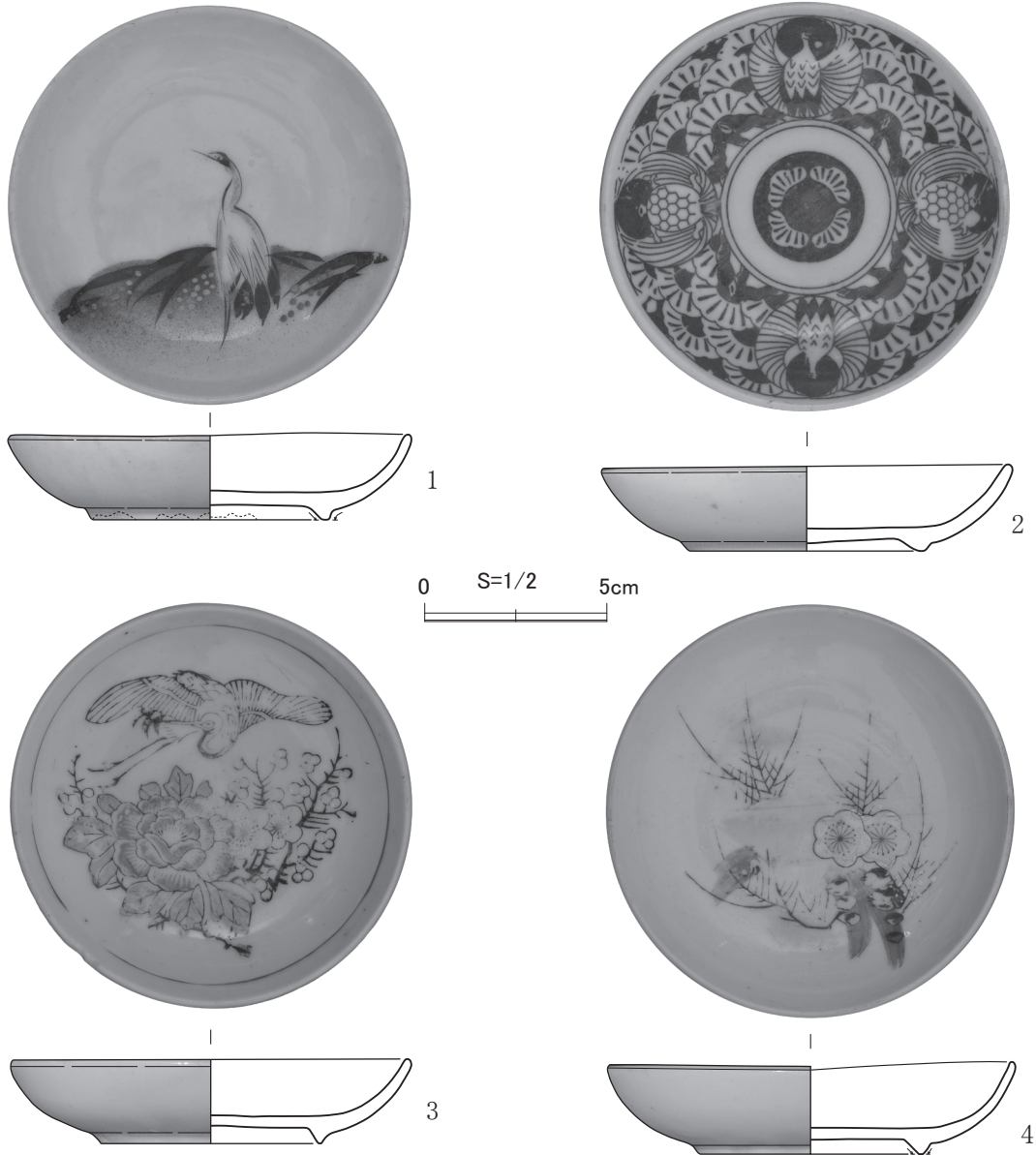
0 S=1/3 10cm

第 19 图 47 号墓 出土遗物 (2)



第20图 47号墓 出土遗物(3)





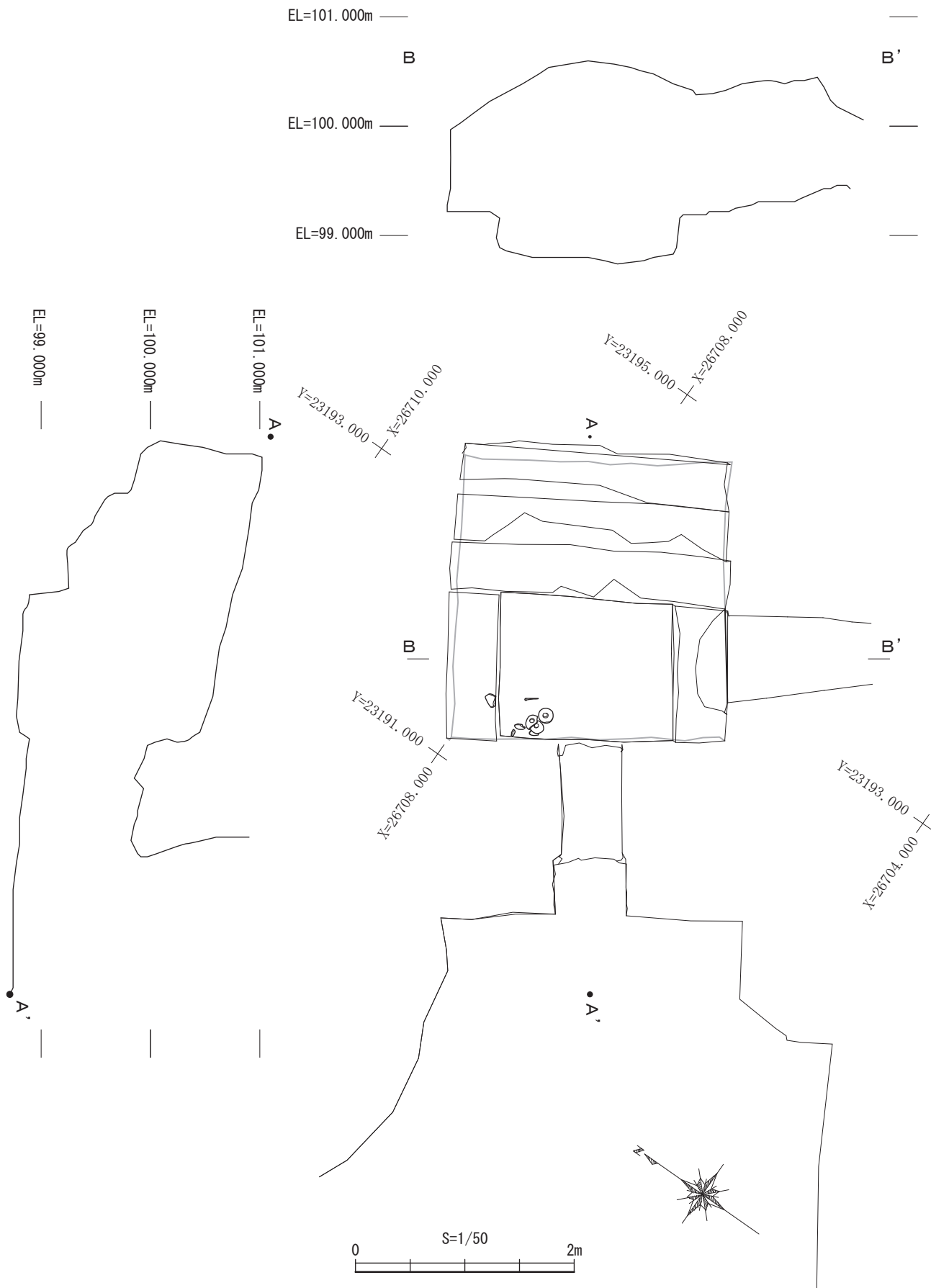
第 21 图 47 号墓 出土遗物 (4)

第15表 47号墓 出土陶磁器観察一覧表(1)

図番号	出土地点	器形	残存部位	口径	器高	底径	施釉	釉色・色調	貫入	文様等	備考
第18 図1	墓室	碗	ほぼ完形	13.2	5.9	4.8	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。見込に目痕。畳付は露胎。	全面：青みがかった白色 文様：コバルトの鮮やかな発色	なし	外面は点描でひし形の窓を作り、中に花文。内面は口縁部に点描で逆三角形を配する。見込には花文。	スカンマカイ/砥部産/大正～昭和/底部に印なし
第18 図2	墓室	碗	完形	13.1	6.0	4.2	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。見込には目痕。畳付は露胎。	全体：青みがかった白色 文様：鮮やかな色調のコバルト	なし	外面は点描でひし形の窓を作り、中に花文。内面は口縁部に点描で逆三角形を配する。見込には花文。	スカンマカイ/砥部産/大正～昭和/底部に印なし
第18 図3	墓室	碗	完形	13.1	5.8	4.3	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。畳付は露胎。	全体：青みがかった白色 文様：鮮やかな色調のコバルト	なし	外面は点描でひし形の窓を作り、中に花文。内面は口縁部に点描で逆三角形を配する。見込には花文。	スカンマカイ/砥部産/大正～昭和/底部に印なし
第18 図4	墓室	碗	完形	12.5	6.2	4.5	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。畳付は露胎。	全体：青みがかった白色 文様：鮮やかな色調のコバルト	なし	外面は点描でひし形の窓を作り、中に花文。内面は口縁部に点描で逆三角形を配する。見込には松竹梅文。	スカンマカイ/砥部産/大正～昭和/底部に印あり
第19 図1	墓室	碗	ほぼ完形	11.4	5.7	4.5	全体に透明釉を施文。畳付は露胎。	全体：茶色	なし	なし	美濃産。底部に「岐240」の統制番号を押印。
第19 図2	墓室	碗	ほぼ完形	11.3	5.8	4.5	全体に透明釉を施文。畳付は露胎。	全体：茶色	なし	なし	美濃産。底部に「岐90」の統制番号を押印。
第19 図3	墓室	碗	完形	8.3	4.6	3.2	全体に透明釉を施釉。畳付は露胎。	全体：白色 文様：緑色	なし	外面の口縁部直下に二条の圏線。	美濃産。底部に「岐425」の統制番号を呉須で押印。国民食器。
第19 図4	墓室	碗	完形	7.8	4.6	3.2	全体に透明釉を施釉。畳付は露胎。	全体：白色 文様：緑色	なし	外面の口縁部直下に二条の圏線。	美濃産。底部に「岐286」の統制番号を押印。国民食器。
第19 図5	墓室	碗	完形	8.0	4.6	2.8	全体に透明釉を施釉。畳付は露胎。	全体：薄い緑色 文様：青色	なし	外面の口縁直下に一条、胴部中央に三条、高台に二条の圏線。胴部に濃淡でかき分けた2色の青色で輪文を転写で描く。	美濃産。底部に「岐406」の統制番号を押印。
第19 図6	墓室	小杯	完形	5.4	2.9	2.2	全面に透明釉を施釉。口縁部に緑と桃色の釉薬。畳付は露胎。	全体：白色	なし	なし	鑄込み成形にて底部高台が桜の形を呈する。外面の胴下部に桜の花弁を5枚配する。
第19 図7	墓室	急須(蓋)	完形	8.7	3.1	-	コバルトでの絵染付後、全体に透明釉を掛ける。底部および内面は露胎。	全面：白色・透明釉 文様：鮮やかなコバルトの発色	なし	蓋・身ともに外面に瓢箪と蔓の文様。青色の濃淡を利用した2色で表現している。	
		急須(身)	完形	9.2	11.0	8.1					

第16表 47号墓 出土陶磁器観察一覧表(2)

図番号	出土地点	器形	残存部位	口径	器高	底径	施釉	釉色・色調	貫入	文様等	備考
第20 図1	墓室	皿	完形	12.7	2.7	7.0	全体に透明釉を施す。畳付は露胎。	全体:白色 文様:濃い青色	なし	内面に銅板転写による梅文。見込中心には梅の実を描く。	
第20 図2	墓室	皿	ほぼ完形	13.0	2.8	7.0	全体に透明釉を施す。畳付は露胎。	全体:白色 文様:緑・紫	なし	内面に銅板転写で、渦巻文による区画と葉文を施したのち、紫の顔料で花と「福」の字を描く。	
第20 図3	墓室	皿	完形	13.0	2.6	7.0	全体に透明釉を施す。畳付は露胎。	全体:白色 文様:青色	なし	銅板転写による梅文と七宝繋ぎ文を交互に配する。青色の濃淡を使い梅の花枝と背景を描き分ける。	
第20 図4	墓室	皿	口縁部から底部	12.9	3.1	7.8	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。畳付は露胎。	全体:白色 文様:鮮やかな色調のコバルト	なし	外面の2カ所に草花文。内面は点描により楕円状の窓を3つ作り、中に各々松・竹・梅を描く。見込には松竹梅文。	
第20 図5	墓室	皿	完形	11.5	2.6	5.9	全体に透明釉を施す。畳付は露胎。	全体:白色 文様:青色	なし	内面に楼閣山水文。「道航泉水/板橋楓林/翠竹蘭佼」の景色を描いたものと思われる。	
第20 図6	墓室	皿	完形	12.5	2.6	7.4	全体に透明釉を施す。畳付は露胎。	全体:白色 文様:濃い青色	なし	内面口縁部に銅板転写による入子菱形文、見込には花文と入子菱形文。所々で文様が抜ける。	
第21 図1	墓室	皿	完形	10.8	2.3	6.4	全体に透明釉を施す。畳付は露胎。	全体:白色 文様:墨・赤色・金色	なし	内面に手書きによる鶴と山野が描かれる。外面は無文。	高台に目砂あり
第21 図2	墓室	皿	完形	11.0	2.4	6.3	全体に透明釉を施す。畳付は露胎。	全体:白色 文様:緑色	なし	内面に銅板転写による鶴亀文と松を配する。外面は無文。	
第21 図3	墓室	皿	完形	10.8	2.3	6.0	全体に透明釉を施す。畳付は露胎。	全体:白色 文様:青色・黄色・うすい桃色・黒色	なし	内面に鶴・梅・牡丹を描く。筆書きで輪郭を描いたのち、花芯を黄色・牡丹花弁を青・葉を緑・梅花弁を桃色に着色。	
第21 図4	墓室	皿	完形	11.0	2.5	6.1	全体に透明釉を施す。畳付は露胎。	全体:白色 文様:うすい桃色・黒色・緑色	なし	内面に梅文。筆により枝を描き、花弁と蕾を薄桃色で着色。中央の枝の間に扇を描く。扇面は緑に着色。	
第21 図5	墓室	壺(蓋)	完形	9.3	2.8	5.7	内外面に緑釉を施す。畳付および高台外面の一部が露胎。	全体:暗緑色	なし	なし	沖縄産施釉陶器/四耳壺/アンダガミー/高台に目砂
		壺(身)	口縁部から底部	8.5	14.4	8.3					

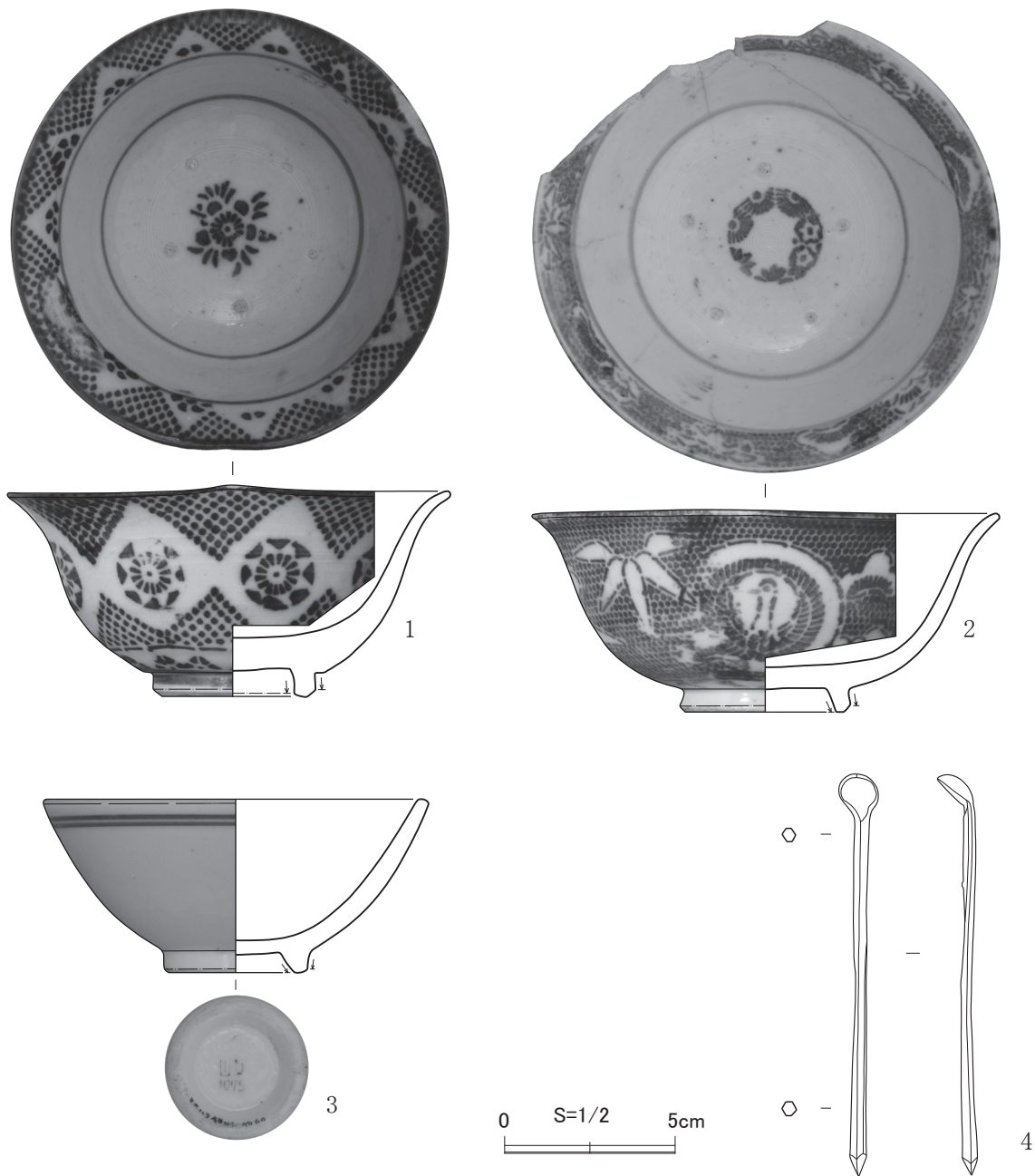


第 22 图 48 号墓 遺構図

第17表 48号墓 出土陶磁器観察一覧表

単位: cm

図番号	出土地点	器形	残存部位	口径	器高	底径	施釉	釉色・色調	貫入	文様等	備考
第23 図1	墓室	碗	完形	13.0	6.0	4.8	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。見込には目痕。置付は露胎。	全体: 青みがかった白色 文様: 鮮やかな色調のコバルト	なし	外面は点描でひし形の窓を作り、中に花文。内面は口縁部に点描で逆三角形を配する。見込には花文。	スンカンマカイ/砥部産/大正~昭和/底部に印なし。内面口縁部に焼成時に釉が押しつぶされた痕を残す。
第23 図2	墓室	碗	口縁部から底部	13.6	5.8	4.8	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。見込には目痕。置付は露胎。	全体: 青みがかった白色 文様: くすんだ発色のコバルト	なし	外面は点描を全体に描く中に、松竹梅文と3カ所の鶴。内面は口縁に沿って点描と松竹梅文を、見込に松竹梅文を配する。	スンカンマカイ/砥部産/大正~昭和/底部に印なし
第23 図3	墓室	碗	完形	11.2	5.05	4.1	全体に透明釉を施釉。置付は露胎。	全体: 白色 文様: 緑色	なし	外面の口縁部直下に二条の圈線。	美濃産。底部に「岐1075」の統制番号を緑釉で押印。国民食器。



第23図 48号墓 出土遺物

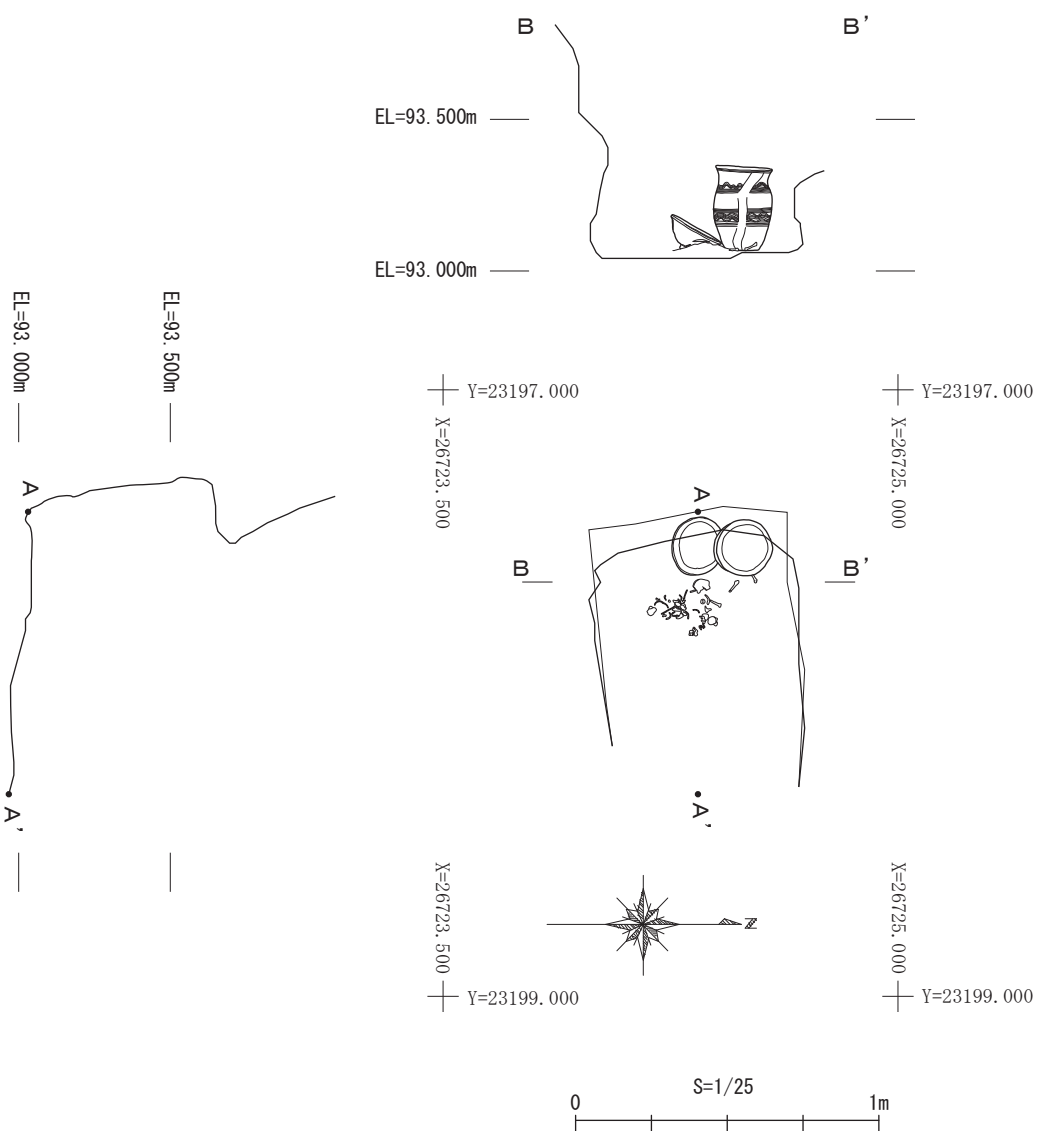
部産・1点は美濃産の碗であり、詳細は観察表の記載を参照いただきたい。

第23図4は金属製の簪である。頭部が匙状の形態であることから、女性用のジーファーであると考えられる。頭部の匙形は左右非対称で、竿部が湾曲するなど、全体的に歪みが生じている。表面には光沢がみられ、全体の色調は白色を呈していることからアルミ製ではないかと推測される。首部と竿部の断面形は六角形であるが、各辺の長さはそれぞれ異なる。また、首部と竿部の境目は不明瞭である。長さ11.7cm、幅約3.0～4.5mm。

## 第8節 49号墓

### (1) 遺構 (第24図)

49号墓は丘陵北端側の東側で検出された遺構で、本調査区の中でも最も低位のレベルに位置する遺構である。遺構周辺にはニービとクチャの地山が互層をなす地質がみられるが、本遺構は

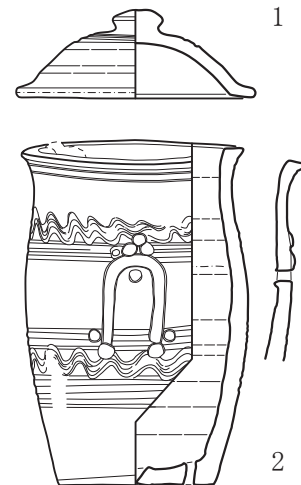


第24図 49号墓 遺構図

その合間をぬうようにニービの地山を掘り込んで構築された掘込墓である。遺構は奥壁と床面の一部が検出されたのみで、側壁の大部分や墓口部分は削平などを受けたためか残存しておらず検出されなかったため、墓室全体形あるいは墓口構造などは不明である。ただし、残存部から幅0.68m・高さ0.63mを測り、棚などの構造は持たない小規模な墓であったことを窺うことができる。

残存する墓室の奥壁際で左の壁沿いの床面直上から小型のマンガン釉甕形蔵骨器が1基検出された。屋門を奥壁側に向け、直立した状態であるが、蓋は右側に落ちており、前面には人骨が散乱した状態で、出土している。これらの人骨はいずれも未成人骨で、解剖学的原位置を保っているとは認められなかったことから一次葬人骨ではないと判断した。そのため当該蔵骨器に納められていたものではないかと想定される。しかしながら、墓室内はニービ砂粒によって埋没しており、どのような過程で人骨が散乱したかは定かではない。

また、本遺構の造営・使用時期については、蔵骨器の形態から近世末期以降ではないかと想定されるが、銘書の記載などはないことから、より詳細な検討が必要である。



0 S=1/6 30cm

第25図 49号墓 出土遺物

(2) 遺物 (第25図、第18・19表)

本遺構から出土した遺物は、前述の蔵骨器及び人骨である。蔵骨器の身の裏面には口縁から底部にかけて内外面ともに漆喰が带状に付着しており、ヒビに対する

第18表 49号墓 出土蔵骨器(蓋)観察表

単位:cm

図番号	取上番号	出土地点	形式	つまみ台径 口径 内径 器高 体部高	つまみ形 つまみ接合部孔 つまみ台 鐳 かえり	文様	調整痕	釉薬	銘書	死 去 年	洗 骨 年	備考
第25図 1 図版 26-3	1	墓室	マンガン 釉甕形	— 19.1 15.2 7.0 5.3	饅頭型 無 有(2.1cm) 無	なし	外面:ヘラズリ調整 内面:ナデ調整。底 から胴部にかけて明 瞭な稜を残す。	外面:マンガン 釉を底の際まで 内面:露胎	なし	—	—	上部につまみ台 を意識した沈線 を2条廻らす。

第19表 49号墓 出土蔵骨器(身)観察表

単位:cm

図番号	取上番号	出土地点	形式	口径 胴径 底径 器高	窓 枠 / 屋 門	窓 数 / 形	横帯	文様	調整痕	底面孔	釉薬	窯 印	銘 書	備 考
第25 図2 図版 26-4	1	墓室	マンガン釉 甕形	17.6 17.7 12.3 27.4	ア ー チ 形	3個 円形	凹2 凹3 凹4 凹4	肩部及び胴部に沈 線による波状文。屋 門は貼付。横帯は部 分的に磨り消され る。	外面:ナデ調整。下 部・外底面はヘラ ナデ。 内面:横位のヘラ調 整。	5個 円形	内面口縁下11cm の位置から外面・ 外底面までマン ガン釉。	なし	なし	

補修の痕跡ではないかと考えられる。その他、詳細な観察所見については第 18・19 表に記載した。

### (3) 人骨

蔵骨器内からは未成人骨が出土した。

## 第 9 節 51・52 号墓

### (1) 遺構 (第 26 図)

調査区北側の丘陵西側の斜面地で、前に述べた 48 号墓の南側に隣接する遺構である。48 号墓と同様丘陵斜面の低位に位置しており、ニービの地山を掘り込んで構築された遺構である。51 号墓・52 号墓の入口は互いに隣接し、51 号墓が北側・52 号墓が南側に検出された。

51 号墓の入口は幅 0.63 m・高さ 1.0 m で、方位を南西 (N 140° W) に向ける。入口を入ると奥に向けて約 7.5 m 掘り進められており、戦時中に壕として転用された様子が窺われる。奥へ進むと天井が高くなり掘り込まれた空間が広がることから、内部に墓遺構としての形状を窺うことは難しい。入口からは蔵骨器片が多量に散乱しており、壕として使用の際に投棄されたものではないかと推測される。一方で、遺構奥の空間の床面上からは陶磁器類が碗を中心として多量に出土した。近代以降の砥部産や美濃産などが主体を占めることから、壕への避難に伴い持ち込まれたものであると考えられる。

52 号墓の入口は 51 号墓の南側に隣接し、幅 0.6 m・高さ 0.8 m で方位を南西 (N 124° W) に向ける。入口を入ると約 1.8 m 直線的に掘り込まれたのち北側に曲がり、51 号墓と連結する。51 号墓と同様、壕として転用されたものであるとみられる。

### (2) 遺物 (第 27～30 図、第 20～23 表)

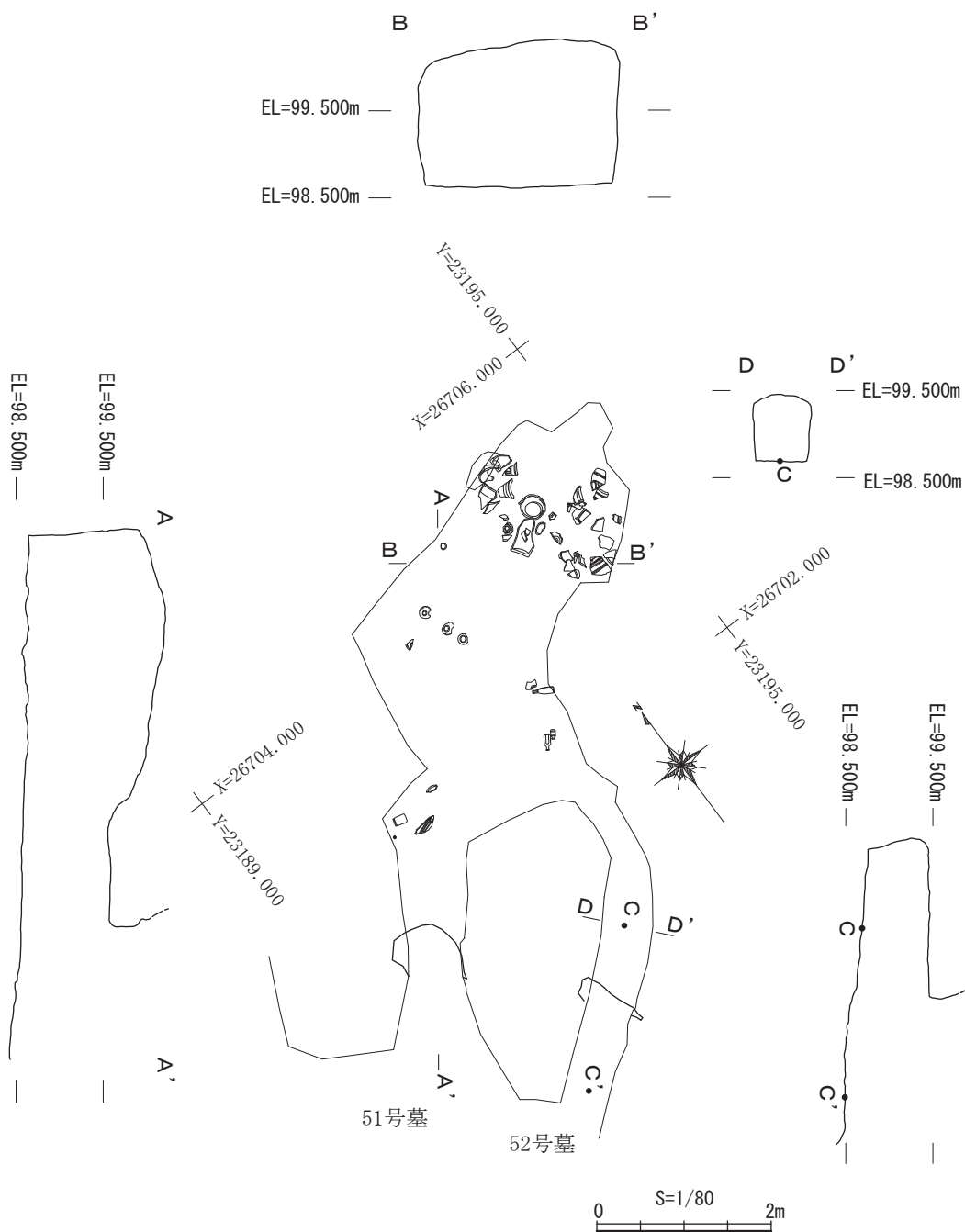
51・52 号墓から出土した遺物の種類及び数量については第 7 表に記載した。遺物の傾向としては大きく二つに分かれ、壕として転用された際に投棄された蔵骨器の破片群と、壕に伴う生活雑器等の陶磁器類である。蔵骨器片の接合を試みたところ、マンガン釉甕形の身が 3 点・蓋 4 点と家形の身と蓋各 1 点が完形ないし実測図化に耐えうる程度まで復元できたことから、実測のうえ図示した。このほか、転用品とみられる壺 1 点を示した。陶磁器類は完形で残存するものが多量に出土しており、その中から文様等特徴的なものを抽出して図示した。なお、蔵骨器・陶磁器類ともに観察所見の詳細については観察表にまとめて記載した。第 27 図 1 はマンガン釉甕形蔵骨器の身である。横帯および線彫りによる肩部の葉文・体部の蓮華文と屋門で構成される文様が、各所で擦り消されている様子が見てとれる。中でも横帯 5 の屋門下方地点に正方形に擦り消された痕跡を認めることができる。文様施文後に何らかの工具に当たって意図せずに擦れたものではないかと思われる。

第 30 図 3 (図版 28-6) は金属製の指輪である。内面は全体が青錆で覆われ、外面は半分程度が青錆、残りは地金が露出する。正面に花文が配されるが、錆と剥離で不明瞭である。幅は花文の位置で最も狭く、その背面で最も太くなる。直径 2.0 cm、幅 0.7～0.8 cm、厚さ 1.1～1.3 mm。

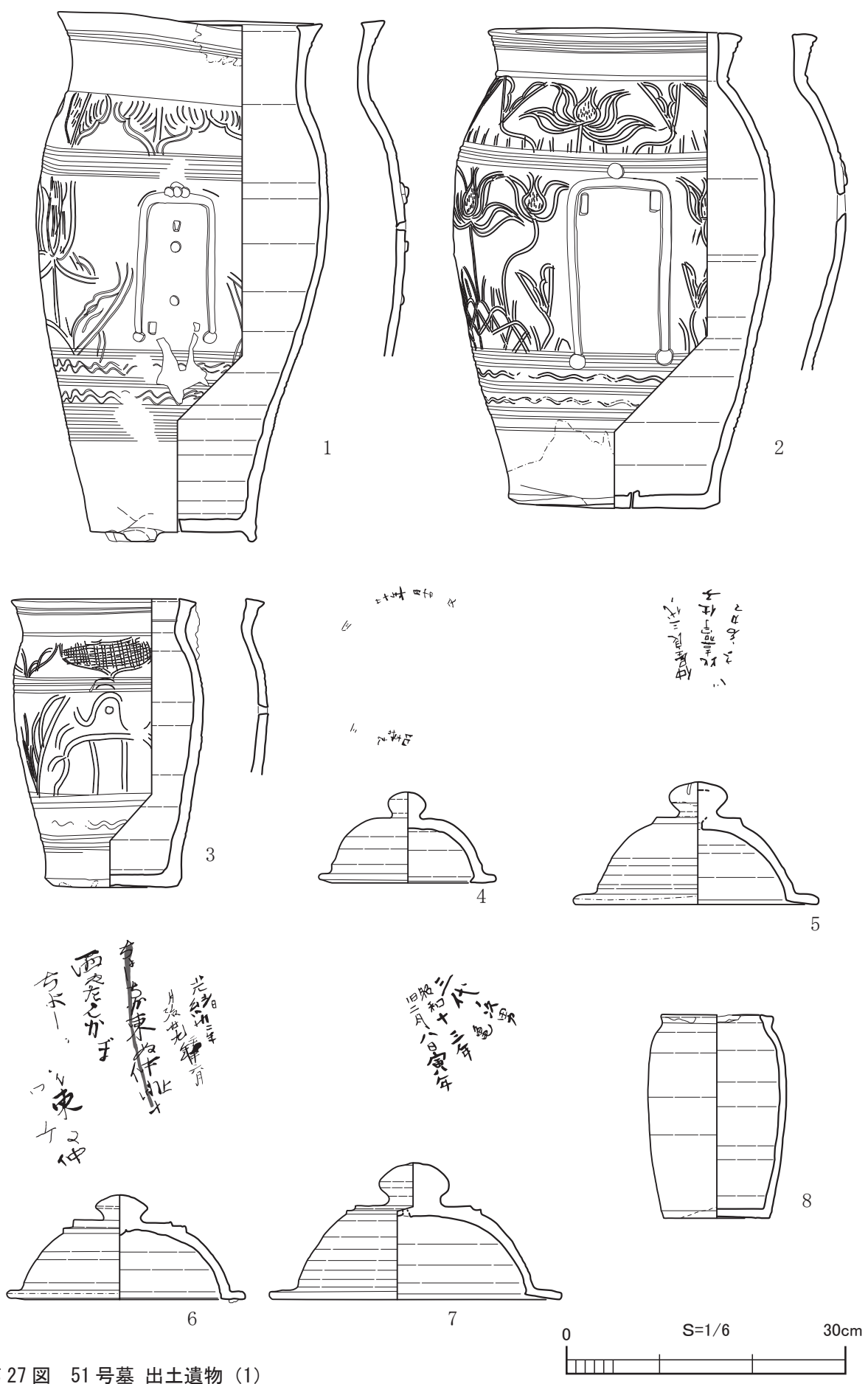


### (3) 銘書

接合したマンガン釉甕形蔵骨器蓋4点から銘書が書かれていることを確認できたが、掠れて消えかけており正確に読み取れない部分も多い。第27図6では文字の崩れも大きく、平仮名や長音も用いられるなど、定型的ではない書かれ方が見てとれる。



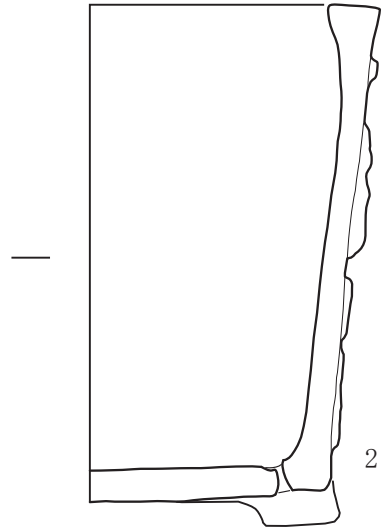
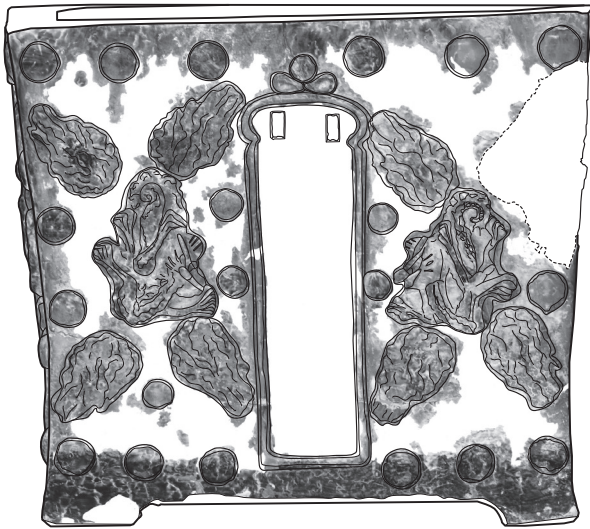
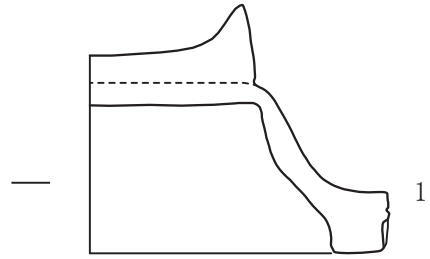
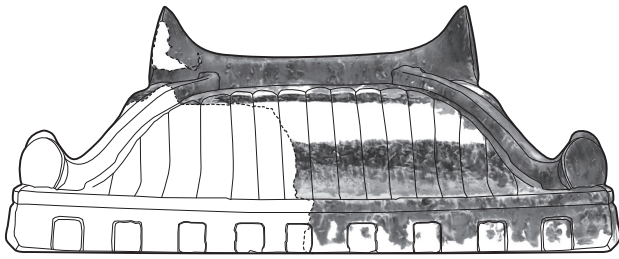
第26図 51・52号墓 遺構図



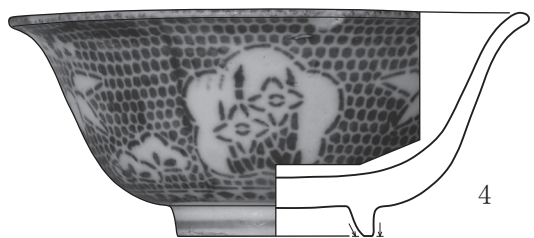
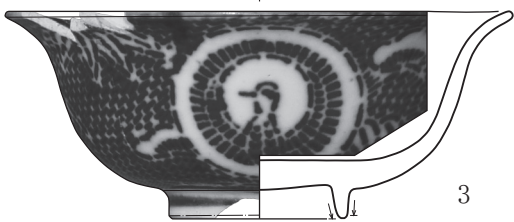
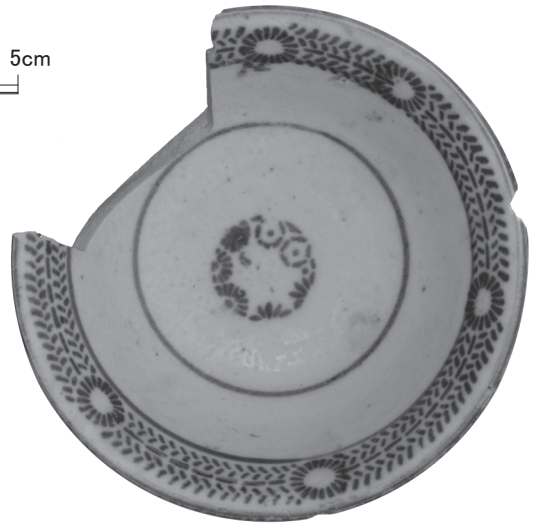
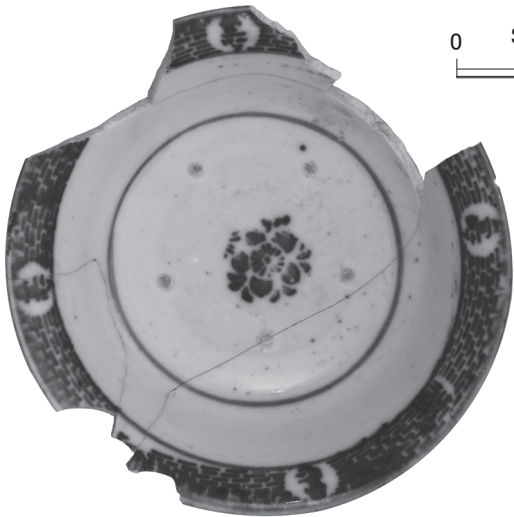
第 27 图 51 号墓 出土遺物 (1)

唐貞元三年（793年）  
 魏都祖下二號年七  
 號

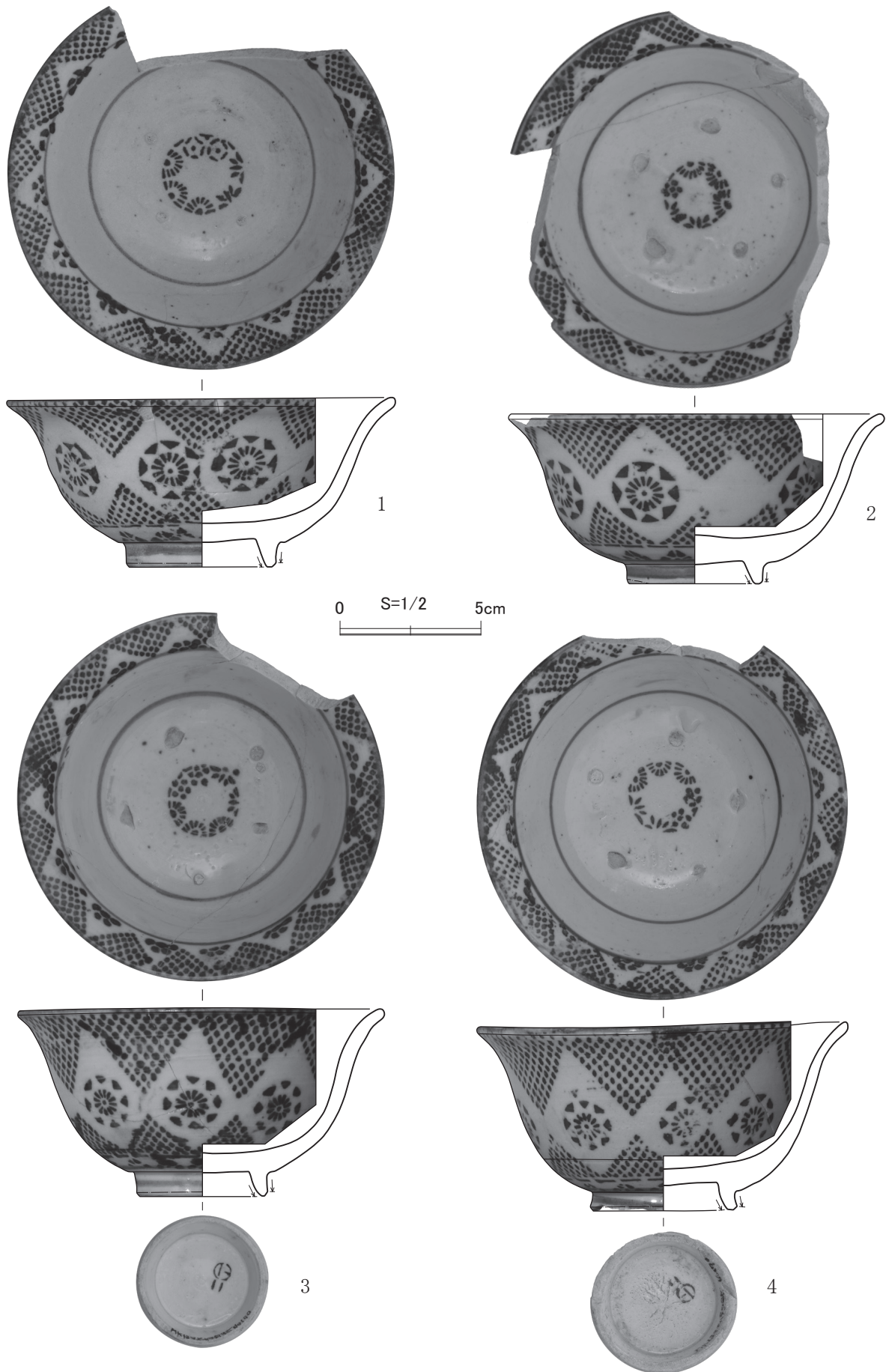
0 S=1/6 30cm



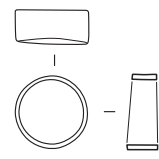
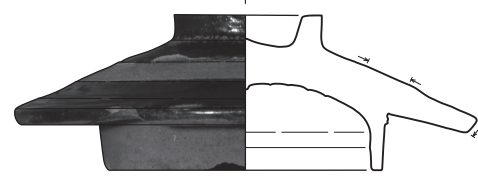
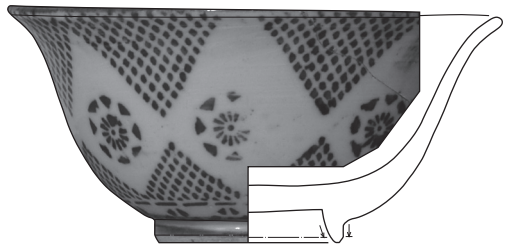
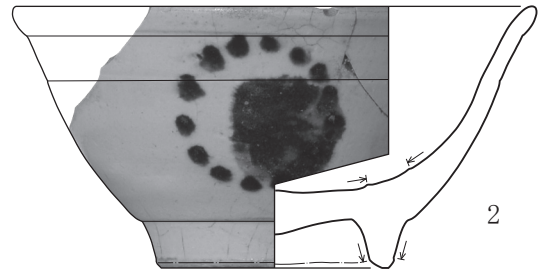
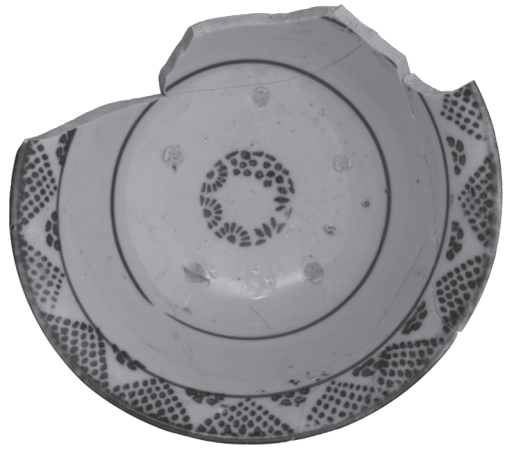
0 S=1/2 5cm



第 28 图 51 号墓 出土遺物 (2)



第 29 图 51 号墓 出土遗物 (3)



0 S=1/2 5cm

第 30 图 51 号墓 出土遺物 (4) · 52 号墓 出土遺物

第20表 51号墓 出土蔵骨器(蓋) 観察表

※計測値は上から蓋形:つまみ台径・口径・内径・器高・体部高  
御殿形:棟長・桁長・梁長・器高

図番号	取上番号	出土地点	形式	計測値 (cm)	つまみ形 つまみ接合部孔 つまみ台 鏝 かえり	文様	調整痕	釉薬	銘書	死去年	洗骨年	備考
第27図 4 図版 27-4	—	墓室	マンガン 釉甕形	— 19.2 13.5 9.7 7.0	饅頭形 無 有(2.8cm) 無	なし	内外面ともにナデ調整。内面は頂部に向けて「の」字状の成形痕。	外面:全体にマンガン釉だが、つまみ下部は露胎 内面:露胎	□□□月□□十年 □(月)十日死□□ [……]比嘉□□三	—	—	
第27図 5 図版 27-5	—	墓室	マンガン 釉甕形	9.0 26.4 19.4 13.2 9.0	饅頭形 有孔 1段 有(3.5cm) 無	なし	外面:つまみ台下部にヘラケズリ痕。胴下部は横位のナデ調整。内面:横位のナデ調整。	外面:底の縁までマンガン釉を施すが、つまみ基部は露胎。 内面:露胎	仲屋良三代ノ比嘉 宇仕子ノ□□□名カ マノ□□[六]十[四 才]	—	—	釉は薄く、所々素地が透ける。
第27図 6 図版 27-6	—	墓室	マンガン 釉甕形	10.7 25.8 20.7 11.2 8.6	饅頭形 有孔(未通) 2段 有(2.6cm) 無	なし	外面:雑なヘラケズリ。庇と胴部の境界にナデによる凹線。内面:横位のヘラ調整。	外面:全体をハケにより施釉。 内面:露胎	光緒廿二年/午年六月 /[明]治廿九年/ ちよーちか東ぬ仲上 間[十]/西[次左の] か[ま]/ちよー口東 [ぬ]仲ノ□□	—	—	つまみ接合部は孔を開けた後、塞いでいる。
第27図 7 図版 27-7	—	墓室	マンガン 釉甕形	12.5 31.4 23.6 14.7 10.1	饅頭形 有孔 2段 有(4cm) 無	なし	外面:つまみ台下部に明瞭なヘラケズリ痕。つまみ台2段目の上面に凹み。内面:横位のナデ調整。	外面:全体にマンガン釉。 内面:露胎	三代ノ次男ノ亀ノ昭和 十三年ノ旧二月八日 寅年	—	—	
第28図 1 図版 28-1	—	墓室	御殿形 (陶製)	24.8 48.5 35.4 12.7	—	入母屋を意識したつくりで大棟および降棟の先端にはそれぞれ瓦当を模した面を貼付。	型作り成型後、ナデ調整。	外面:全体を白化粧後、コバルト・緑・褐色釉で彩色後、透明釉。縁は白化粧のみ。 内面:褐色に彩色の後、透明釉。	屋良三[なん宗]仁比 嘉[家]ノ親富祖[ベ クミ]み[の]年 [七]拾[四]才	—	—	

第21表 51号墓 出土蔵骨器(身) 観察表

※計測値は上から蓋形:口径・胴径・底径・器高  
御殿形:口縁外法・底部外法・器高外法・口縁内法・器高内法

図番号	取上番号	出土地点	形式	計測値 (cm)	窓枠/屋門	窓数/形	横帯	文様	調整痕	底面孔	釉薬	窯印	銘書	備考
第27図 1 図版 27-1	—	墓口	マンガン 釉甕形	28.4 31.4 17.8 57.0	アーチ形	3個 方形	凹2 凸1 凹6 凹3 凹3 凹3 凹6	又状工具による沈線で、肩部に葉文、胴部屋門の左右に蓮華文、胴下部の横帯3と4及び4と5の間に波状文。屋門は貼付。	外面:ナデ調整。底部際に明瞭なヘラケズリ調整。内面:横位のヘラ調整。下部に指痕。	13個 円形	外面:口縁~底部際までマンガン釉。底面露胎。 内面:露胎	なし	なし	底部に脚が3個。
第27図 2 図版 27-2	—	墓口	マンガン 釉甕形	27.2 34.4 22.7 51.7	アーチ形	2個 方形	凹3 凸1 凸3 凹3 凹2 凹2	又状工具による沈線で、肩部及び胴部屋門の左右に蓮華文、胴下部に二条の波状文。屋門は貼付。	外面:ナデ調整。下部はヘラ調整、底部際はヘラケズリ、底面はヘラナデ。内面:横位のヘラ調整。下部には明瞭なナデケズリ痕。	9個 円形	外面口縁から横帯6の下までマンガン釉。内面及び外底面露胎。	なし	なし	
第27図 3 図版 27-3	—	墓口	マンガン 釉甕形	19.9 20.4 14.7 31.0	唐破風形	1個 円形	凹2 凹2 凹3 凹3 凹3	又状工具による沈線で、肩部に葉文、胴部に屋門と蓮華文、胴下部に波状文を施す。屋門は簡略に表現。	外面:ナデ調整。底部際にヘラケズリ調整。内面:横位のヘラ調整。下部に指痕。	5個 半裁竹管形	外面:口縁~底部際までマンガン釉。底面露胎。 内面:露胎	なし	なし	
第27図 8 図版 27-8	—	墓口	転用 (壺)	12.1 14.9 11.5 21.9	—	—	—	なし	外面:叩き目痕 内面:横位のナデ調整。	—	内外面ともに黒色釉。口縁上部と外底面は露胎。	なし	なし	薩摩焼
第28図 2 図版 28-2	—	墓口	御殿形 (陶製)	45.9×32.5 41.5×27.2 40.3 36.0×24.0 36.7	アーチ形	2個 方形	—	正面及び左右に貼付けによる蓮華文と法師を配するが、形状は不明瞭。正面の屋門も貼付。	型作り成型後、ナデ調整。	9個 円形	外面に白化粧後、緑釉及び褐色釉で彩色し、透明釉を施す。口唇部は白化粧のみ。内面及び外底面は褐色釉。	なし	なし	

第22表 51号墓 出土陶磁器観察一覧表

単位: cm  
( )は復元値

図番号	出土地点	器形	残存部位	口径	器高	底径	施釉	釉色・色調	貫入	文様等	備考
第28 図3	墓室	碗	口縁部から底部	13.5	5.5	4.5	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。見込には目痕。畳付は露胎。	全体: 白色 文様: 鮮やかな色調のコバルト	なし	外面は長方形の点描を全面に配する中に、松竹梅文と3ヶ所に鶴を描画。内面は口縁に長方形の点描の間に壽福文。見込に松竹梅文。	スンカンマカイ/砥部産/大正～昭和/底部に印なし
第28 図4	墓室	碗	口縁部から底部	13.7	5.9	5.2	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。畳付は露胎。	全体: 白色 文様: くすんだ色調のコバルト	なし	外面は点描を全体に描く中に、松竹梅文と3カ所に花文を配する。内面は口縁に沿って菊文を、見込に松竹梅文を配する。	スンカンマカイ/砥部産/大正～昭和/底部に印なし
第29 図1	墓室	碗	口縁部から底部	13.6	6.0	4.9	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。見込には目痕。畳付は露胎。	全体: 青みがかった白色 文様: くすんだ発色のコバルト	なし	外面は点描でひし形の窓を作り、中に花文。1カ所で型が折り重なる。内面は口縁部に点描で逆三角形を配する。見込には松竹梅文。	スンカンマカイ/砥部産/大正～昭和/底部に印なし
第29 図2	墓室	碗	口縁部から底部	(13.0)	6.0	4.7	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。見込には目痕。畳付は露胎。	全体: 白色 文様: 鮮やかな発色のコバルト	なし	外面は点描でひし形の窓を作り、中に花文。1カ所空白有。内面は口縁部に点描で逆三角形を配する。見込には松竹梅文。	スンカンマカイ/砥部産/大正～昭和/底部に印なし
第29 図3	墓室	碗	ほぼ完形	12.6	6.6	4.4	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。見込には目痕。畳付は露胎。	全体: 青みがかった白色 文様: 鮮やかな発色のコバルト	なし	外面は点描でひし形の窓を作り、中に花文。内面は口縁部に点描で逆三角形を配する。所々滲みがみられる。見込には松竹梅文。	スンカンマカイ/砥部産/大正～昭和/底部に印あり
第29 図4	墓室	碗	ほぼ完形	13.0	6.7	5.0	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。見込には目痕。畳付は露胎。	全体: 青みがかった白色 文様: くすんだ発色のコバルト	なし	外面は点描でひし形の窓を作り、中に花文。花文はかすれ、ズレ有。内面は口縁部に点描で逆三角形を配する。見込には松竹梅文。	スンカンマカイ/砥部産/大正～昭和/底部に印あり
第30 図1	墓室	碗	口縁部から底部	13.0	6.25	4.8	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。見込には目痕。畳付は露胎。	全体: 青みがかった白色 文様: 鮮やかな発色のコバルト	なし	外面は点描でひし形の窓を作り、中に花文。ひし形に大小がみられる。内面は口縁部に点描で逆三角形を配する。見込には松竹梅文。	スンカンマカイ/砥部産/大正～昭和/底部に印あり
第30 図2	墓室	碗	口縁部から底部	13.7	6.9	6.0	白化粧後、透明釉。見込は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付は露胎。	全体: 灰色 文様: 青色・褐色	なし	外面に鉛釉による丸文を配し、その外をコバルトによる丸文を円形に配して囲む。	沖縄産(壺屋)。
第30 図4	墓室	蓋	概ね残存	3.9※	4.1	7.2※	上面に黒釉を施釉後、蛇の目釉剥ぎ。内面は露胎。	上面: 黒褐色	なし	なし	沖縄産。 ※口径はつまみ径 ※底径は縁部径

第23表 52号墓 出土陶磁器観察一覧表

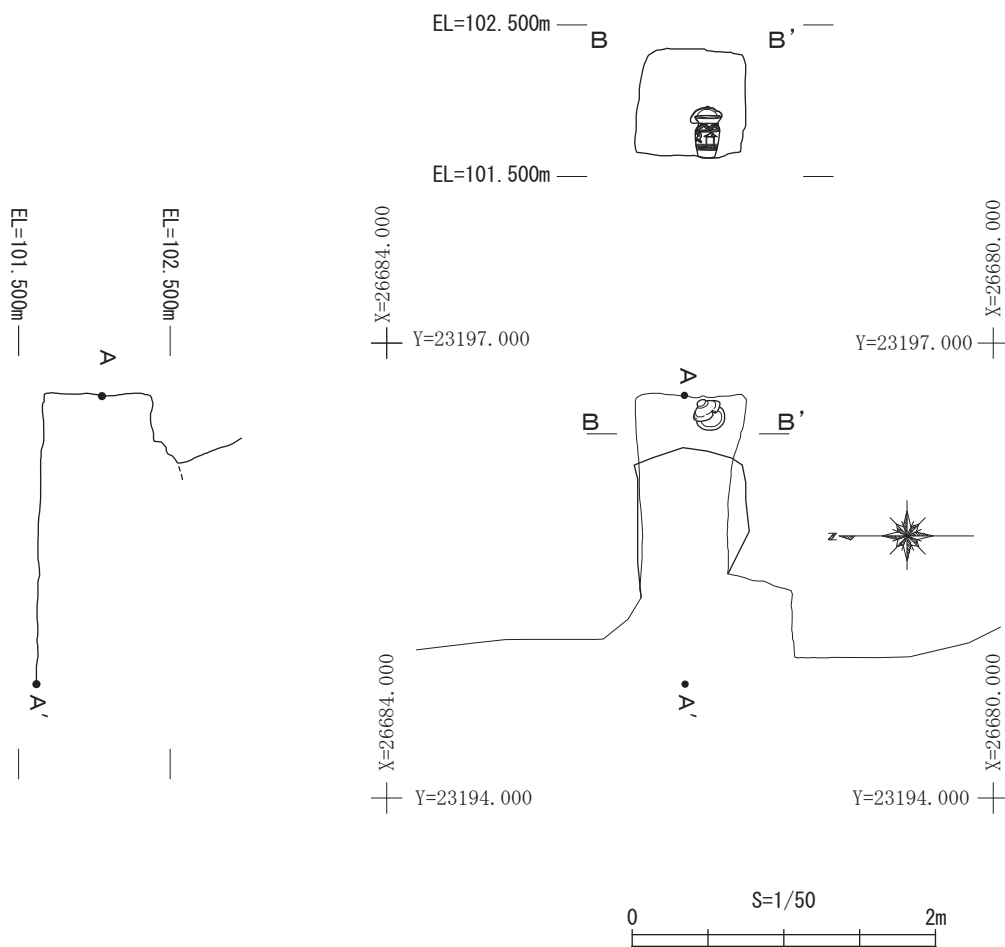
単位: cm

図番号	出土地点	器形	残存部位	口径	器高	底径	施釉	釉色・色調	貫入	文様等	備考
第30 図5	墓室	碗	口縁部から底部	12.6	6.2	5.8	白化粧後、透明釉。見込は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付は露胎。	全体: 灰白色	なし	外面の口縁部3カ所に青色の文様を施す。	沖縄産。

## 第10節 56号墓

### (1) 遺構 (第31図)

56号墓は丘陵中央付近の西側斜面地の中腹辺りで検出された墓遺構で、ニービの地山に構築された掘込墓である。墓口は明瞭ではないものの、概ね墓室は残存しているものと思われる。墓室は幅0.67m、奥行の残存長1.20mを検出し、奥行の長い長方形の平面観を呈する。墓口は西(N85°W)を向き、棚などの構造は持たない。墓室内は、半分の高さまでニービが流れ込み埋没した状態で検出された。



第31図 56号墓 遺構図



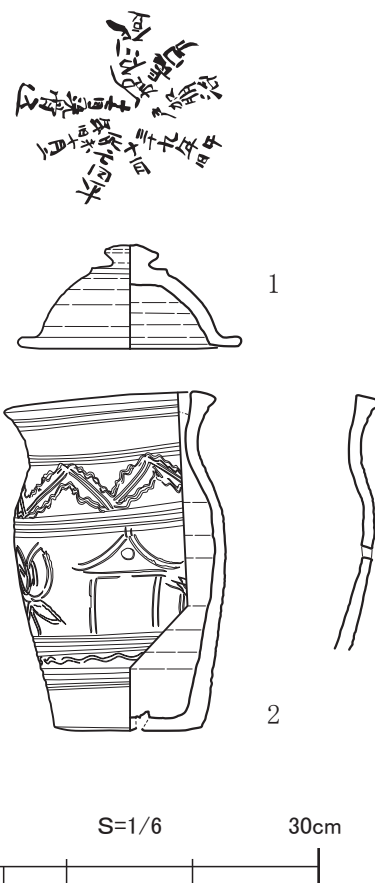
奥壁際からは小型のマンガン釉甕形蔵骨器が床面直上に直立した状態で出土した。蓋は身の口縁からややずれた状態で奥壁に寄りかかっているが、概ね原位置に近い状態で検出されたものとみられる。本調査区の中で56号墓は小型の墓遺構であるが、出土した蔵骨器1基のみを納めるために作られたものとしては、やや規模が大きいように思われる。

墓の造営・使用に関する過程の詳細は不明であるが、蔵骨器の蓋に記載された銘書に「明治三十九年」の文字を読み取ることができることから、本遺構の埋没がこの頃であろうと推測することができる。

(2) 遺物 (第32図、第24・25表)

本遺構から出土した遺物は、前述の蔵骨器のみである。

身に描かれた文様は全て叉状工具による線彫りで、底面孔は貫通していない。肩部の葉文・胴部の蓮華文や屋門の描き方は全体的に乱雑な印象である。底部に対して口縁は水平にならず、歪んだ状態である。また、蓋のつまみ接合部も無孔である。全体的に簡略に作られた蔵骨器であると感じられる。



第32図 56号墓 出土遺物

(3) 銘書

第24表 56号墓 出土蔵骨器(蓋)観察表

単位: cm

図番号	取上番号	出土地点	形式	つまみ台径 口径 内径 器高 体部高	つまみ形 つまみ接合部孔 つまみ台 銜 かえり	文様	調整痕	釉薬	銘書	死去年	洗骨年	備考
第32図 1 図版 28-4	1	墓室	マンガン 釉甕形	5.9 17.7 12.8 8.2 6.4	扁平型 無 1段 有(2.5cm) 無	なし	外面:ヘラケズ リ調整 内面:ナデ調整	外面:底の際ま でマンガン釉。 内面:露胎	石川登/加長男/戸加 明治/三十九年旧午/ 十一月/死亡同四十/ 年旧未十月二/十七日 二洗骨ス口	明治39 (1906)	明治40 (1907)	

第25表 56号墓 出土蔵骨器(身)観察表

単位: cm

図番号	取上番号	出土地点	形式	口径 胴径 底径 器高	窓枠/ 屋門	窓数/ 形	横帯	文様	調整痕	底面孔	釉薬	窯印	銘書	備考
第32図 2 図版 28-5	1	墓室	マンガン 釉甕形	16.8 16.7 11.7 27.0	瓦屋 形	1個 円形	凹2 凸1 凹3 凹3 凹3	肩部に葉文、胴部 に屋門とその左右 に蓮華文、胴下部 に波状文が、全て 叉状工具による沈 線で施文。	外面:ナデ調整。底 部際にヘラケズリ調 整。 内面:横位のヘラ調 整。下部に明瞭な ナデ・ケズリ痕	5個 半裁竹 管形	内面頸部から 外面底部際ま でマンガン 釉。外底面は 露胎。	なし	なし	底面孔は 貫通しな い。

蓋の内面に楷書で書かれた銘書であるが、字の形状は整っておらず、文字配置や行替えなども不揃いであることから、文字を書くことに不慣れな様子が感じられる。

## 第11節 57号墓

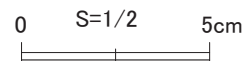
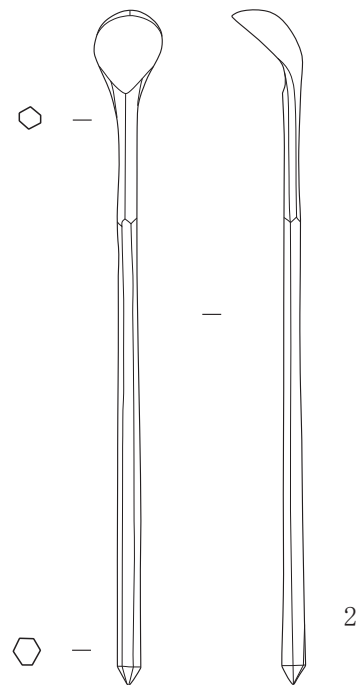
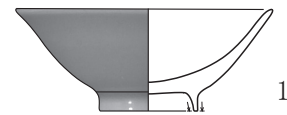
### (1) 遺構 (第34図)

57号墓は丘陵中央付近で北西側の斜面地の中段に検出された墓遺構で、ニービの地山に構築された掘込墓である。墓庭から墓口、天井を含む墓室までが概ね残存しており、本丘陵の中では墓形態等の様相を良好に窺うことのできる遺構である。墓庭は広く幅3.9m、奥行きが残存長3mの大きさを測る。墓口は幅0.61m・高さ0.89mで、検出時には石灰岩製の蓋石により閉塞され、蓋石の手前にはやはり石灰岩製の香炉石が置かれた状態で検出された。この蓋石から墓室側0.5m奥の左右壁面には幅5cmの段差が設けられており、段差から墓室側では羨道幅が0.51mとなりやや狭くなる。もとはここに蓋石をはめ込むため設けられた構造であろうと考えられる。墓口方位は西北西(N74°W)を向く。

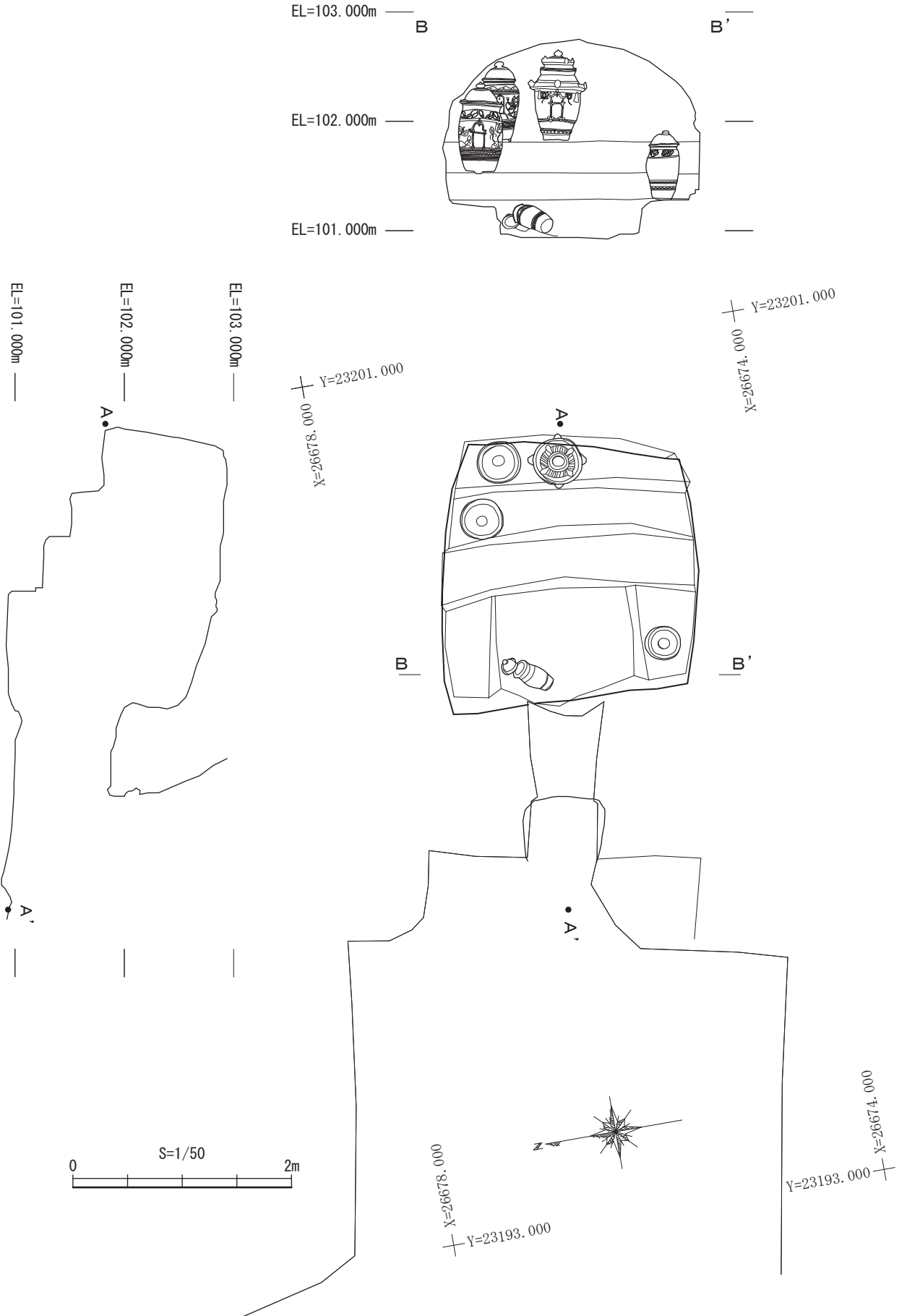
墓室は幅2.25m・奥行き2.44mのやや奥行きの高い方形で、シルヒラシから天井までの高さが1.86mを測り、本丘陵の中でも規模の大きい墓遺構であるといえる。左右の壁面際に1段の棚、奥壁沿いに3段の棚が作られており、墓室形態の分類において5類bに区分される構造を有する。墓室内には堆積土などは殆ど見られなかったことから、最後に閉塞された際の墓室内の状態が保たれているものと考えられる。

墓室内からは完形の蔵骨器が5点出土した。1番棚の中央にマンガン釉底付甕形蔵骨器が、右壁際にマンガン釉甕形蔵骨器が直立した状態で屋門を墓口側に向けた状態で検出された。2番棚の右壁沿いからはやはりマンガン釉甕形蔵骨器が1点、屋門を墓口に向け直立しており、左棚にはマンガン釉甕形蔵骨器が屋門を左壁に向けて直立して検出された。もう一つの蔵骨器は小型のマンガン釉甕形蔵骨器で、右棚直下のシルヒラシ直上に横倒しになった状態で検出された。

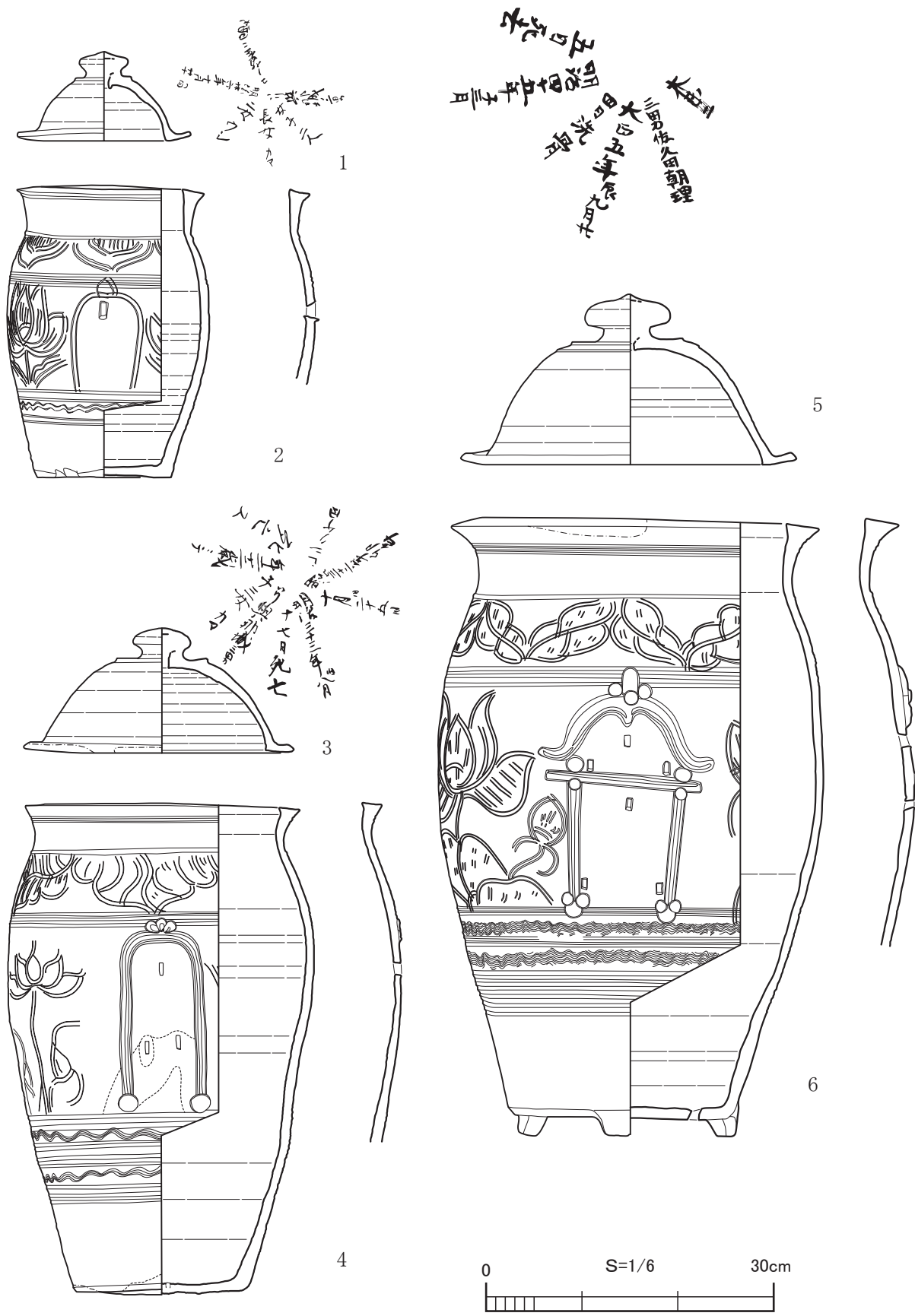
本遺構は、墓室の3段コの字状の棚を有する構造およびマンガン釉甕形蔵骨器の身が納められている点、加えて銘書に明治20～30年代の記載が読み取れることなど



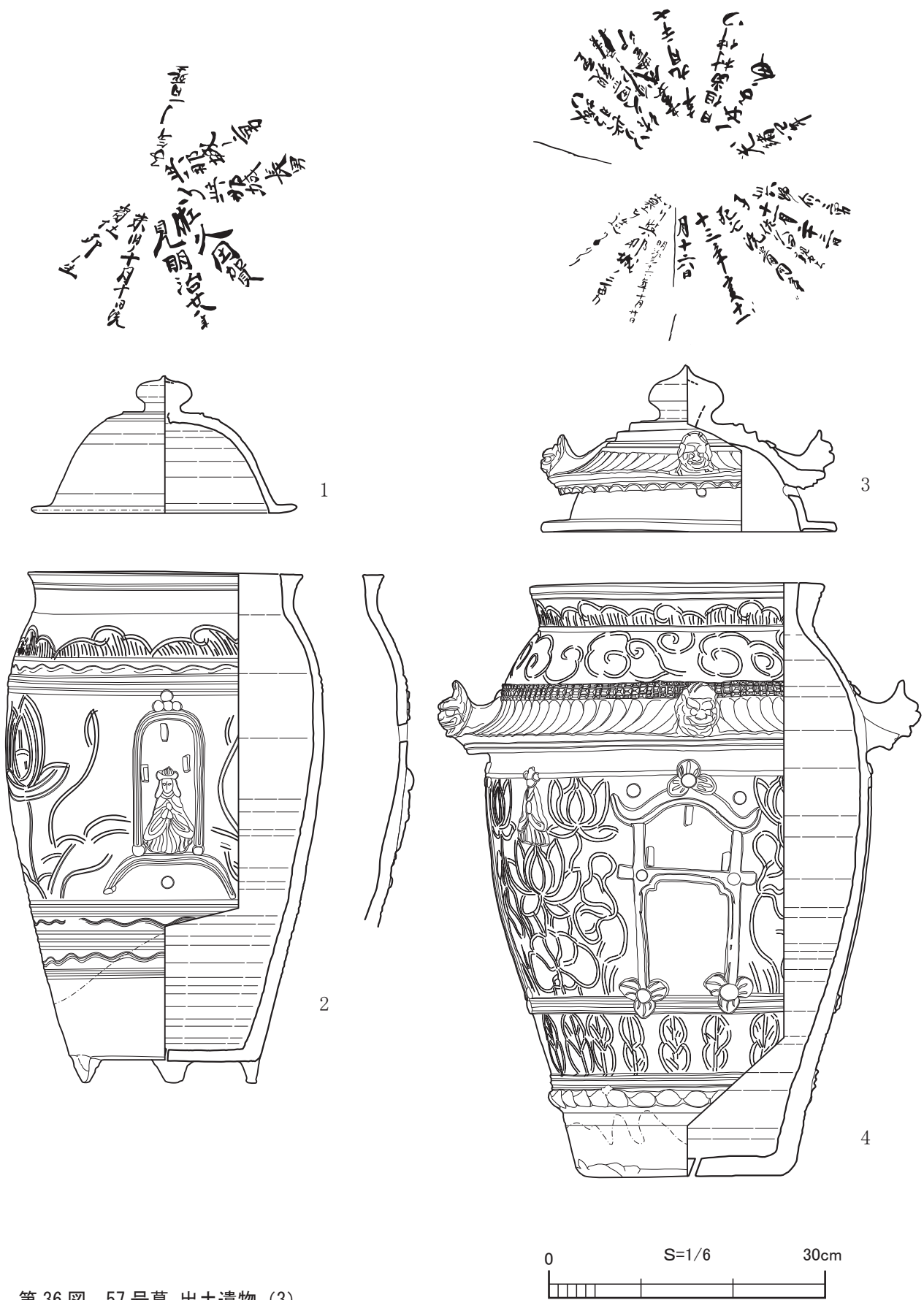
第33図 57号墓 出土遺物 (1)



第 34 图 57 号墓 遺構図



第 35 图 57 号墓 出土遺物 (2)



第 36 图 57 号墓 出土遗物 (3)

第26表 57号墓 出土蔵骨器(蓋)観察表

単位: cm

図番号	取上番号	出土地点	形式	つまみ台径 口径 内径 器高 体部高	つまみ形 つまみ接合部 孔 つまみ台 鏝 かえり	文様	調整痕	釉薬	銘書	死去年	洗骨年	備考
第35図 1 図版 28-7	1	墓室	マンガン 釉甕形	5.8 18.1 13.0 9.3 6.7	宝珠形 有孔 1段 有(2.6cm) 無	なし	外面:ヘラケズリ調整。庇と胴部の境界にナデによる凹線。内面:ヘラケズリ調整。	内外面ともにマンガン釉。外面はヘラによる横位による横位の施釉。	いり與那城ノ二男/女子二人/長女カマ/二女ウシ/明治廿六年十月廿日/コノ墓ニ遷口	—	—	庇がわずかにゆがむ。庇内面に目痕。
第35図 3 図版 28-9	2	墓室	マンガン 釉甕形	6.0 28.3 22.5 13.1 9.9	饅頭形 有孔 1段 有(3cm) 無	なし	外面:ヘラケズリおよびナデ調整。内面:ロクロ調整痕を明瞭に残す	外面:マンガン釉を庇の内面まで施釉。内面:露胎	明治三十三年旧八月/十七日死亡/いり與那城三男/子三女カマ/年二十二歳ニテ/死亡ス/シクチ日/明治三十六年卯年/十月旧二十五日	明治33 (1900)	明治36 (1903)	
第35図 5 図版 29-1	3	墓室	マンガン 釉甕形	11.7 35.0 28.0 17.8 12.9	宝珠形 有孔 2段 有(3cm) 無	なし	外面:ナデ調整。つまみ台の2段目にヘラケズリ。内面:ロクロ成形痕を明瞭に残す。	外面:全体にマンガン釉。つまみ基部および庇の際は露胎。内面:露胎	大正二/三男佐久田朝理/大正五年辰九月廿/四日洗骨/明治四十五年子三月/五日死去	明治45 (1912)	大正5 (1916)	
第36図 1 図版 29-3	4	墓室	マンガン 釉甕形	8.8 28.7 22.8 14.9 11.0	宝珠形 有孔 2段 有(3cm) 無	なし	外面:全体をナデ調整。内面:横位のナデ調整	外面:マンガン釉をハケにより横位の施釉。内面:露胎	子年[九]月一日死亡/與那城ノ二男/いり與那城長男/佐久田賀/見明治廿八年/未旧ノ十月十日洗骨仕卯ノ生	明治21 (1888) ?	明治28 (1895)	
第36図 3 図版 30-1	5	墓室	マンガン 釉底付 甕形	12.2 32.2 24.5 18.5 12.7	宝珠形 有孔 2段 有(3.9cm) 有(3mm)	軒上に降棟を4本、先端に獅子頭を貼付。半裁竹筒による押引で瓦葺を表現。軒下は波状に成形。	外面:ナデ調整。内面:ナデ調整。	外面:全体にマンガン釉。内面:露胎	い[り]與那城ノ/佐久田筑登之親雲上/口口口/但口ノ子/妻咸豊卯/年九月二十七日/但当初仲門ノ女子かま/光緒四年/口口口三男/子十一月二十三日/佐久田親雲上/死亡洗骨同年/十三年亥十一月十六日/卯年/明治三十六年口月/口日/いり與那城ノ三男/墓ヲ造リタリ	咸豊卯 (1855) ? 光緒4 (1878)	光緒13 (1887)	

から、明治から大正の近代まで使用されていた様子を窺うことができる。

(2) 遺物 (第33・35・36図、第26～28表)

本遺構から出土した遺物は、前述の蔵骨器5点と、小杯1点及び簪である。これらについて図示するとともに観察所見を記載する。

第33図2(図版28-6)は、金属製の簪で頭部が匙状の形態である点から女性用のジーファーであると考えられる。全体が緑錆に覆われていることから銅製であると思われ、一部で錆が剥落し地金が露出している。首部の断面形はやや崩れた六角形、竿部の断面形も六角形を呈する。竿部の先端に向かいわずかに太くなってゆく形状を見てとれる。全長17.8cm。

(3) 銘書

第27表 57号墓 出土蔵骨器(身)観察表

単位: cm

図番号	取上番号	出土地点	形式	口径 胴径 底径 器高	窓枠/ 屋門	窓数/ 形	横帯	文様	調整痕	底面孔	釉薬	窯印	銘書	備考
第35図 2 図版 28-8	1	墓室	マンガン 釉甕形	19.5 21.1 13.8 30.5	アーチ形	1個 方形	凹2 凸1 凹3 凹2 凹2	又状工具による沈線で、肩部に葉文、胴部に屋門及びその左右に蓮華文、胴下部に波状文。	外面:ナデ調整。底部際および外底面にヘラケズリ調整。内面:横位のヘラ調整。	11個 方形	外面:口縁から底部際までマンガン釉。底面露胎。内面:露胎	なし	なし	小型
第35図 4 図版 28-10	2	墓室	マンガン 釉甕形	28.7 32.0 17.3 51.5	アーチ形	3個 方形	凹2 凸1 凹4 凹3 凹3 凹3	又状工具による沈線で、肩部に葉文、胴部に屋門の左右に蓮華文。屋門は貼付。胴下部に二条のヘラ掻きの波状文。	外面:ナデ調整。下部はヘラナデ、底部際はヘラケズリ調整。内面:横位のヘラ調整。	18個 半月形	外面:口縁から底部際までマンガン釉。底面露胎。内面:露胎	なし	なし	
第35図 6 図版 29-2	3	墓室	マンガン 釉甕形	38.3 40.1 23.6 64.6	唐破風形	6個 方形	凹3 凸1 凹4 凹2 凹2 凹6	又状工具による沈線で、肩部に葉文、胴部に屋門に蓮華文。胴下部にはヘラ掻きによる二条の波状文。屋門は貼付。	外面:ナデ調整。下部はヘラナデ、底部際はヘラケズリ調整。内面:横位のヘラ調整。	16個 半裁竹管形	外面:口縁から底部際までマンガン釉。底面露胎。内面:露胎	なし	なし	底部に脚が3個。
第36図 2 図版 29-4	4	墓室	マンガン 釉甕形	29.7 34.4 20.7 55.6	アーチ形	3個 方形	凹2 凸1 凸3 凹3 凹3 凹2	又状工具による沈線で、肩部に連弁文、胴部屋門の左右に蓮華文、胴下部に二条の波状文。屋門は貼付。屋門内には法師を貼付。	外面:ナデ調整。下部はヘラナデ、底部際はヘラケズリ調整。内面:横位のヘラ調整。	25個 半月形	外面:口縁~横帯6の下までマンガン釉。全体的に薄い。内面:露胎	なし	なし	底部に脚が3個。
第36図 4 図版 30-2	5	墓室	マンガン 釉底付 甕形	32.3 40.8 24.0 65.0	唐破風形	3個 方形	凹2 凸1 凸3 凸3 凸1	口縁直下及び肩部に連弁文及び唐草文、胴部に蓮華文、胴下部に葉文を又状工具による沈線で施文。半裁竹筒による押引きで瓦葺を表現。四面に獅子頭を貼付。屋門は貼付、胴部の二カ所に法師を貼付。	外面:ナデ調整。下部はヘラナデ、底部際はヘラケズリ調整。内面:横位のヘラ調整。	5個 半裁竹管形 1個 円形	外面:口縁~横帯6の下までマンガン釉。全体的に薄い。内面:露胎	なし	なし	

第28表 57号墓出土 陶磁器観察一覧表

単位: cm

図番号	出土地点	器形	残存部位	口径	器高	底径	施釉	釉色・色調	貫入	文様等	備考
第33 図1	墓室	小杯	完形	6.8	2.7	2.6	全面にクロム釉を掛ける。畳付は露胎。	全面緑色。口縁と畳付及び高台内は白色。	なし	なし	

出土した蔵骨器の蓋5点の全てに銘書の記載が確認できた。いずれも放射状に書かれており、複数の筆跡が見てとれる。蔵骨器5では、一つの蓋内に2種類の筆跡を窺うことができる。それぞれの銘書には「佐久田」姓や「いり與那城」の屋号が共通することから、これら蔵骨器の被葬者が近親関係にあったことが窺われる。文字等の詳細については第26表及び第44表を参照いただきたい。

(4) 人骨

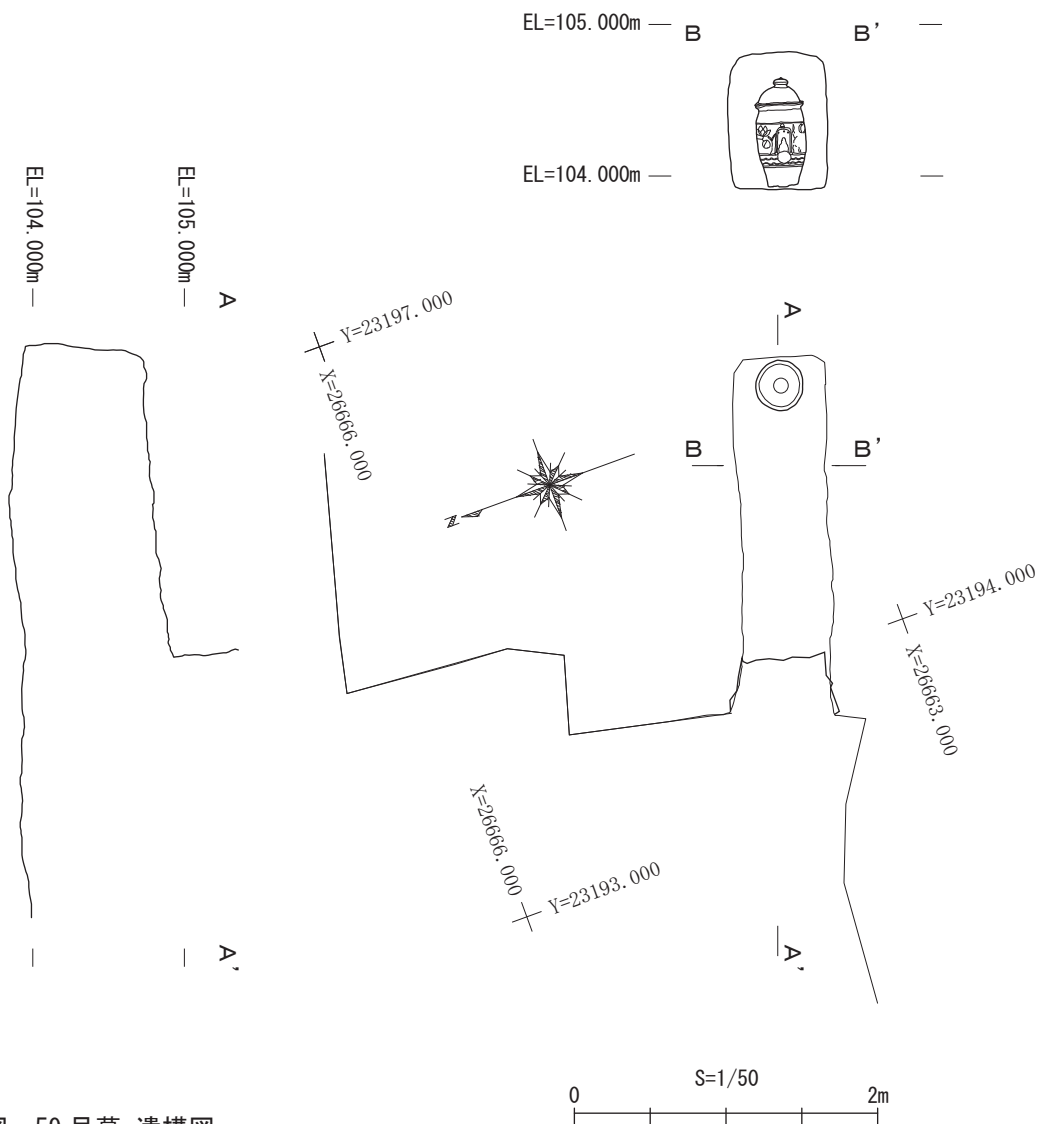
蔵骨器内部には土が流入していなかったことから、人骨の残存は確認しやすかったものの、残存状態は悪く、一部の部位同定は可能であったが、完存する部位は少なく形態の観察などは困難である資料が多くを占める。詳細については第5章に記載する。

## 第12節 59号墓

### (1) 遺構 (第37図)

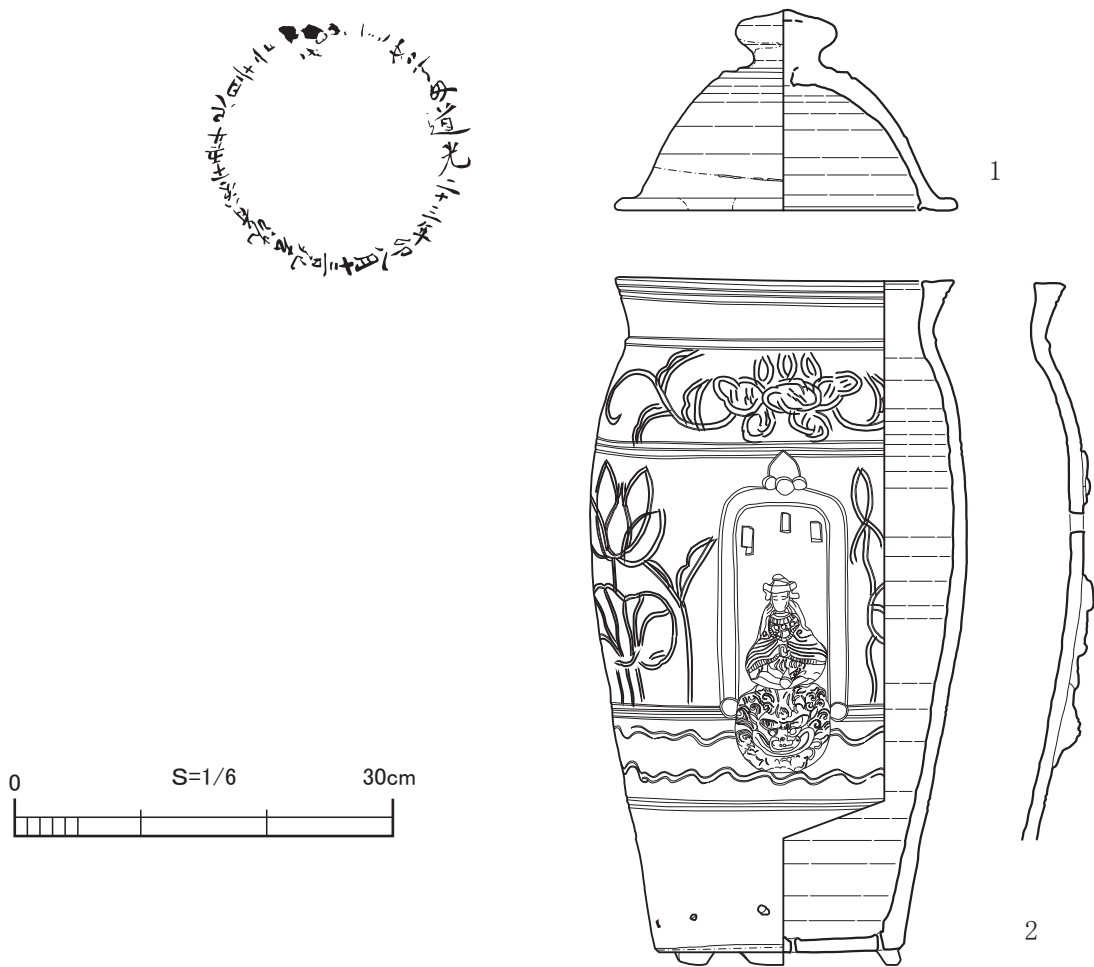
59号墓は丘陵中央付近で北西側の斜面地の中段に検出された墓遺構で、ニービの地山に構築された掘込墓である。墓口の幅は0.62 mで、墓室奥まで同じ幅で掘り込まれている構造が見てとれる。墓口方位は西北西 (N 60° W) を向き、奥行は1.99 m、天井までの高さは0.95 mを測る。墓室は奥に向けて非常に長い長方形で、左右の壁面と天井も平面で構成されていることから、墓室断面形状も長方形で一定している。蔵骨器1基分を想定した墓室の形状と思われるが、類似の規模の墓遺構と比べると、奥行は前田・経塚近世墓群の中でも珍しい長さで作られたものであるといえる。また、墓室内部はクチャ交じりのニービが堆積していたが、遺構の天井が崩落した様子が窺われない。このことから遺構は意図的に埋められたものである可能性が指摘できる。奥行が長大な構造であることも、何らかの意図によるものである可能性も示唆されよう。

遺物は奥壁際で床面直上に直立した状態で出土した蔵骨器である。マンガン釉甕形蔵骨器で、身に蓋が合わせられた状態で検出され、屋門は墓口を向けて設置されている。蓋を乗せた状態の



第37図 59号墓 遺構図





第38図 59号墓 出土遺物

第29表 59号墓 出土蔵骨器(蓋)観察表

単位: cm

図番号	取上番号	出土地点	形式	つまみ台径 口径 内径 器高 体部高	つまみ形 つまみ接合部孔 つまみ台 鏝 かえり	文様	調整痕	釉薬	銘書	死去年	洗骨年	備考
第38図 1 図版 30-3	1	墓室	マンガン 釉甕形	8.0 27.3 21.4 15.9 11.1	宝珠形 有孔 2段 有(3cm) 有(2mm)	なし	外面: 胴部ナデ調整。つまみ台の下にヘラケズリ。 内面: 横位のナデ調整。	外面: 全体にマンガン釉。 内面: 露胎	道光二十三年卯八月十三日死去洗骨 八次二十五年巳八月二十二日□□□ □□女□[かま]	道光23 (1843)	道光25 (1845)	

第30表 59号墓 出土蔵骨器(身)観察表

単位: cm

図番号	取上番号	出土地点	形式	口径 胴径 底径 器高	窓枠/ 屋門	窓数/ 形	横帯	文様	調整痕	底面孔	釉薬	窯印	銘書	備考
第38図 2 図版 30-4	1	墓室	マンガン 釉甕形	26.8 29.8 19.8 54.7	アーチ形	3個 方形	凹2 凸1 凹3 凹3 凹2	叉状工具による沈線で、肩部に唐草文、胴部屋門の左右に蓮華文、胴下部に二条の波状文。屋門は貼付で、屋門内に法師と獅子頭を貼付。	外面: ナデ調整。胴下部及び底面にはヘラナデ調整。 内面: 横位のヘラナデ調整。回転調整が明瞭。	16個 方形	外面: 口縁から底部際までマンガン釉。底面露胎。 内面: 露胎	なし	なし	方形の側面孔を10カ所に開ける。 底部に脚が3個。

底面からの高さは約 70 cm で、奥壁際の天井との隙間はほとんどない状態であった。

本遺構は出土した蔵骨器を納めることに合わせて造墓された可能性が窺われ、当該蔵骨器の蓋には「道光二十三年」あるいは「道光二十五年」の記載がみられることから、同時期の造営が想定される。一方で、稀な構造を持つ点から考えると、何らかの特異な事情が生じていた可能性も想起されることから、銘書の記載と遺構の使用時期の関係性については検討を要するものと考えられる。

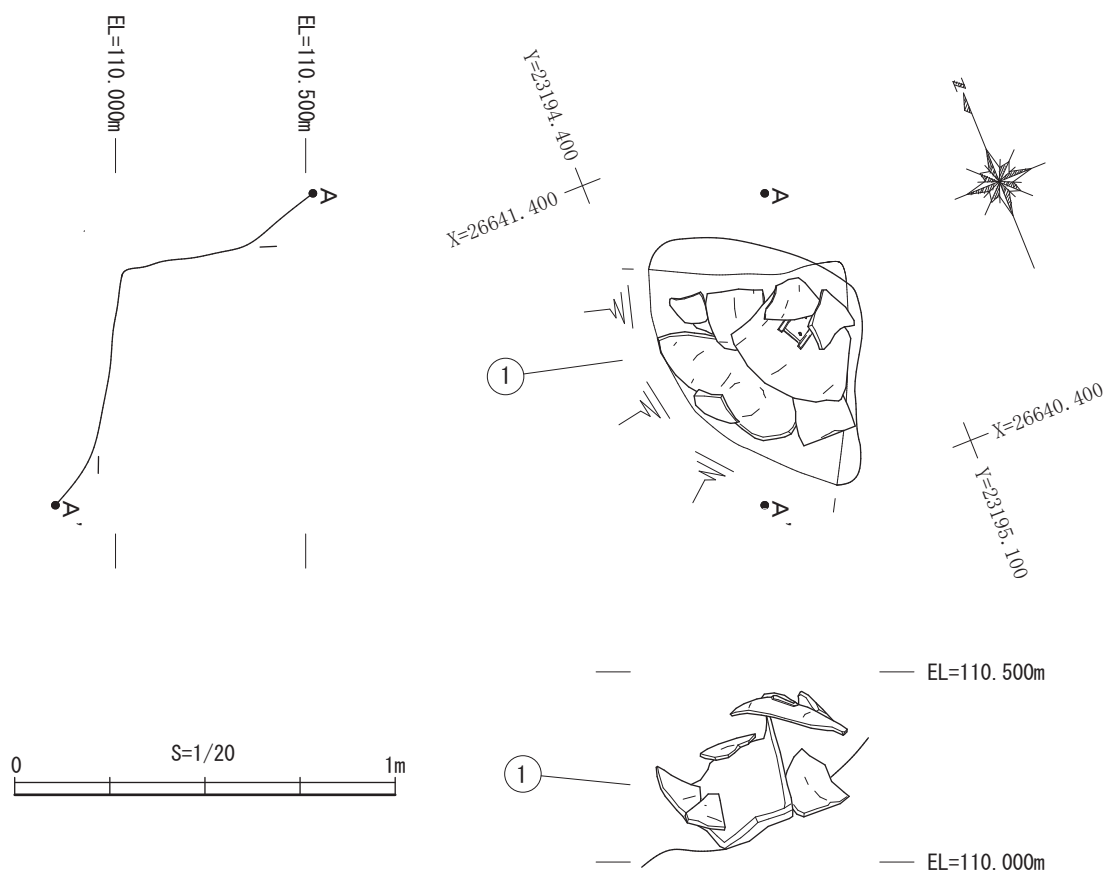
### (2) 遺物 (第 38 図、第 29・30 表)

本遺構から出土した遺物は、前述の蔵骨器のみである。

身の文様は、肩部及び胴部の葉文・蓮華文は又状工具による線彫りで、屋門及び屋門内側に獅子頭と法衣をまとった人物が貼り付けにより表現される。

### (3) 銘書

蓋の内面に円形に文字を連ねている。本丘陵で出土したマンガン釉掛けの蓋に書かれた銘書は、放射状に書かれているものが大半を占めており、本遺構出土のように円形に書かれたものは、ほかには 51 号墓で出土した 1 点のみである。



第 39 図 64 号墓 遺構図

#### (4) 人骨

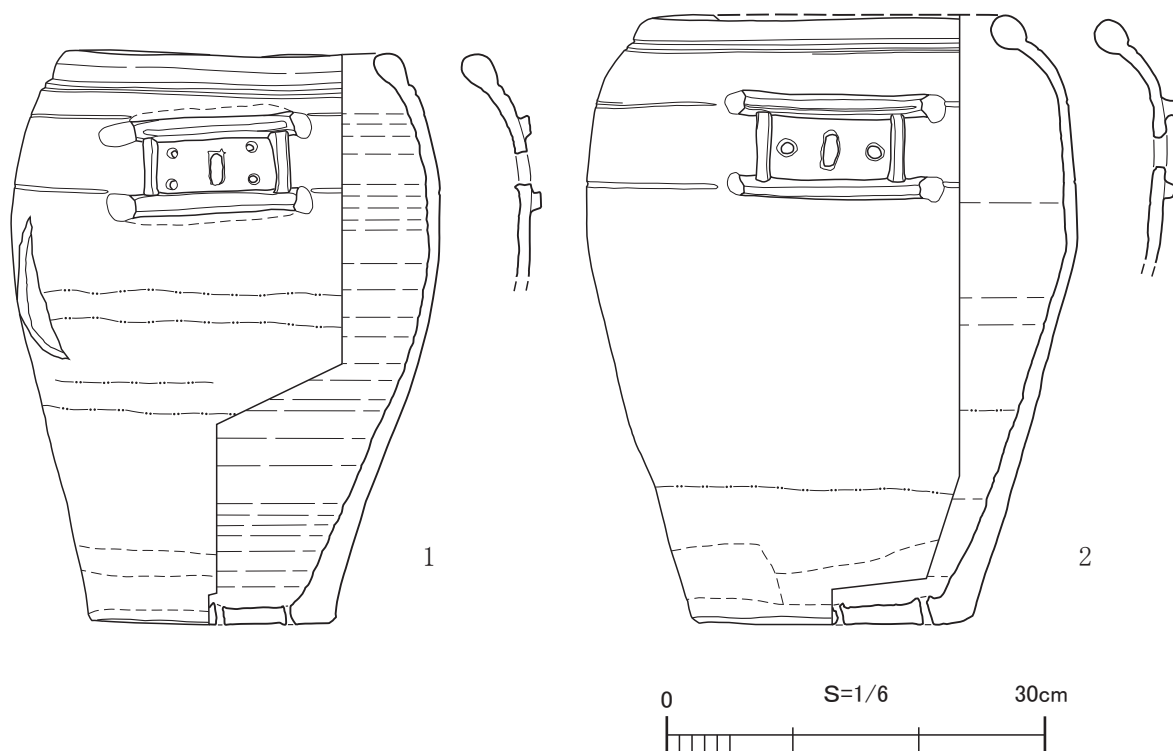
蔵骨器内部には土が流入していなかったことから、人骨の残存は確認しやすかったものの、残存状態は悪く、一部で部位同定が可能であったのみである。詳細については第5章の記載を参照いただきたい。

### 第13節 64号墓

#### (1) 遺構 (第39図)

比較的緩やかだった斜面が急に立ち上がるコーナー部分に位置する。わずかな窪みが残りにそこにかろうじて厨子甕があったわけだが、下方に壕である63号遺構があるが一部その天井が崩れたため、一緒に崩壊したものと考えられる。平面は墓のコーナーとみられる部分が扇型に残り、厨子甕が残されていたことから棚の一部かもしれないが不明。墓口は遺構の南南西もしくは90°振った西北西側にあったと思われるが、65号墓以下の墓と並んでいた可能性もあり、そうであれば南南西側であったと推測できる。

出土した厨子甕2基は安里編年ではおおよそ18世紀代のものであるが、他にどのような厨子甕がどれだけ存在していたか不明であり墓の使用年代の一端を示す可能性があるという程度にとどまる。



第40図 64号墓 出土遺物

第31表 64号墓 出土蔵骨器(身)観察表

単位: cm

図番号	取上番号	出土地点	形式	口径 胴径 底径 器高	窓 枠/ 屋門	窓数/ 形	横帯	文様	調整痕	底面孔	釉薬	窯印	銘書	備考
第40 図1 図版 31-1	1	墓室	ポー ジャー形	26.0 34.0 19.6 45.6	平 葺 形	5個 1方4 円	凹2 凹1 凹1	なし	外面:ヘラ削り調整。口縁部 から肩部は刷毛調整。底部 際にヘラ削りの痕。 内面:ヘラ削り調整。	5 円形	泥釉を口 縁部から 底部際ま で施釉。	なし	なし	口唇部に枝サンゴ の目跡が4つ。素 地に石英砂粒混 入。底に焼台の 痕。喜名焼。
第40 図2 図版 31-2	2	墓室	ポー ジャー形	28.6 38.8 22.2 48.3	平 葺 形	3個 1方2 円	凹2 凹1 凹1	なし	外面:ヘラ削り調整。口縁部 は刷毛調整。底部際にヘラ 削りの痕。 内面:ヘラ削り調整。	13 円形	なし	なし	なし	口唇部にべた重 ね焼きの痕。底に 焼台の痕。

(2) 遺物 (第40図、第31表)

遺物はかろうじて遺構に伴っていた厨子甕と、遺構検出時に崩落土中から出土した厨子甕片がある。

遺構に伴うものは1基と思われていたが、整理作業で2基分の破片があることがわかり、いずれも崩落土出土のものと接合ができて2基が復元できた。なお蓋は2個体分の破片が出土している。

## 第14節 65号墓

(1) 遺構 (第41図)

丘陵南斜面に並ぶ墓のうち西端に位置する(方向が不確定な64号墓は除く)。墓口方位は南南西(N147°W)で幅0.38m、羨道長は0.59m。ニービヌフニの閉塞石が2枚残る。墓口から墓室にかけての天井はほとんどが崩壊しているが奥棚部分の一部で残存している。墓室は幅0.58×奥行0.67m、奥に高さ0.2m・奥行0.14mの棚が一段削り出されている。東隣の66号墓の墓室と近すぎたためか、墓室左壁が崩れ両墓室は貫通している(戦時中の意図的な貫通も否定はできないのだが、なんともいえない)。羨道とシルヒラシ、羨道と墓庭には段差があり、シルヒラシ・墓庭の方が低い。墓庭は確認できるだけで奥行1.1mあり、幅は0.6mと墓室とあまり変わらない。

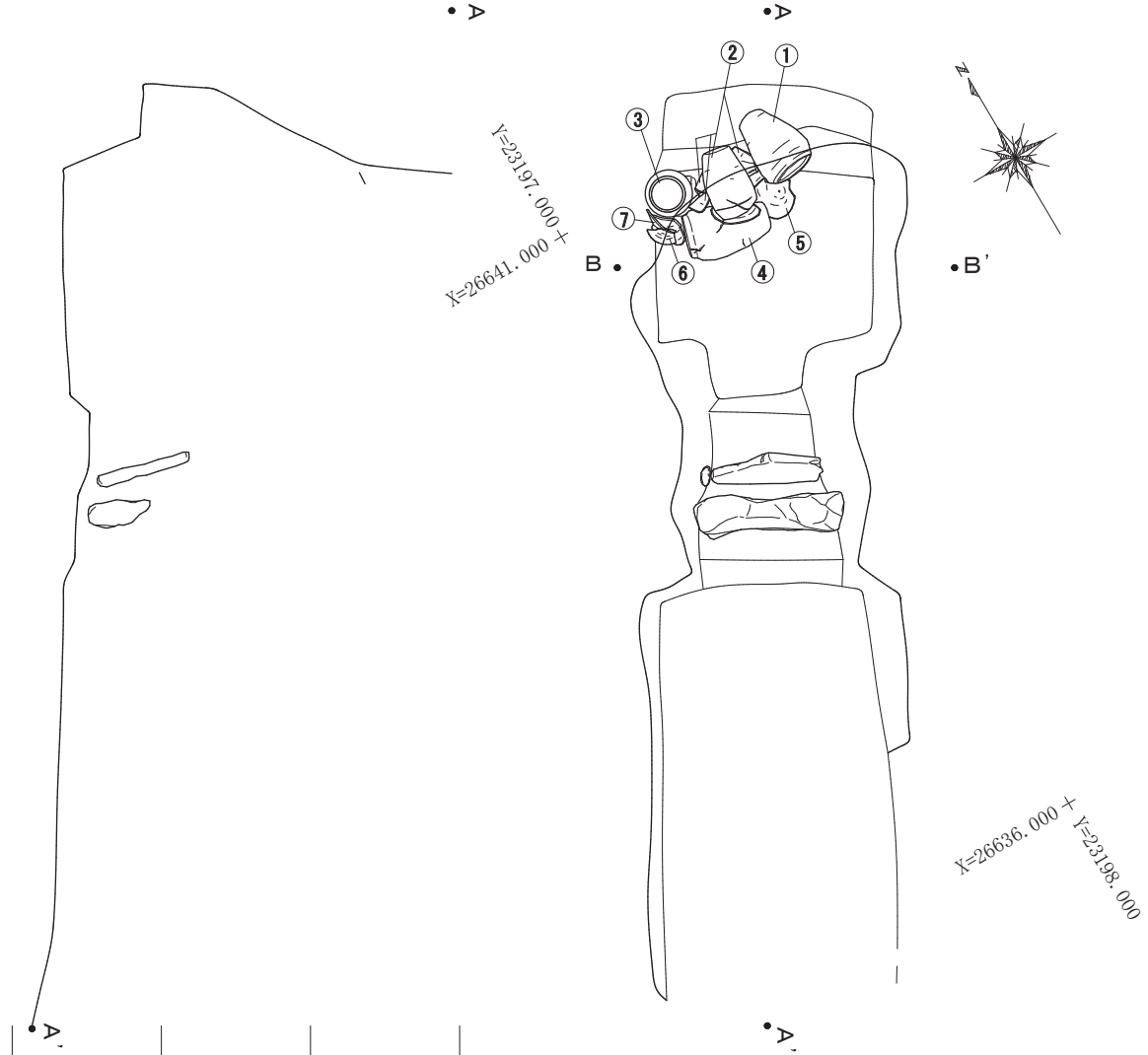
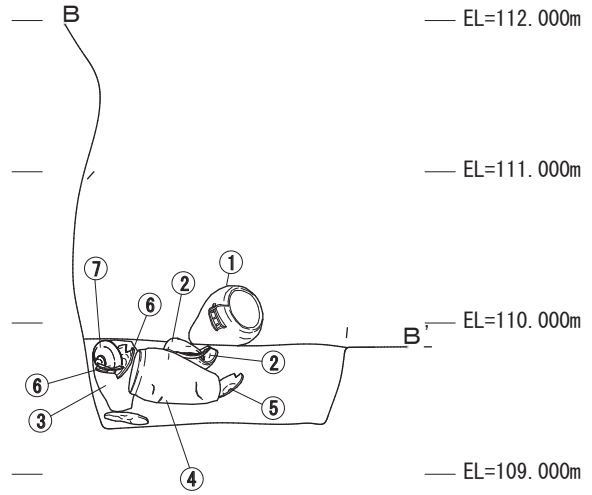
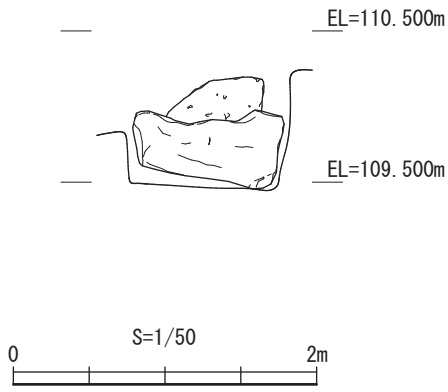
蔵骨器はすべてポージャー形で銘書はないが蓋と身の年代とを突合すると18世紀代に納まるものである。一部であるが墓口の閉塞石が残っていること、マンガン釉甕形の厨子甕がないことなどから19世紀に入る前後には埋没していた可能性がある。

(2) 遺物 (第42～44図、第32～34表)

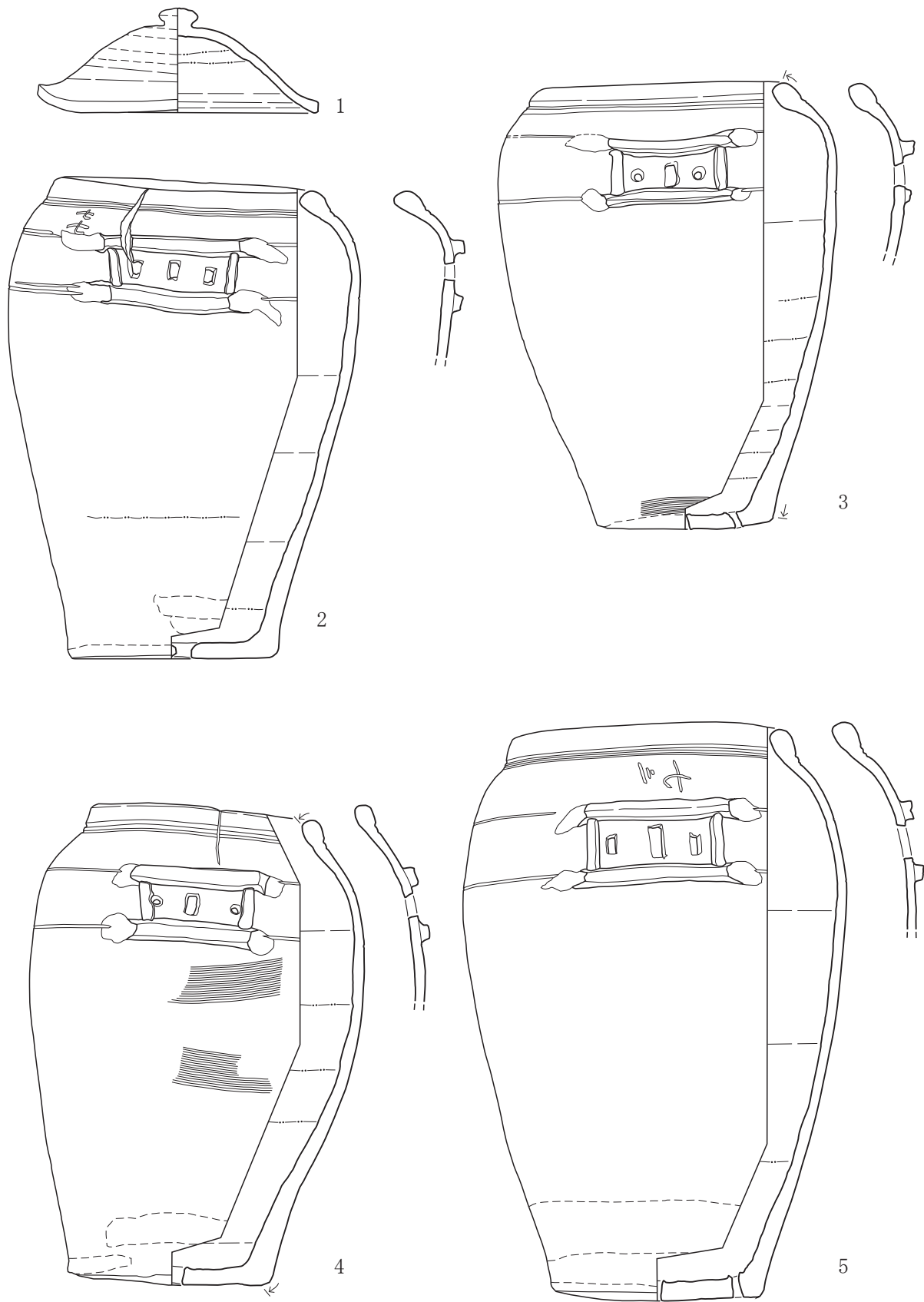
蔵骨器は墓室から4基出土したが直立していた蔵骨器3のほかは天井崩落の衝撃であろうか、すべて転倒していた。そのため身と蓋のセット関係が分からないものが多い。出土位置から1、2が棚に安置されており、3と4が棚の手前に置かれていたようである。

墓室の埋土から銭貨が4点出土した。すべて銅銭で寸法等は第34表に示す。いずれも鑄造状態は良くなく、第44図2は「寛」字の右側がひび状に表裏貫通している。3は不明瞭であるが「寛永通宝」とみられ、方孔の「寛」字側に湯がまわらなかったのか抉れ、その左側にも小孔が開く

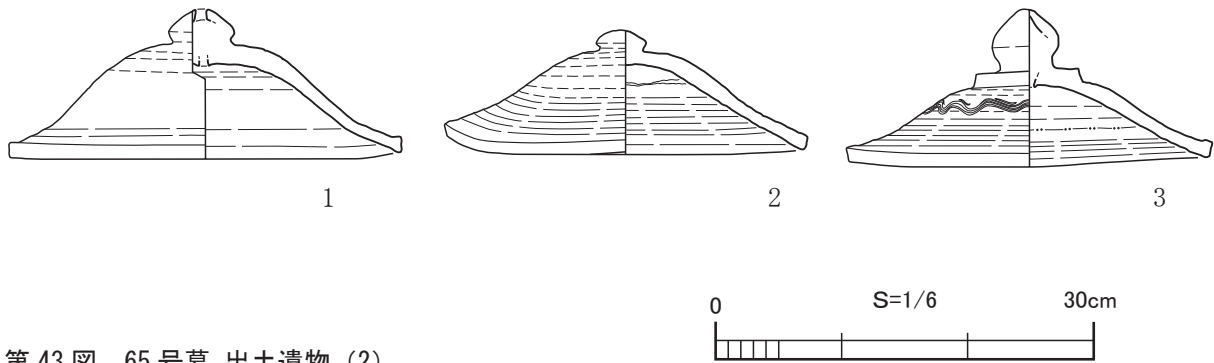
閉塞石 立面图



第 41 图 65 号墓 遺構图



第 42 图 65 号墓 出土遗物 (1)



第43図 65号墓 出土遺物(2)

第32表 65号墓 出土蔵骨器(蓋)観察表

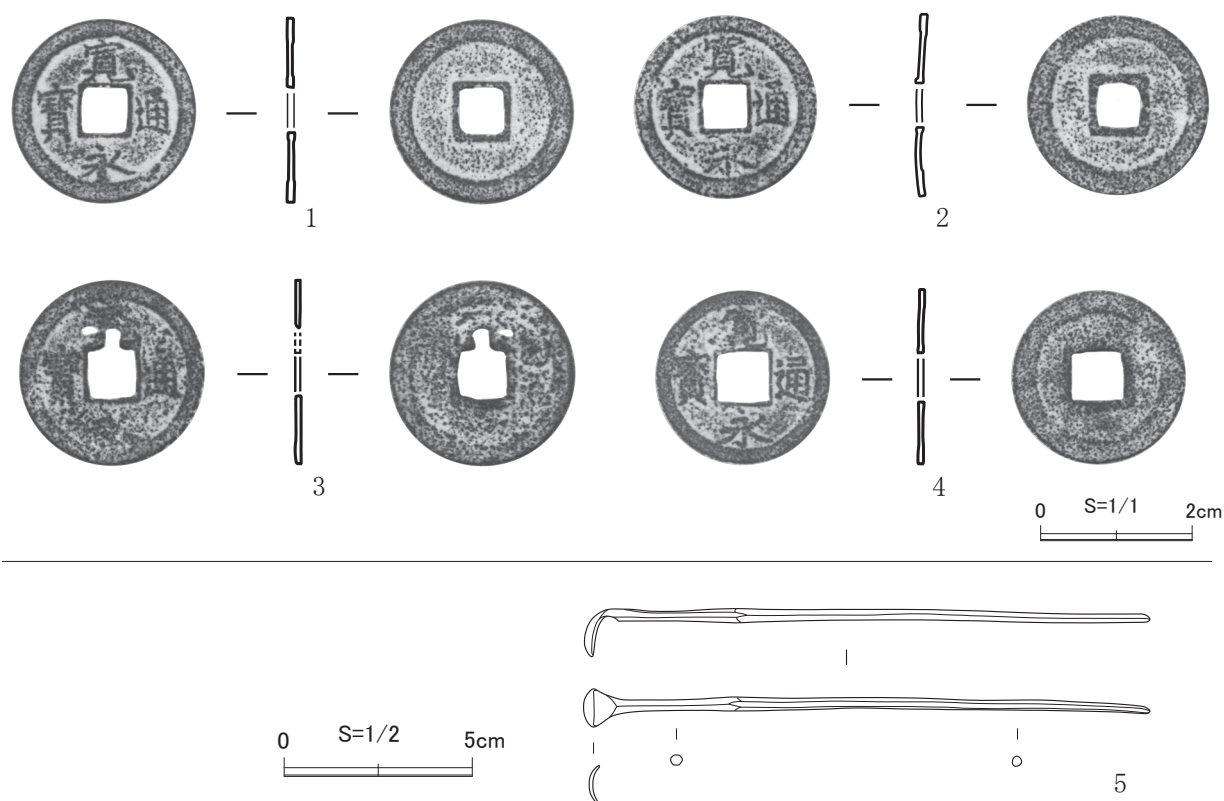
単位: cm

図番号	取上番号	出土地点	形式	つまみ台径 口径 内径 器高 体部高	つまみ形 つまみ接合部孔 つまみ台 鏝 かえり	文様	調整痕	釉薬	銘書	死亡年	洗骨年	備考
第42 図1 図版 32-1	1	墓室	ポージャー 形	— 28.9 28.7 10.8 9.0	饅頭形 無孔 無 無 無	なし	外面:ヘラ削り。 内面:ヘラ削り。 軒縁:刷毛調整。	なし	なし	—	—	内面上位に紐づくり の巻き上げ線が一周 半残る。
第43 図1 図版 31-3	5	墓室	ポージャー 形	— 31.2 30.8 11.9 9.1	宝珠形 有孔 無 無 無		外面:ヘラ削り。 内面:ヘラ削り。 軒縁:刷毛調整。		なし	—	—	孔は宝珠形つまみの 頭頂部から内面まで 貫通する。
第43 図2 図版 31-4	6	墓室	ポージャー 形	— 28.8 27.8 9.8 8.1	饅頭形 無 無 無 無		外面:ヘラ削り、下部 は刷毛調整。 内面:ヘラ削り。 軒縁:刷毛調整。		なし	—	—	内面上位に重ね焼き 目跡が残る。
第43 図3 図版 31-5	7	墓室	ポージャー 形	8.1 29.0 28.0 12.5 7.8	宝珠形 有孔 有1段 無 無	外面中位に4 本櫛による波 状文が廻る。	外面:ヘラ削り。 内面:ヘラ削り。 軒縁:刷毛調整。		なし	—	—	内面上位に重ね焼き の目跡が残る。外面 に重ね焼きによる色 調の違い。

第33表 65号墓 出土蔵骨器(身)観察表

単位: cm

図番号	取上番号	出土地点	形式	口径 胴径 底径 器高	窓 椀/ 屋門	窓数/ 形	横帯	文様	調整痕	底面 孔	釉薬	窯印	銘書	備考
第42 図2 図版 32-2	1	墓室	ポー ジャー形	25.5 36.2 20.3 49.8	平葺 形	3個 1方2 方	凹2 凹2 凹2	なし	外面:ヘラ削り調整。平 底の上に幅8mmの櫛目 調整。 内面:ヘラ削り調整。	1個 円形	なし	「七 七」	なし	口縁部にべた重ね焼き による色の違い。焼成時 に口縁部から窓椀へ亀 裂。底に焼台の痕。
第42 図3 図版 32-3	2	墓室	ポー ジャー形	24.7 34.9 16.8 46.2	平葺 形	3個 1方2 円	凹3 凹1 凹1	なし	外面:ヘラ削り調整。 内面:ヘラ削り調整。	4個 円形	泥釉を口縁 部から底部 際まで施釉。	なし	なし	口唇部に枝サングの目 跡が6つ。素地に石英砂 粒混入。底に焼台の痕。 喜名焼?
第42 図4 図版 32-4	3	墓室	ポー ジャー形	22.8 34.5 19.6 50.0	平葺 形	3個 1方2 円	凹2 凹1 凹1	なし	外面:ヘラ削り調整。 内面:ヘラ削り調整。	1個 円形	泥釉を口縁 部から底部 際まで施釉。	なし	なし	口唇部に方形の目跡が3 つ。焼成時に底部に大き な亀裂。口縁部に亀裂。 底に焼台の痕。湧田 焼?
第42 図5 図版 32-5	4	墓室	ポー ジャー形	28.0 39.6 21.0 59.4	平葺 形	3個 1方2 方	凹3 凹1 凹1	なし	外面:ヘラ削り調整。 内面:ヘラ削り調整。	6個 円形	なし	「七 三」	なし	口唇部にべた重ね焼き による色の違い。底に焼 台の痕。



第44図 65号墓 出土遺物(3)

第34表 65号墓 出土銭貨一覧

										単位: cm・g
図番号	出土地点	銭貨名	種別	背文	輪外径	輪内径	郭外幅	郭内幅	輪厚	重量
第44図1/図版33-1	墓室	寛永通宝	新寛永	無し	2.43	1.91	0.75	0.62	0.11	2.35
第44図2/図版33-2	墓室	寛永通宝	新寛永	無し	2.42	1.90	0.76	0.60	0.10	2.52
第44図3/図版33-3	墓室	寛永通宝か	新寛永か	無し	2.45	1.98	0.76	0.66	0.09	2.27
第44図4/図版33-4	墓室	寛永通宝	新寛永	無し	2.31	1.91	0.77	0.67	0.11	2.40

がやはり鑄造時の不良とみられる。

5(図版33-5)は蔵骨器4から見つかった銅製の簪で、女性用のジーファーと呼ばれるものである。長さ14.95cm、首・竿部の最大径は0.4cm。首・竿部ともに断面は六角形だが竿部は稜が不明瞭な部分が多い。頭部(カブ)と首部との角度は74°でカブ凸面に稜線はない。重量8.18g。

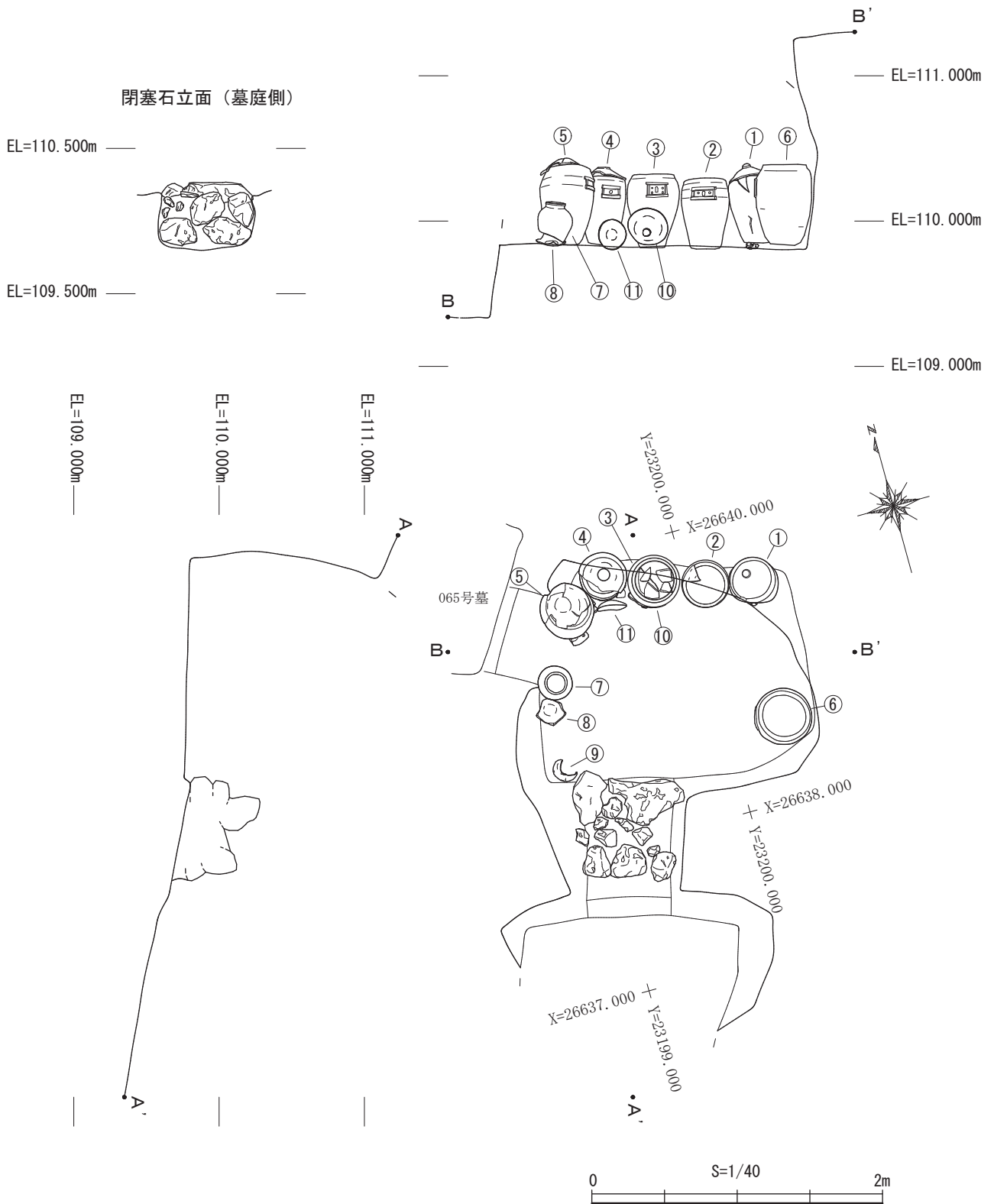
## 第15節 66号墓

### (1) 遺構(第45図)

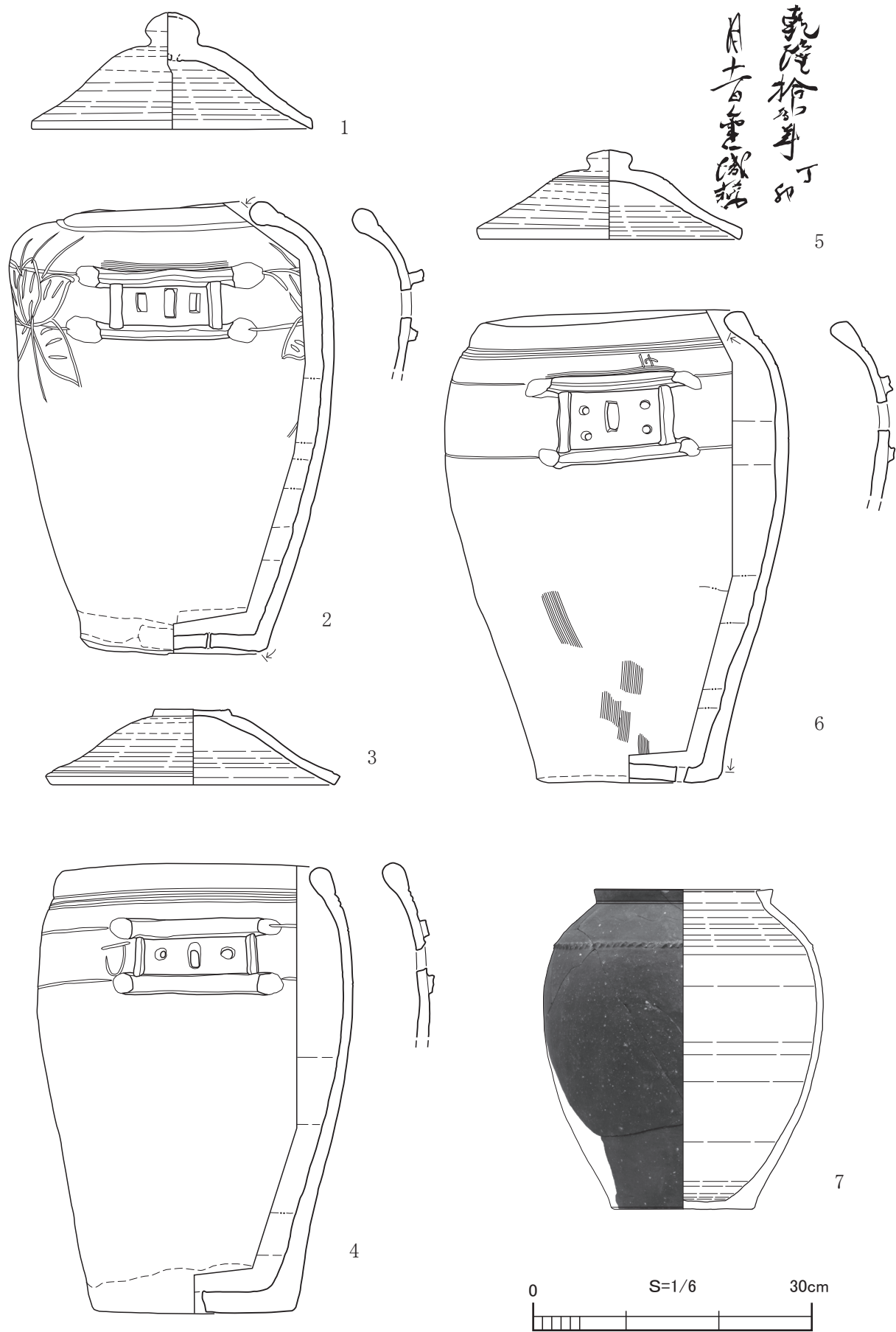
65号墓の東隣りに位置する。墓口方位は南南西(N147°W)で幅0.65m、奥行き0.79mで、閉塞石として15~30cm前後の大きさの石灰岩が2段(高さ約30cm)積まれた状態で残っている。羨道は墓室・墓庭いずれよりも数cm高い。天井は墓口から墓室まで全壊。墓室の幅は最大で1.88



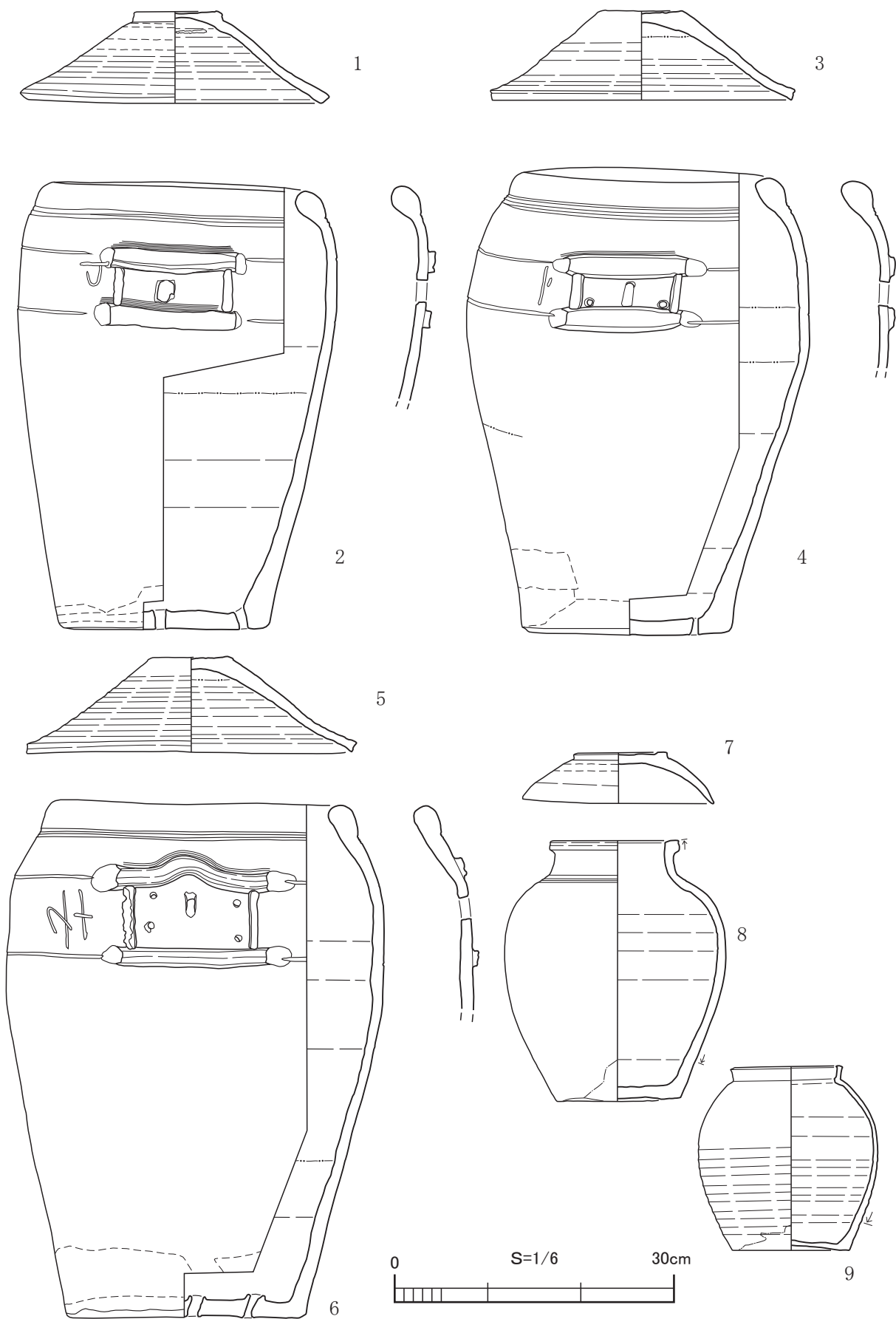
mだが最奥は1.44 mとやや狭くなる。墓室奥行きは1.5 mで棚はない。右壁の奥半分は隣の65号墓と貫通し幅60 cmのトンネル状になっているが、66号墓の厨子甕（蔵骨器5、7）が貫通箇所を塞ぐように位置しているためこれらが戦後に配置されたものでない限り、戦中の壕としての人為的な貫通とすることは困難である。墓庭は丘陵斜面崩壊のためか墓口付近以外はほとんど確認できなかった。



第45図 66号墓 遺構図



第 46 图 66 号墓 出土遺物 (1)



第47图 66号墓 出土遗物(2)

第35表 66号墓 出土蔵骨器(蓋)観察表

単位: cm

図番号	取上番号	出土地点	形式	つまみ台 口径 内径 器高 体部高	つまみ形 つまみ接合部孔 つまみ台 鏝 かえり	文様	調整痕	釉薬	銘書	死 去 年	洗 骨 年	備考
第46 図1 図版 33-6	1	墓室	ポー ジャー形	— 30.2 29.6 12.6 9.0	饅頭形 有孔 無 無 無	なし	外面:ヘラ削り。 内面:ヘラ削り。 端部:刷毛調整。	泥釉? (焼成不 良により 不明瞭)	なし	—	—	
第46 図3 図版 33-8	2	墓室	ポー ジャー形	8.0 31.6 30.4 8.1 7.4	無 — 有1段 無 無	なし	外面:ヘラ削り。 内面:ヘラ削り。 端部:刷毛調整。	なし	なし	—	—	
第46 図5 図版 34-1	10	墓室	ポー ジャー形	— 28.5 27.5 9.6 7.5	扁平形 無 無 無 無	つまみの 下方に2 本の凹線 が廻る。	外面:ヘラ削り。 内面:ヘラ削り。下部 はその上から刷毛調 整。 端部:刷毛調整。	なし	乾隆拾貳年丁 卯/[八]月十 一日口城筑	—	—	内面上部に重ね焼 きの小破片が付着。 内面に紐づくりの線 が残る。
第47 図1 図版 34-3	4	墓室	ポー ジャー形	9.5 33.1 31.4 9.9 8.8	無 — 有1段 無 無	なし	外面:ヘラ削り。 内面:ヘラ削り。 端部:刷毛調整。	なし	なし	—	—	内面上位に重ね焼 きの目跡が残る。
第47 図3 図版 34-5	5	墓室	ポー ジャー形	8.4 32.6 32.0 9.7 —	無 — 無 無 無	なし	外面:ヘラ削り。頂部 は無調整。 内面:ヘラ削り。 端部:ヘラ篋削り。	外面に泥 釉を施 釉。	なし	—	—	内面上部に紐づくり の線が残る。内面 下位に重ね焼きに よる色の違い。
第47 図5 図版 35-1	6	墓室	ポー ジャー形	8.2 35.4 34.5 10.4 —	無 — 無 無 無	なし	外面:ヘラ削り。頂部 は無調整。 内面:ヘラ削り。 端部:ヘラ削り。	外面に自 然釉。	なし	—	—	内面上位に重ね焼 きの目跡が残る。
第47 図7 図版 35-4	11	墓室	転用	10.0 20.5 — 5.5 4.9	— — — — —	なし	外面:ヘラ削り。高台 は削り出し。 内面:底は巻き上げ の跡が残る。	なし	なし	—	—	転用壺(第47図9) の蓋の可能性あり。

蔵骨器は転用を除きすべてポージャー形で18世紀前半から19世紀初頭にかけてのものである。墓口に閉塞石が一部残されていたこと、マンガン釉甕形がないことなどから19世紀初頭を大きく出ない時期に埋没したものと考えられる。

(2) 遺物 (第46・47図、第35・36表)

蔵骨器はポージャー形6基・転用2基が出土、うちポージャー形5基は墓室奥に横並びに配置されていた。

(3) 銘書

1点のみ確認された。乾隆12年(1747)の年紀があるが被葬者名は判読できていない。

第36表 66号墓 出土蔵骨器(身)観察表

単位: cm

図番号	取上番号	出土地点	形式	口径 胴径 底径 器高	窓枠/ 屋門	窓数/ 形	横帯	文様	調整痕	底面 孔	釉薬	窯 印	銘 書	備考
第46 図2 図版 33-7	1	墓室	ポー ジャー形	21.5 34.1 18.1 48.8	唐 破 風 形	3個 1方2 方	凹2 凹1 凹1	窓枠の左右 に線彫りによ る蓮華文。	外面:ヘラ削り調整。唐 破風形底の上に幅8mm の櫛目調整。 内面:ヘラ削り調整。	6個 円形	泥釉を口縁部 から胴部中位 まで施釉。そ の下の底際 まで釉垂れ。	なし	なし	口唇部に方形の目 跡3つ。焼成時に 口縁部から肩部に かけて大きな亀 裂。底に焼台の 跡。湧田焼?
第46 図4 図版 33-9	2	墓室	ポー ジャー形	27.5 34.0 20.9 48.4	平 葺 形	3個 1方2 円	凹3 凹1 凹1	なし	外面:ヘラ削り調整。 内面:ヘラ削り調整。	4個 円形	なし	「 J 」	なし	口唇部にべた重ね 焼きによる色の違 い。底に焼台の 跡。
第46 図6 図版 34-2	3	墓室	ポー ジャー形	28.0 37.0 18.4 50.9	平 葺 形	5個 1方4 円	凹3 凹1 凹1	なし	外面:ヘラ削り調整。胴 部下位から底部際に縦 の櫛目調整。 内面:ヘラ削り調整。	5個 円形	泥釉を口縁部 から底部際ま で施釉。	「 七 」	なし	口唇部に枝サンゴ 目跡が6。素地に 石英砂粒混入。底 に焼台の跡。喜名 焼?
第46 図7	8	墓室	転用	19.2 30.2 15.0 34.4	—	—	—	肩部に9本櫛 による波状 文、その下 に縷糸状の 突帯。	外面:ヘラ削り後ナデ調 整。 内面:ヘラ削り調整。	—	褐釉を外面に 施釉。内面 には外面施釉時 に流れ込んだ 釉が掛かる。	—	—	素地に1mm前後の 白色細砂粒混入。 一部破片が72号墓 周辺で出土。
第47 図2 図版 34-4	4	墓室	ポー ジャー形	27.7 34.2 21.3 48.1	平 葺 形	1個 1方	凹3 凹1 凹1	なし	外面:ヘラ削り調整。上 下窓枠の上に幅8mmの 櫛目調整。口縁部から 肩部は刷毛調整。 内面:ヘラ削り調整。	5個 円形	なし	「 J 」	なし	口唇部にべた重ね 焼きの跡。底に焼 台の跡。
第47 図4 図版 34-6	5	墓室	ポー ジャー形	26.0 36.8 21.6 50.1	平 葺 形	3個 1方2 円	凹4 凹1 凹1	なし	外面:ヘラ削り調整。平 底の上に幅6mmの櫛目 調整。口縁部は刷毛調 整。 内面:ヘラ削り調整。	12個 円形	なし	「 二 」?	なし	口唇部にべた重ね 焼きの跡。底に焼 台の跡。
第47 図6 図版 35-2	6	墓室	ポー ジャー形	29.0 40.4 24.1 55.6	唐 破 風 形	5個 1方4 円	凹3 凹1 凹1	なし	外面:ヘラ削り調整。唐 破風形底の上に幅8mm の櫛目調整。口縁部か ら肩部は刷毛調整。 内面:ヘラ削り調整。	5個 円形	なし	「 十 七 」	なし	口縁部にべた重ね 焼きの跡。底に焼 台の跡。
第47 図8 図版 35-5	7	墓室	転用	13.8 23.6 13.3 28.0	—	—	—	なし	外面:ヘラ削り調整。口 唇部は刷毛調整。 内面:ヘラ削り調整。	—	泥釉を口縁外 側から底部近 くまで施釉。底 部近くで釉垂 れがみられ る。	なし	なし	壺。素地に石英砂 粒混入。焼成時に 胴部に縦の亀裂が 入る。底に焼台の 跡。
第47 図9 図版 35-3	9	墓室	転用	12.0 19.3 12.5 19.8	—	—	—	なし	外面:幅約5mmのヘラ 削り調整。 内面:ヘラ削り調整。	—	薄い褐釉を内 外面に施釉。 外面底部近く と外底は露 胎。	なし	なし	器壁は約4mmで薄 い。素地は白色細 砂粒混入で粗い。 14~15世紀の褐釉 陶器小壺。中国 産。

(4) 人骨

ポージャー形蔵骨器のうち1~5の5点の身の内部から人骨の残存が確認された。いずれも破片が大半で、部分的に同定された頭蓋骨や遊離歯などから少なくとも成人各1体が納められていたことが窺われる。

## 第16節 67号墓

### (1) 遺構 (第48図)

66号墓の東に隣接する。墓口方位は南南西 (N158° W) で、石灰岩を積んで墓口を形成する。おおよそ高さ80 cm、幅50 cmの板状の切石を羨道両脇に立て、やはり板状の切石を掛け渡し天井とする。墓口の規模は幅0.6×高さ0.93 m。墓室は幅1.8 m、奥行き1.2～1.5 m、天井は半分以上崩壊しているが最奥部分で高さ2 m。奥行き0.5 m、高さ0.5 mの奥棚が一段ある。墓庭は残存部分で幅2.7 m、奥行き1.3 m。墓口手前から溝が掘られ、途中3段の階段を削り出し折れ曲がりながら続いているが沖縄戦時の塹壕であろう。墓庭の墓口左手側に段差があるが、古い墓室(棚)の痕跡の可能性があり68号墓としている。68号墓が崩壊等したのち奥に新たに墓室(67号墓)を掘削したと考えられることはできるのだが、厳密には本当に墓が存在していたと断言するのは難しい。

出土した蔵骨器4基の年代は18世紀後半から19世紀半ば頃に求められるものであるが、うち1基がシルヒラシに20 cmほど堆積した土の上に置かれていたことと墓庭に塹壕が作られていたことから、蔵骨器は戦後に置かれたと思われる。もともとこの墓に納められていたものが改めて置かれたものであれば墓の使用年代の一端を示すものである。

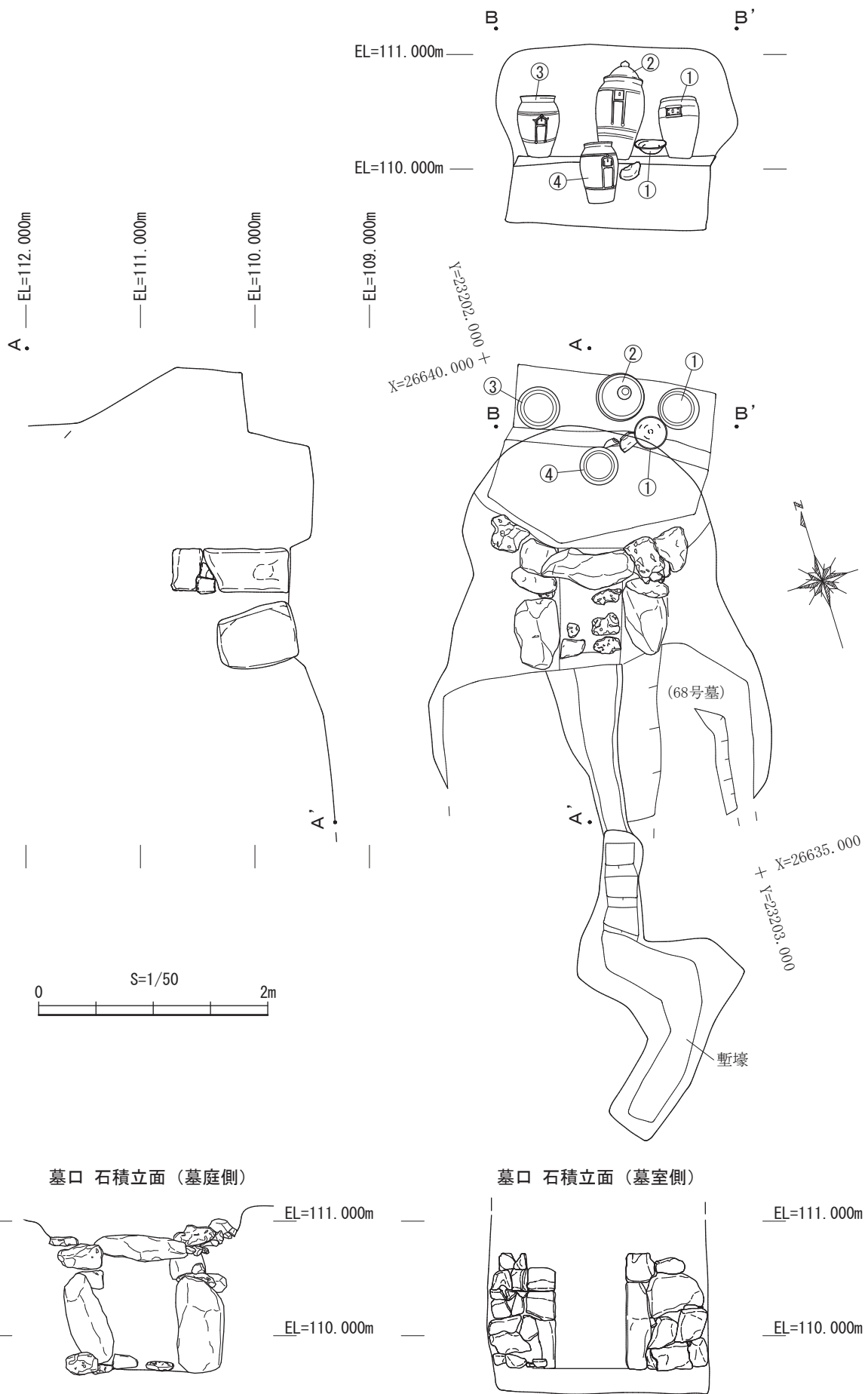
### (2) 遺物 (第49・50図、第37・38表)

墓室から蔵骨器4基が出土、うち3基(1～3)が棚の上に置かれていた。残る1基は棚の前に置かれていたが床面から20 cm上で出土しており、堆積した土の上に置かれていたことがわかる。墓庭の塹壕と合わせてこれらの蔵骨器は戦後に置かれたと思われるが、もともとこの墓に納められていたものかは不明。

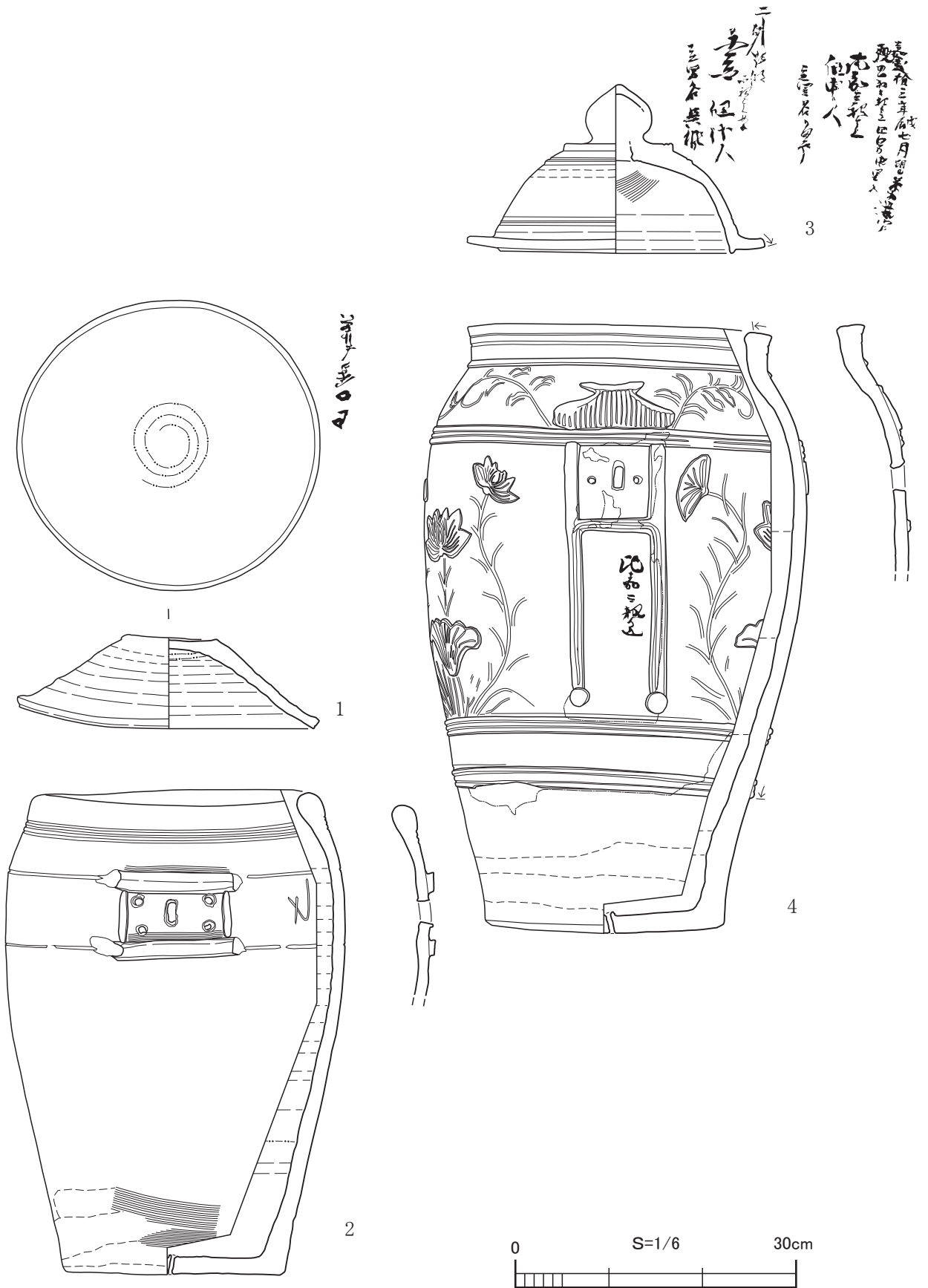
第37表 67号墓 出土蔵骨器(蓋)観察表

単位: cm

図番号	取上番号	出土地点	形式	つまみ台径 口径 内径 器高 体部高	つまみ形 つまみ接合部孔 つまみ台 鏝 かえり	文様	調整痕	釉薬	銘書	死去年	洗骨年	備考
第49 図1 図版 36-1	1	墓室	ボー ジャー 形	9.6 32.3 31.0 10.1 —	無 — 無 無 無	なし	外面:ヘラ削り。頭 頂部は無調整。 内面:ヘラ削り。 端部:ヘラ削りで凹 線が廻る。	なし	前……	—	—	内面上位に 重ね焼きに よる色調の 違いあり。
第49 図3 図版 36-3	2	墓室	マンガ ン釉甕 形	11.6 31.8 24.2 18.0 11.7	宝珠形 有孔 有2段 有(3.7cm) 有(5mm)	なし	外面:ヘラ削り。 内面:ヘラ削り。そ の上から下部と鏝 は刷毛調整。	外面のつま みから 鏝側面ま でマンガ ン釉	嘉慶拾三年戊辰七月朔 日□□洗骨/親富祖筑 親雲上四男□□/□比 嘉筑親雲上/但申人/ 童名かま戸/二□□□ /同人/筑親雲上女子 /妻/但戌人/童名呉 勢	—	嘉慶13 (1808)	
第50 図1 図版 37-1		墓室	マンガ ン釉甕 形	11.4 30.9 23.8 15.8 11.7	饅頭形 有孔 有1段 有(3.5cm) 有(5mm)	なし	外面:ヘラ削り。 内面:ヘラ削り。鏝 は刷毛調整。	外面のつま みから 鏝側面ま でマンガ ン釉	咸豊[八]年/戊午八月 廿一日/先骨仕候/浦 添間切/前田村仲里/ 嫡子/か口石川	—	咸豊8 (1858)	
第50 図3 図版 37-3		墓室	マンガ ン釉甕 形	10.6 29.3 22.3 16.6 11.6	宝珠形 有孔 有1段 有(3.6cm) 有(4mm)	なし	外面:ヘラ削り。 内面:ヘラ削り。鏝 は刷毛調整。	外面のつま みから 鏝側面ま でマンガ ン釉	□□/但□人	—	—	



第 48 图 67 号墓 遺構図



第 49 图 67 号墓 出土遺物 (1)

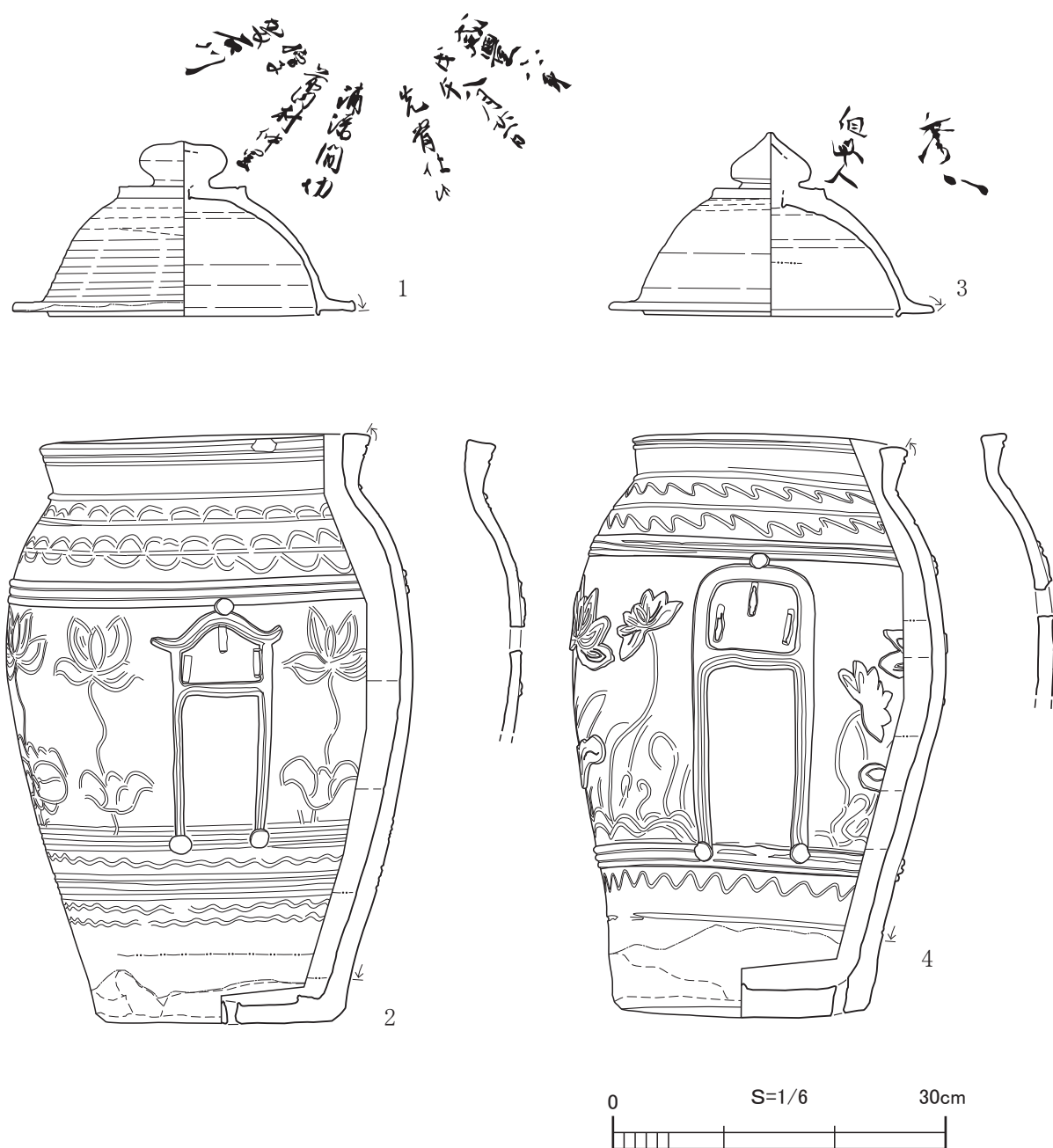


(3) 銘書

出土した蔵骨器4基すべてに銘書が記されているが2基は判読が困難である。残りの2基には嘉慶13年(1808)と咸豊8年(1858)の年紀が記される。浦添間切前田村の人が葬られている。

(4) 人骨

4点の蔵骨器のいずれからも人骨が出土したものの、内部はニービが流れ込んで充満していたためか、残存状態は不良で、ほぼ細片である。



第50図 67号墓 出土遺物(2)

第38表 67号墓 出土蔵骨器(身)観察表

単位: cm

図番号	取上番号	出土地点	形式	口径 胴径 底径 器高	窓枠/ 屋門	窓数/ 形	横帯	文様	調整痕	底面 孔	釉薬/施釉 範囲	窯印	銘書	備考
第49 図2 図版 36-2	1	墓室	ポー ジャー形	30.2 36.3 22.7 51.8	平葺 形	5個 1方4 円	凹3 凹1 凹1	なし	外面:ヘラ削り調 整。口縁部から肩 部は刷毛調整。 底部際にヘラ削り や櫛目調整痕。 内面:ヘラ削り調 整。	5個 円形	なし	「七」 ?	なし	口唇部にべた 重ね焼きの 痕。底に焼台 の跡。
第49 図4 図版 36-4	2	墓室	マンガン 釉甕形	32.5 40.8 23.9 65.0	瓦屋 形	3個 1方2 円	凹2 凸1 凸3 凸3 凸3	肩部に又状工具に よる沈線唐草文。胴 部屋門の左右に貼 付蓮華文、茎や葉柄 は又状工具で沈線 を描く。	外面:ヘラ削り調 整。底部際にヘラ 削りの跡が残る。 内面:ヘラ削り調 整。	9個 半円 形	マンガン釉を 口縁外端から 底部近くまで 施釉。屋 門内は露 胎。	なし	□□/ 比嘉筑 親雲上 /……	口唇部にべた 重ね焼きの 痕。底は焼台 の石灰が一面 に広がり、底 面孔を塞ぐ。
第50 図2 図版 37-2	3	墓室	マンガン 釉甕形	29.8 36.6 20.2 53.1	唐破 風形	3個 方形	凹2 凸1 凸3 凸3 凸3	肩部に又状工具に よる波状文、連続葉 文。胴部屋門の左右 に又状工具による沈 線蓮華文。胴下部に 又状工具による沈線 波状文。	外面:ヘラ削り調 整。底部際にヘラ 削りの跡が残る。 内面:ヘラ削り調 整。	12個 半円 形	マンガン釉を 口縁外端から 底部際まで 施釉。	なし	なし	底に焼台の 痕。
第50 図4 図版 37-4	4	墓室	マンガン 釉甕形	24.8 33.7 21.2 52.7	位牌 形	3個 方形	凹1 凸1 凸3 凸3 凹1	肩部に1本の沈線、 その上下に沈線波 状文を廻らす。胴部 屋門の左右に貼付 蓮華文、茎や葉柄は 又状工具による沈 線。胴下部に沈線 波状文を廻らす。	外面:ヘラ削り調 整。底部際にヘラ 削りの跡が残る。 内面:ヘラ削り調 整。	6個 円形	マンガン釉を 口縁外端から 底部近くまで 施釉。底 部際は露 胎。	なし	なし	底に焼台の 痕。

## 第17節 69号墓

### (1) 遺構 (第51図)

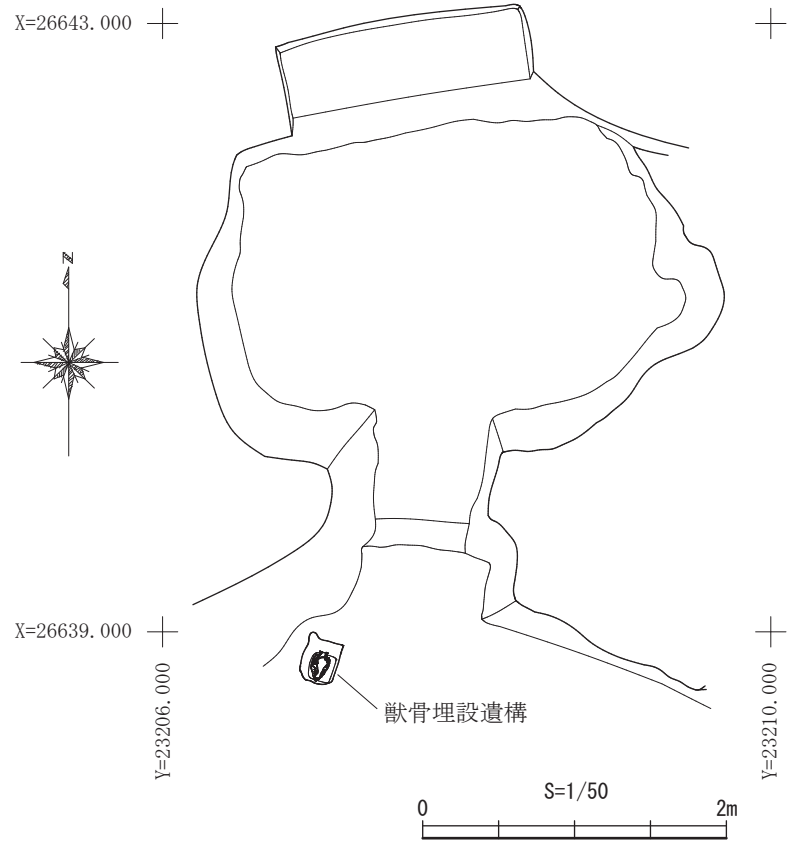
65～67号墓より一段高い場所に並んで造営された墓(69～72号墓)の西端に位置する。69～71号墓は戦時利用のため墓室側壁を貫通させている。その影響もあってか天井は残存しているが剥落が起きていることから発掘は実施しなかった。その後の厚生労働省による遺骨収集作業で重機により墓室のオープンカットを行いデータを得ている。

墓口の幅0.6～0.7m。墓室は棚(幅1.6×奥行0.5m)が奥に一段のみ確認できたが、上記のように戦時中に改変されており本来の形状は不明であるが、現況では奥行き約2.6m、幅は約2.5m。墓庭の規模は不明、墓口近く左手に29×24cmのほぼ方形のピットがあり獣骨が埋められていた。

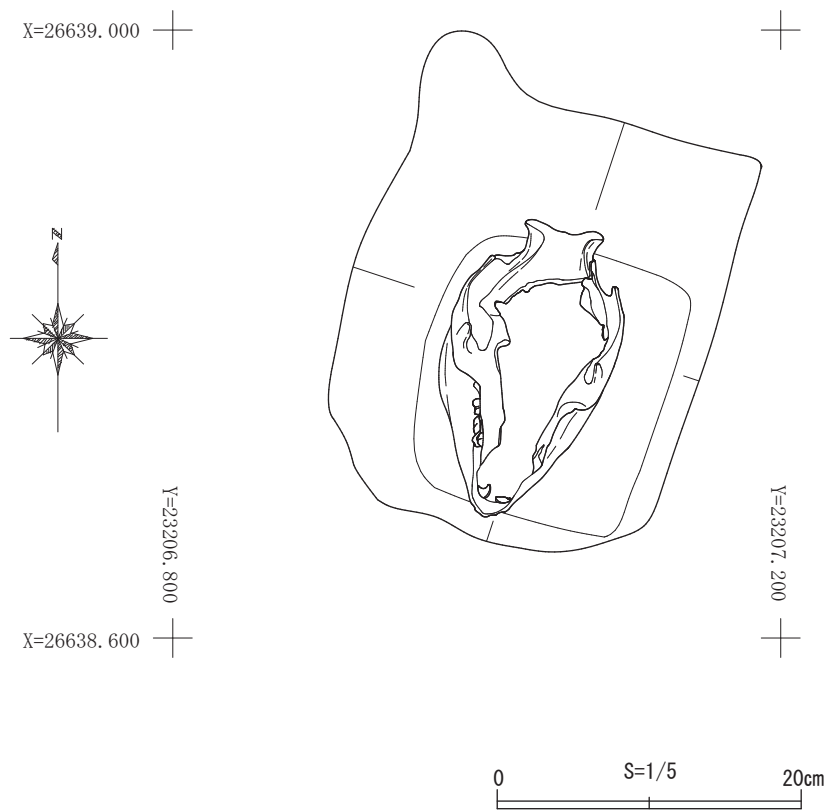
### (2) 獣骨埋設遺構 (第52図)

69号墓の墓庭からは墓室壁面側右隅の地点より動物の頭蓋骨がピット内に埋められた状態で検出された。ピットは北東—南西方向に長軸をもつ長方形で、長辺29cm×短辺24cmの大きさを呈し、長軸は墓室入り口の方向とほぼ一致する。ピット底面は墓室と反対側に向けて下る傾斜を呈する。

ピット内部には哺乳類の頭蓋骨が検出され、頭蓋上面が一部欠損するものの、概ね完形の状態



第 51 図 69 号墓 遺構図



第 52 図 69 号墓 獣骨埋設遺構図

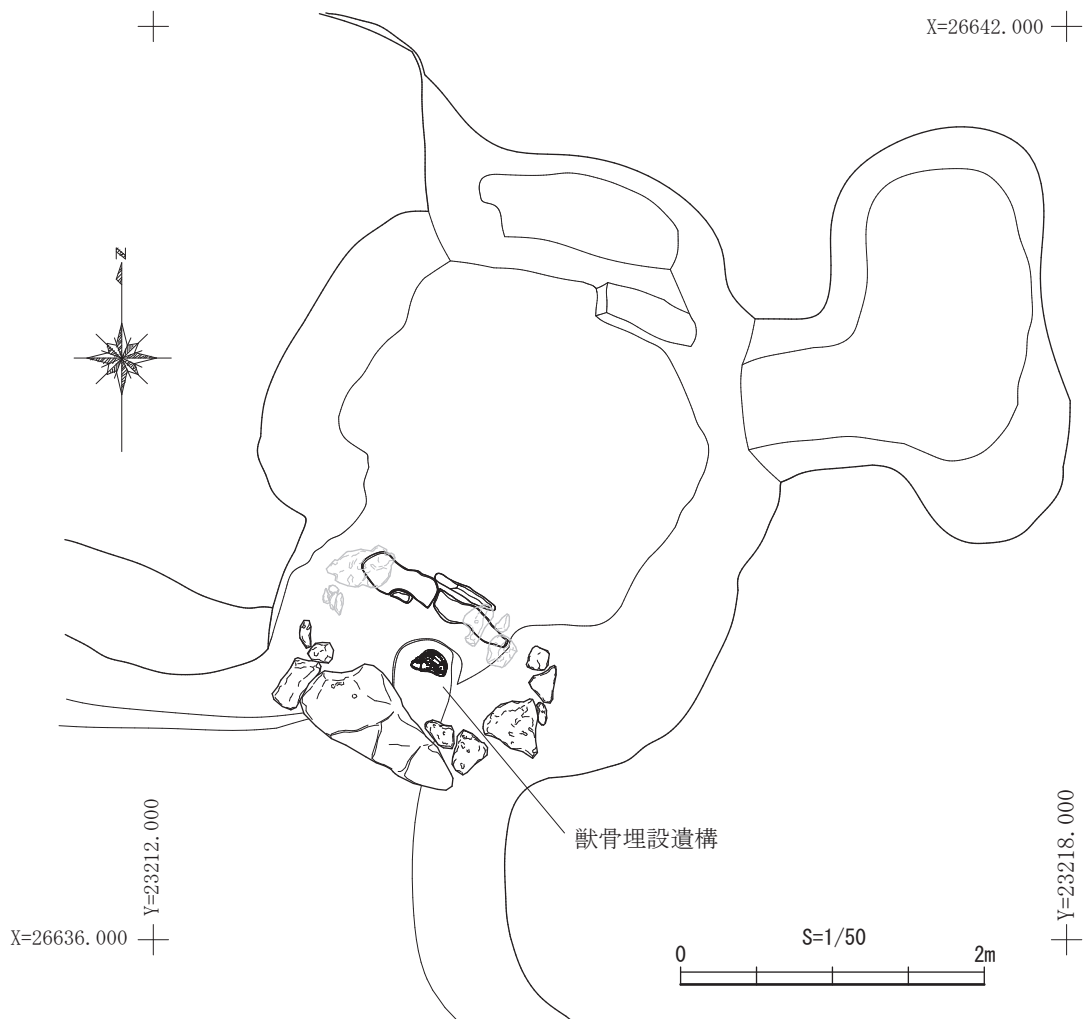
で出土した。頭蓋骨あるいは下顎骨の形状・長さなどから動物の分類群はブタであると判断される。上顎及び下顎は咬み合わされた状態で、頭蓋上面を上、先端を墓室とは逆の方向に向けられている。また、ピット底面が斜面であるのに対し、頭蓋骨は概ね水平に近い状態であった。これらの要素から、本ピットはブタの頭蓋骨を意図的に埋めた遺構であると考えられる。

## 第 18 節 71 号墓

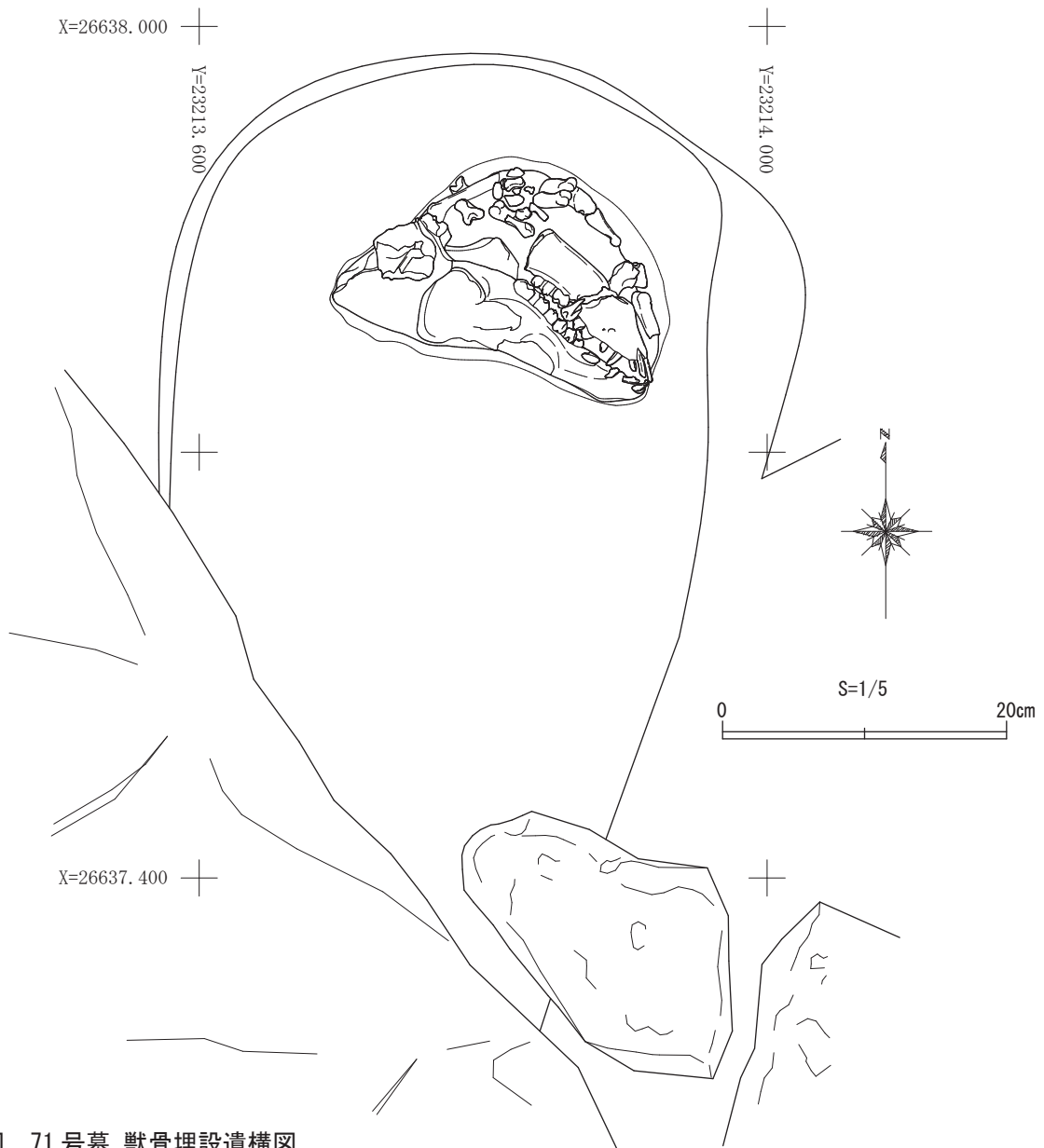
### (1) 遺構 (第 53 図)

天井はすべて崩壊しており、墓室右壁は戦中に隣の 70 号墓と連結のため破壊されている。奥壁が大規模に崩壊する恐れがあったため発掘は実施せず、厚生労働省の遺骨収集作業により墓室のオープンカットを行いデータを得た。

墓口を横断するように平たい固結した細粒砂岩（ニービの骨）を利用した石列が二列ある。墓室側の石列には立てかけた石があるためこれが蓋石の一部であれば墓庭側の石列はサンミデーのものとなるが、蓋石を開ければ羨道もなくすぐシルヒラシになってしまう。戦時利用があったた



第 53 図 71 号墓 遺構図



第 54 図 71 号墓 獣骨埋設遺構図

めあるいはシルヒラシを墓口側に拡張するという改変があったのだろうか。石列の長さは約 1.1m でこれが墓口の幅に近いのであろうか。現状で墓室は幅 2.2m、奥に棚が一段(幅 1.3 × 奥行き 0.5m) あるがその手前にニービの骨があり墓造営時に撤去できなかったため棚状になっている。墓室左奥に戦中に拡張されたであろう空間がある。

先述した二列の石列の間に地山を掘りくぼめ獣骨が埋納されていた。墓室側石列が蓋石を立てた部分であれば埋納は墓口前のサンミデーに、墓庭側の石列が墓口であれば羨道への埋納となる。

(2) 獣骨埋設遺構 (第 54 図)

71 号墓のサンミデーあるいは羨道と考えられる地点から出土した獣骨は、ブタの頭蓋骨およ

び中手骨・中足骨・基節骨・中節骨・末節骨である。前節の69号墓で述べた事例と同様、墓域内に掘ったピットにブタの頭蓋骨を意図的に埋めた遺構であると考えられる。

ピットは底面及び墓室側の壁面の一部の立ち上がりが検出されたものの、墓庭側の立ち上がりは明瞭には認められなかった。残存状況からは、平面形は概ね円形で、径40cm程度の大きさを持つものと推測される。検出された頭蓋骨はピット底面の直上に横倒しの状態で残存しており、左側を天に、頭蓋上面を墓庭側に、頭蓋先端を墓庭左側に向けた状態である。ほぼ完形の状態で検出され、上下の歯は咬み合わせられており、攪乱の痕跡なども認められないことから当時の状態を維持しているものとみられる。

さらに特記すべきは、左右の下顎骨の間から中手骨・中足骨および指骨が検出された点である。一部は関節が交連した状態で、狭い範囲から出土していることから、口腔内に手足を詰め込んだ状態であったものと考えられ、極めて稀な事例である。

## 第19節 72号墓

### (1) 遺構 (第55図)

遺構の大部分が崩壊し、墓口の位置等も含め詳細は不明である。厨子甕は地山面の上の堆積土上で立った状態で出土しており、厨子甕を埋めた最終的な崩壊の前にも程度の軽い崩壊があった可能性をうかがわせる(第55図の横断見通し図では地山ラインの断面を図示しているため厨子甕は宙に浮いている)。南東隅に長径34cm・短径29cm、深さ6.5cmのピットがあるが目的・用途は不明。

第39表 72号墓 出土蔵骨器(蓋)観察表

単位: cm

図番号	取上番号	出土地点	形式	つまみ台径 口径 内径 器高 体部高	つまみ形 つまみ接合部孔 つまみ台 鏝 かえり	文様	調整痕	釉薬	銘書	死去年	洗骨年	備考
第56 図1 図版 38-1	1	墓室	ポー ジャー形	8.5 31.0 30.2 11.3 —	無 — 無 無 無	なし	外面:ヘラ削り。頭頂部は無調整。 内面:ヘラ削り。 端面:刷毛調整。	なし	[嘉慶十]□□ノ三月廿八日[嫡孫]石川筑親雲上より又々洗骨仕申候事ノ那覇石川筑親雲上妻	—	嘉慶10年代?	重ね焼きによる変色あり。

第40表 72号墓 出土蔵骨器(身)観察表

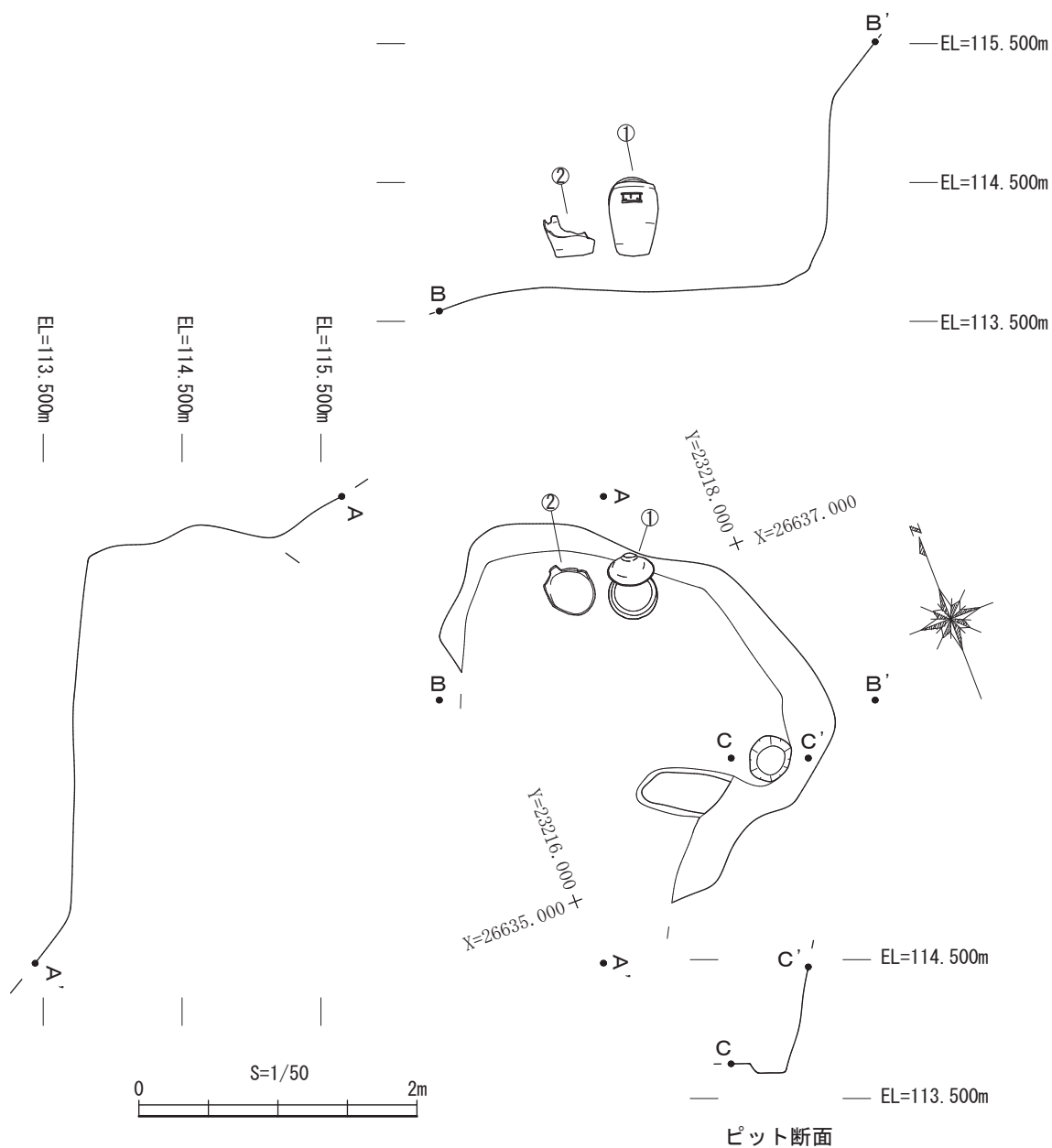
単位: cm  
( )は残存値

図番号	取上番号	出土地点	形式	口径 胴径 底径 器高	窓枠/ 屋門	窓数/ 形	横帯	文様	調整痕	底面孔	釉薬	窯印	銘書	備考
第56 図2 図版 38-2	1	墓室	ポー ジャー形	26.0 34.4 20.5 51.6	平葺形	3個 1方2 円	凹3 凹1 凹1	なし	外面:ヘラ削り調整。平底の上に幅5mmの楯目調整。口縁部から肩部は刷毛調整。底部際にヘラ削りの痕。 内面:ヘラ削り調整。	5個 半円 形	なし	「 — 」 ?	なし	口唇部にべた重ね焼きの痕。底に焼台の痕。
第56 図3	2	墓室	転用	— — 23.3 (31.3)	—	—	—	—	外面:ヘラ削り調整。 内面:ヘラ削り調整。	—	褐釉を厚く施釉。 底部近くは露胎。	なし	なし	タイ産褐釉壺。

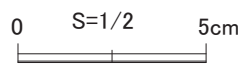
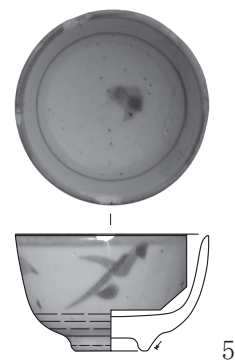
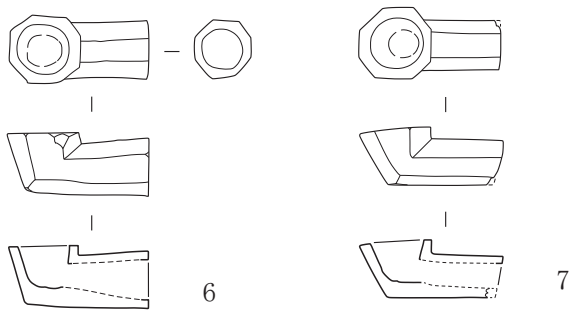
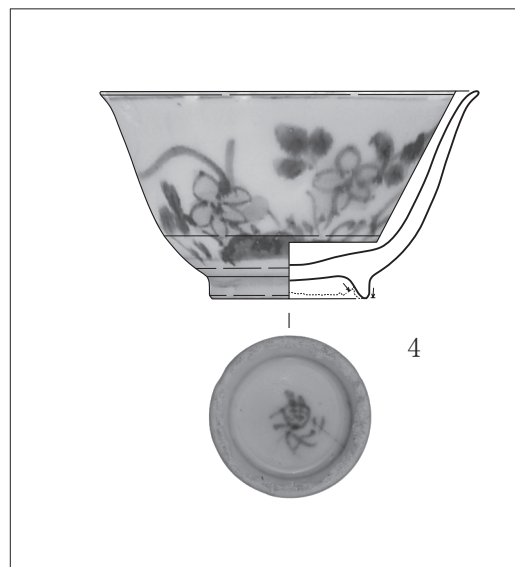
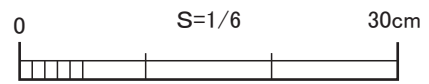
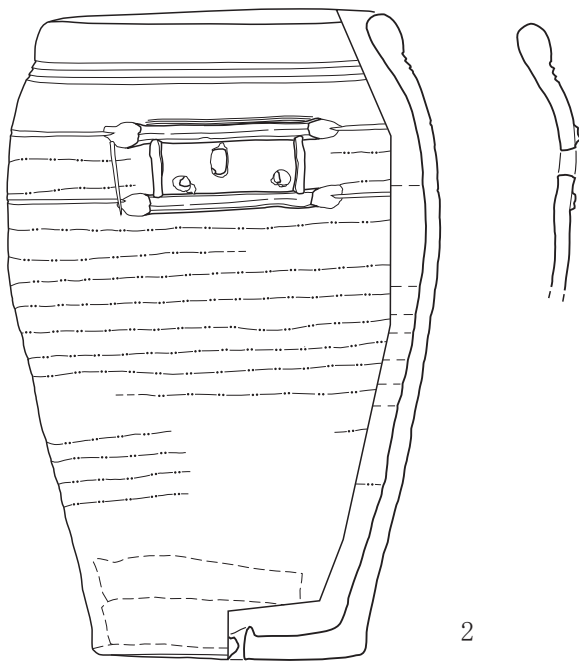
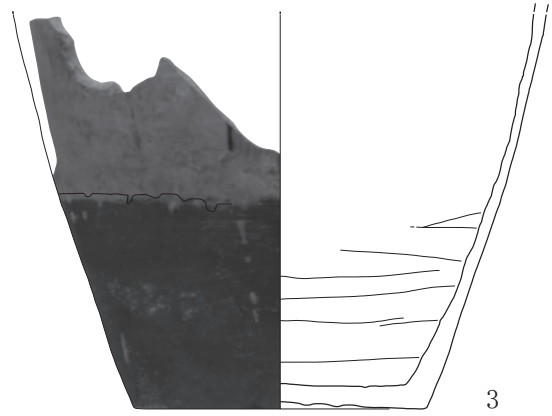
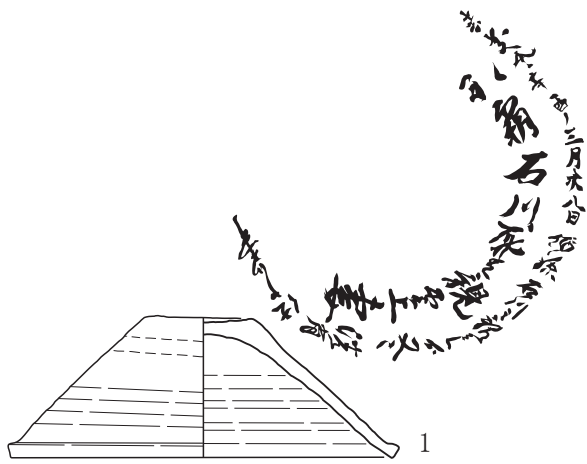
第41表 72号墓 出土陶磁器観察表

単位: cm

図番号	出土地点	器形	残存部位	口径	器高	底径	施釉	釉色・色調	貫入	文様等	備考
第56 図4	墓室か墓 庭か不明 瞭	碗	完形	10.0	5.6	4.1	全面に透明釉が掛か るが腰のごく一部にむ らがあり露体する。	全体: 白色 文様: くすんだ色 調の呉須	なし	外面胴部に五弁の 草花、高台内には 文字?	置付けに重ね焼き の際の砂が付着す る「砂高台」。
第56 図5	墓室か墓 庭か不明 瞭	盃	完形	5.1	3.1	1.9	置付けと高台内は露 体。	全体: 青みがかつ た白色 文様: くすんだ色 調の呉須	なし	外面・見込みに葉 のような文様。	



第55図 72号墓 遺構図



第 56 图 72 号墓 出土遗物



遺構は大きく破壊しており本来あったであろう蔵骨器の全容は不明であるが、出土したボージャー形厨子甕の編年と銘書から 19 世紀前後には使用していた可能性がある。

#### (2) 遺物 (第 56 図、第 39～41 表)

蔵骨器 2 基が墓室より出土、うち 1 基は転用品である。その他に図化できるほどの復元は困難であったが少なくとも壺が 4 個体分出土しているが、転用蔵骨器なのか戦中の持ち込みかは不明である。なお第 7 表の壺の破片数を 4 としているがこれは個体数を示しており破片数はもっと多い。

墓室よりキセルの雁首が 2 点出土している。いずれも素焼きの陶製で断面は八角形。第 56 図 6 (図版 38-3) は長さ 3.7 cm、火皿幅 1.9 cm (内径 1.3 cm)、羅字接続部幅 1.5 cm (内径 1.03 cm)。7 (図版 38-4) は長さ 3.8 cm、火皿幅 1.9 cm (内径 1.3 cm)、羅字接続部幅 1.3 cm (内径 0.7 cm)。また染付が 2 点出土している (第 41 表)。

#### (3) 銘書

年号は嘉慶が確認できるが具体的な年は不明である。前田に多くみられる苗字「石川」が記され、「那覇石川」もあるがこちらは屋号であろうか。

#### (4) 人骨

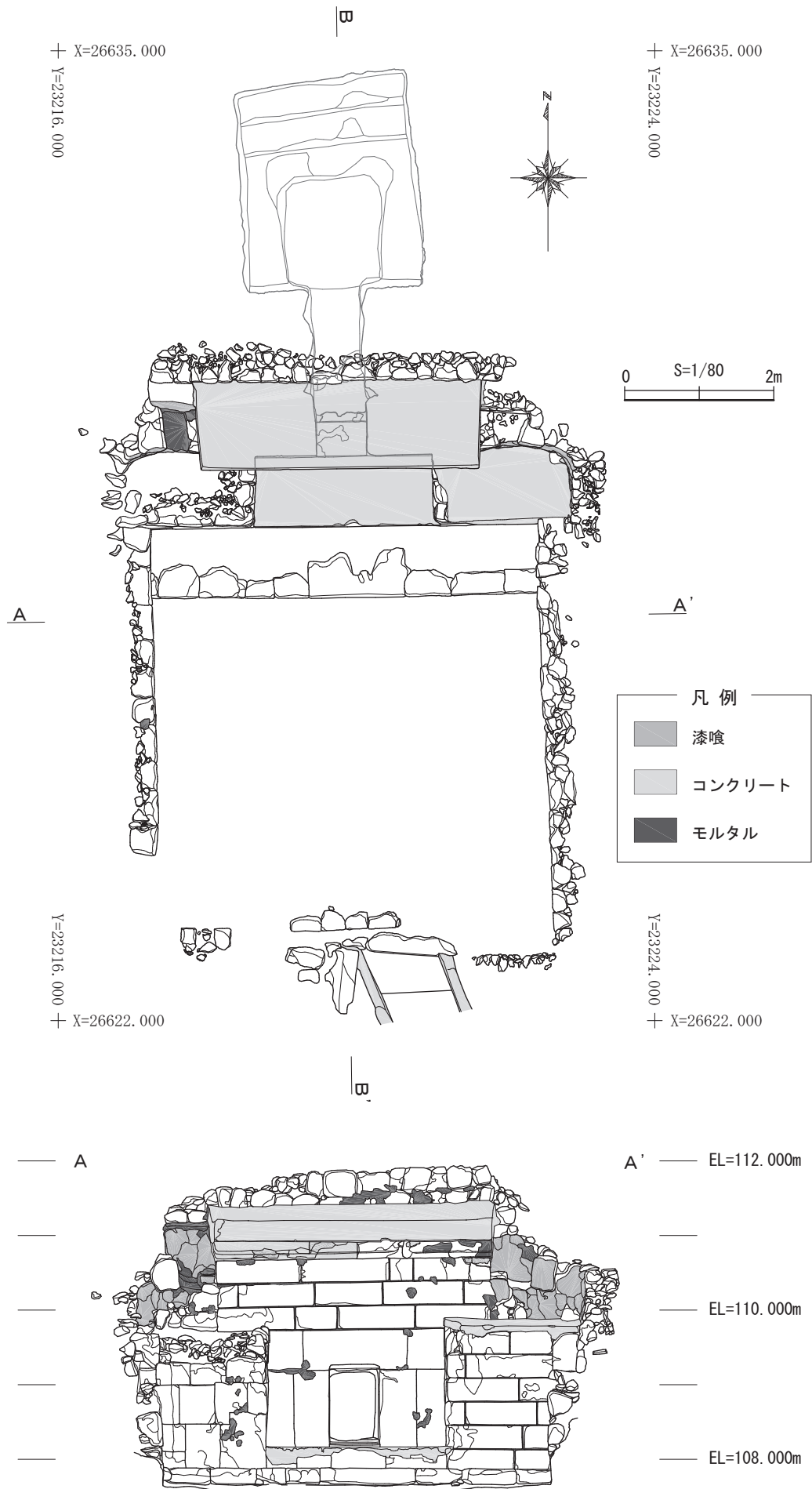
蔵骨器内や墓室床面上から多量の人骨が出土した。特にボージャー形の蔵骨器 1 からは複数体分の頭蓋骨や四肢骨が含まれており、本丘陵の中でも 1 点の蔵骨器内に納められた個体数としては最も多くを数える例である。

## 第 20 節 73 号墓

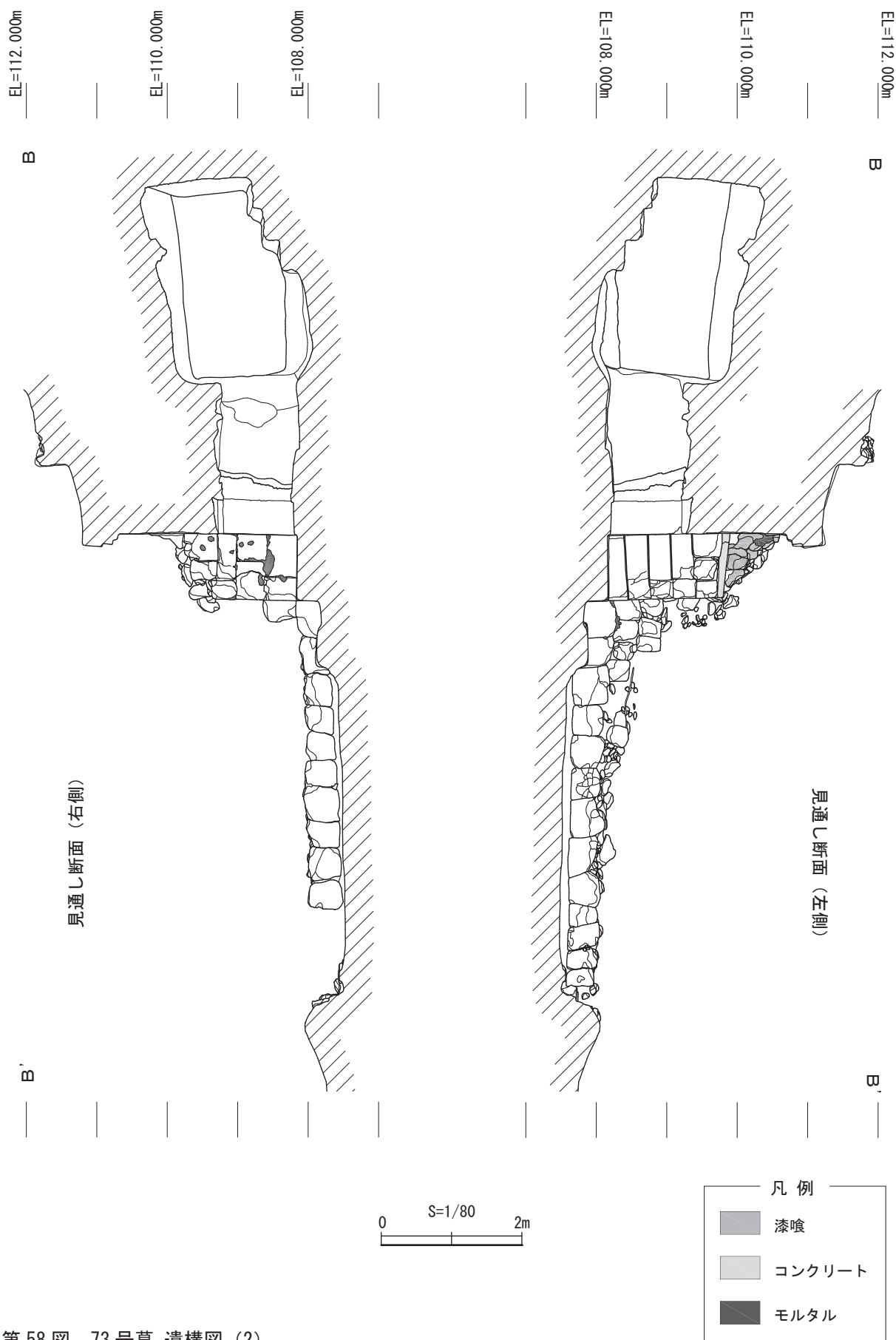
#### (1) 遺構 (第 57・58 図)

丘陵の裾に位置する琉球石灰岩及びマチナト石灰岩を使った平葺墓だが、墓室は掘込墓である。墓口方位は南南西 (N141° W)。墓室には左右棚 1 段ずつ、奥棚 3 段がある。羨道は掘り込み部分と石積み部分を合わせ長さ 2.3 m、墓口は高 1.07m × 幅 0.67m。墓口周辺と右袖は琉球石灰岩の切石積みで、一部に石材をかみ合わせる加工が施されている。正面上部及び左袖はマチナト石灰岩を積んでいる。このマチナト石灰岩は 1 × 0.3 × 0.3 m の柱状である。屋根 (庇) はコンクリートが使われており、このコンクリートの除去は不可能であった。屋根周辺には琉球石灰岩の石積みがあるが、墓口周辺等に比べ小振りで雑然とした積み方である。本来は琉球石灰岩のみで構成されていたものが上半分及び左袖が崩壊したため大部分をマチナト石灰岩で、屋根周辺を琉球石灰岩で補修したものと考えられる。

墓庭は幅 5.2m × 奥行 5.4～5.7m。琉球石灰岩の切石で庭囲いを造る。庭囲いは調査前はコンクリートで覆われていたが可能な範囲で除去している。第 58 図では左右の庭囲いはほとんど根石しか残っていないが、少なくとももう一段は存在していたがコンクリート除去にあたって残すことは不可能であった。縁石として琉球石灰岩を並べ粉末状の琉球石灰岩 (いわゆる石粉) を充



第 57 図 73 号墓 遺構図 (1)



第 58 図 73 号墓 遺構図 (2)

填してサンミデーをつくる。墓庭への出入口にあるコンクリート製階段の手前には階段側に向けて面を持つ石列が二列あり、当初の石積みの階段の名残とみられる。

(2) 遺物

遺物は陶磁器片と戦前の記念メダル等わずかである。

## 第21節 その他の遺物

ここでは遺構総体としてとらえた場合には遺構が大きく破壊・崩壊していたり遺物が移動（蔵骨器の移転）・攪乱を受けるなど情報量が限られてはいるものの、個々の遺物としては何らかの特徴を有していたり残存状況が良好なものなどを選び実測図及び観察表をもって報告する（第59・60図、第42・43表）。それぞれの遺物が帰属する遺構（墓）については第2～5表を参照されたい。

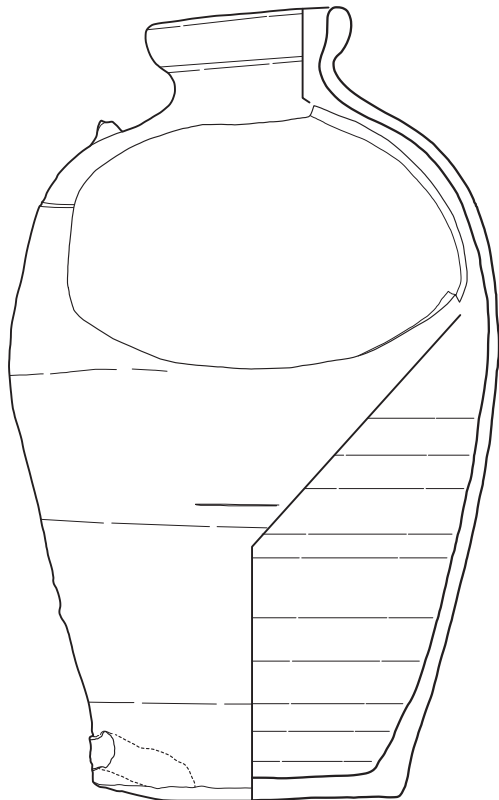
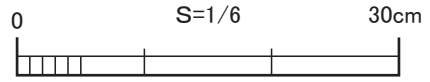
第42表 その他の墓 出土陶磁器観察一覧表

単位: cm

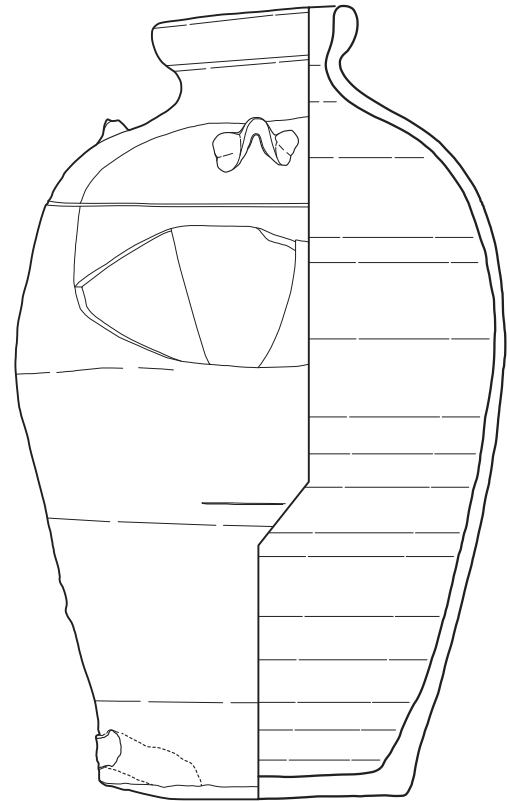
図番号	遺構名	出土地点	器形	残存部位	口径	器高	底径	施釉	釉色・色調	貫入	文様等	備考
第60 図1	16号墓	墓室	小杯	完形	5.1	2.8	2.0	見込みおよび高台内にコバルトでの絵染付後、全体に透明釉を掛ける。量付は露胎。	全面:透明色 文様:コバルトのややにぶい発色	なし	内面は見込に2つの花文。外面は高台内に文様?が見られるが不明瞭。	
第60 図2	40号墓	墓室	碗	ほぼ完形	8.2	5.2	2.8	全面に透明釉を施釉。コバルトにより文様。量付は露胎。	全面:白色・透明釉 文様:コバルト	なし	外面に濃淡のあるコバルトで葉と蔓の文様。	美濃産。底部に「岐500」の統制番号。
第60 図3	40号墓	墓室	碗	口縁部から底部	12.2	5.9	4.4	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。量付は露胎。	全面:透明釉 文様:コバルトの鮮やかな発色	なし	外面は点描により瓢箪状の窓を描き、中に「福壽福」と「壽福壽」を交互に描く。内面は口縁に沿って福壽文が配され、見込みにはやや変形した松竹梅文。	スカンマカイ/砥部産/大正～昭和/底部に印あり
第60 図4	40号墓	墓室	碗	口縁部から底部	13.0	6.8	6.0	白化粧後、透明釉。見込は蛇の目状に釉剥ぎ。量付は露胎。	全面:透明釉	あり	なし	沖縄産。
第60 図5	40号墓	墓室	碗	口縁部から底部	14.2	6.9	6.6	白化粧後、透明釉。見込は蛇の目状に釉剥ぎ。量付は露胎。	全面:透明釉	なし	外面に鉛釉による丸文6つを円形に配し、その外をコバルトによる丸文を円形に配して囲む。	沖縄産(壺屋)。
第60 図6	50号墓	墓室	小杯	ほぼ完形	6.0	2.8	2.0	全体に透明釉。量付から高台内は露胎。内面に吹き付けで文様を描くが剥落。	全体:白色 文様:顔料が剥離しているため色調不明。	なし	内面に旭日旗、その両脇に花文?が描かれる。	兵隊盃。



1



2

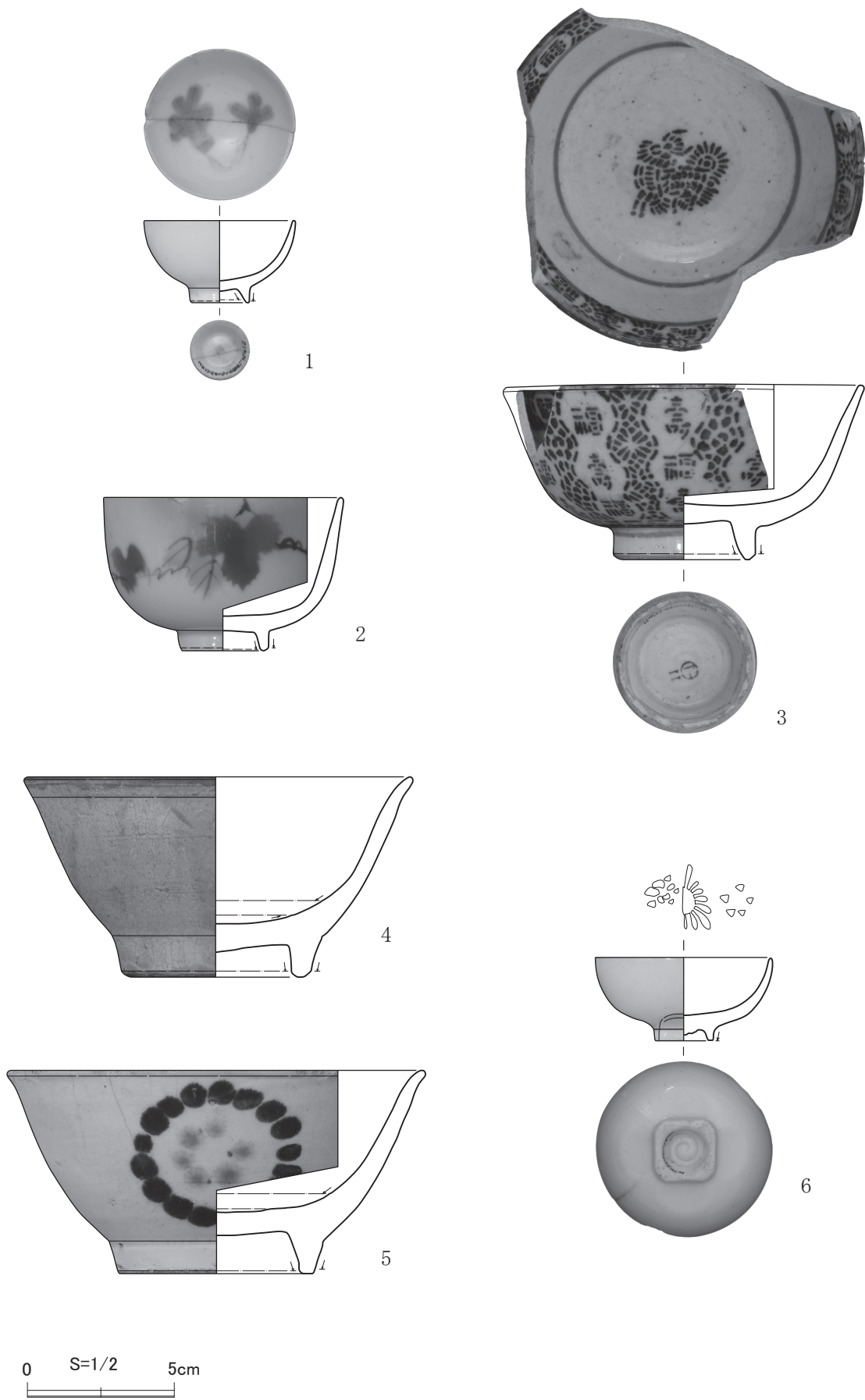


第59図 16・40号墓 出土遺物

第43表 その他の墓 出土蔵骨器(身)観察表

単位: cm

図番号	出土遺構	取上番号	出土地点	形式	口径 胴径 底径 器高	窓枠/ 屋門	窓数/ 形	横帯	文様	調整痕	底面孔	釉薬	窯印	銘書	備考
第59図 1	16号 墓	—	墓室	マンガン 釉甕形	19.5 16.5 10.4 25.7	なし	なし	凹2 凹2 凹3 凹2	又状工具による沈線で、肩部に草文と波状文、胴下部の横帯4の上下に波状文。	外面: ナデ調整。底部際及び底面はヘラケズリ調整。 内面: 横位のヘラケズリ調整。紐づくり痕が明瞭。	4個 方形	マンガン釉を口縁部から底面まで施釉。	なし	なし	
第59図 2 図版 26-1	40号 墓	—	墓室	転用 (水甕)	16.3 38.5 24.6 62.5	—	—	—	なし	外面: ヘラナデ調整。下部にケズリ調整。 内面: 横位のヘラ調整。	なし	なし	なし	なし	肩部を打ち欠き、楕円形の孔を開ける。打ち欠かれた破片も出土し、一部が接合した。



第 60 图 16·40·50 号墓 出土遺物

## 第22節 銘書一覧

銘書については前節までに個別に報告しているが、ここでは全体の傾向を一見で把握できるように一覧表にまとめた。

第44表 銘書一覧

図番号	墓番号	器種	銘書	被葬者	死亡年	洗骨年	備考
第13 図4	33号 墓	身	明治四十年旧朱二月廿日〔仲〕屋良ぬ貳代男子次仲屋良小比嘉浦	仲屋良の二代目次仲屋良小の比嘉浦			
第16 図1	45号 墓	蓋	前仲門〔小〕口／石川筑登之女子露／光緒七年巳／二月十八日死去／同十一年酉九月／二日先滑仕〔候〕	石川筑登之女子露	光緒7 (1881)	光緒11 (1885)	
第27 図4	51号 墓	蓋	□□□月□□十年□〔月〕十日死□□／比嘉□□三	比嘉□□三			
第27 図5		蓋	仲屋良三代ノ比嘉宇仕子ノ□□□名カマノ□□〔六〕十〔四〕才	仲屋良三代の比嘉宇仕の子？であるカマ			
第27 図6		蓋	光緒廿二年ノ午年六月ノ〔明〕治廿九年ノちよーちか東ぬ仲上間〔十〕ノ西〔次左の〕か〔ま〕ノちよー東〔ぬ〕仲ノ□□	ちよーちか東ぬ仲上間(屋号)			
第27 図7		蓋	三代ノ次男ノ亀ノ昭和十三年ノ旧二月八日寅年	三代の次男亀			
第28 図1		蓋	屋良三〔なん宗〕仁比嘉〔家〕口親富祖〔ペーケーミー〕み〔の〕年〔七〕拾〔四〕才	親富祖ペーケーミー？	巳年？		74歳で死去
第32 図1	56号 墓	蓋	石川登ノ加長男ノ戸加明治ノ三十九年旧午ノ十一月ノ死亡同四十ノ年旧未十月二ノ十七日ニ洗骨ス口	石川登加の長男戸加	明治39 (1906)	明治40 (1907)	
第35 図1	57号 墓	蓋	いり與那城ノ二男ノ女子二人ノ長女カマノ二女ウシノ明治廿六年十月廿□ノ墓ニ遷口	いり與那城の次男の長女カマ、次女ウシ			明治36年にこの墓(57号墓)に移転か
第35 図3		蓋	明治三十三年旧八月ノ十七日死亡ノいり與那城三男ノ子三女カマノ年二十二歳ニテノ死亡スノシンク子日ノ明治三十六年卯年ノ十月旧二十五日	いり與那城三男の三女カマ	明治33 (1900)	明治36 (1903)	22歳で死去
第35 図5		蓋	大正三ノ三男佐久田朝理ノ大正五年辰九月廿ノ四日洗骨ノ明治四十五年子三月ノ五日死去	三男佐久田朝理	明治45 (1912)	大正5 (1916)	
第36 図1		蓋	子年〔九〕月一日死亡ノ與那城ノ二男ノいり與那城長男ノ佐久田賀ノ見明治廿八年ノ未旧ノ十月十日洗ノ骨仕卯ノ生	與那城の次男いり與那城の長男佐久田賀見	明治21 (1888)？	明治28 (1895)	
第36 図3		蓋	い〔り〕與那城ノ佐久田筑登之親雲上ノ□□□ノ但□ノ子ノ妻威豊卯ノ年九月二十七ノ日但当初仲門ノ女子かまノ光緒四年ノ□□□三男ノ子十一月二十三日ノ佐久田親雲上ノ死亡洗骨同年ノ十三年亥十一月十六日ノ卯年ノ明治三十六年□月□日ノいり與那城ノ三男ノ墓ヲ造リタリ	1:いり與那城の佐久田親雲上妻(仲門の女子かま) 2:與那城の三男佐久田親雲上	威豊卯 (1855)？  光緒4 (1878)	光緒13 (1887)	「卯年/明治三十六年」以下は追記。明治36年にいり與那城の三男がこの墓(57号墓)を造営か。
第38 図1	59号 墓	蓋	道光二十三年卯八月十三日死去洗骨八次二十五年巳八月二十二日□□□□□女口〔かま〕	かま？	道光23 (1843)	道光25 (1845)	
第47 図1	66号 墓	蓋	乾隆拾貳年丁卯ノ〔八〕月十一日□城筑	□城筑登之親雲上？□城筑登之？	乾隆12？ (1747)	乾隆12？ (1747)	
第49 図1		蓋	前……	不明			
第49 図3	67号 墓	蓋	嘉慶拾三年戊辰七月朔日□□洗骨ノ親富祖筑親雲上四男□□ノ比嘉筑親雲上ノ但申人ノ童名かま戸ノ二□□□ノ同人ノ筑親雲上女子ノ妻ノ但成人ノ童名吳勢	1:親富祖筑登之親雲上四男比嘉筑登之親雲上童名かま戸 2:同人妻童名吳勢		嘉慶13 (1808)	「筑親雲上女子」は行間に追記。申年と戌年生まれ？
第49 図4		身	□□ノ比嘉筑親雲上ノ……	比嘉筑登之親雲上			
第50 図1		蓋	威豊〔八〕年ノ戊午八月廿一日ノ先骨仕候ノ浦添間切ノ前田村仲里ノ嫡子ノか□石川	仲里嫡子か□石川		威豊8 (1858)	
第50 図3		蓋	□□ノ但□人	不明			
第56 図1	72号 墓	蓋	〔嘉慶十〕□□ノ三月廿八日〔嫡孫〕石川筑親雲上より又々洗骨仕申候事ノ那覇石川筑親雲上妻	1:嫡孫石川筑登之親雲上 2:那覇石川筑登之親雲上妻		嘉慶 10年代？	





## 第5章 人骨

本章では各遺構及び蔵骨器内から出土した人骨について、形質人類学的視点に基づく観察を行い、その所見について記載する。出土状況などを踏まえつつ、人骨の基礎的なデータを提示することとしたい。

### 第1節 資料について

本丘陵の調査では、確認された遺構のうち19基から人骨の出土が確認された。このうち、墓室内に残存していた蔵骨器から人骨が出土した墓遺構は、45・49・57・59・64・65・66・67・72号墓の9基で、22点の蔵骨器内に人骨が残存していた。また、27号墓では一次葬人骨が検出されている。蔵骨器内の残存状況は大きく二つに分かれ、上記のうち64～72号墓の蔵骨器内にはニービの土砂が流入していた埋没状態であり、一方45～59号墓のものは土砂の流入はそれほど見られず、概ね設置時の状況を保っているものと思われる。しかしながら、両者ともに人骨の残存状態はそれほど良くはなく、完形を残存する人骨はほとんどみられなかった。また、大腿骨などの四肢骨で骨幹がある程度残存する資料であっても、45～59号墓のものでは、64～72号墓のものとは比べ骨質が非常に脆い状態である様子が観察された。

本章では出土した人骨について基礎的なデータを主体とした報告を記載する。

人骨の分析は、部位同定とそれに基づく個体識別および最小個体数の計数・性別および年齢推定・病変等の異常形態の観察と記載作業を基本として行い、それぞれ一覧表に記載した（第45表～第48表）。個体識別と個体数の計数は遺構別または蔵骨器単位で行い、識別した個体ごとにNo.を付した。一方で、墓室や墓庭など遺構内に散乱状態で出土した人骨も多数確認された。しかしながら、本丘陵は戦時中に壕として用いられた墓や、戦争遺骨などが調査区内に残されていたことから、これらが近世墓に伴うものか、それ以外のものか判断が困難である資料も多い。そのため、個体数の算出・集計については蔵骨器内から出土したもの・一次葬人骨・破片を含む蔵骨器と共伴して遺構から出土したものを対象とし、それ以外は、部位同定の内容を一覧表に記載するに留めることとした。

性別判定は、頭蓋および寛骨形態によることを基本としたが、判別に必要な残存状態を保持していない資料も多く、明瞭な判断ができないものについては不明とした。年齢については乳歯・永久歯の萌出・咬耗状況、四肢骨骨端等の癒合状況などを鑑みた上で推定している。

### 第2節 人骨出土状況および分析結果

本節では部位同定・個体識別・観察等について墓遺構・蔵骨器ごとに所見を記載する。なお、紙幅の都合上、ある程度残存状態の良い資料に絞って記載する。

#### (1) 27号墓

床面直上で1体分が検出されており、鉄釘や木片などの遺物の出土状況とも合わせ、一次葬と

判断した人骨である。観察すると頭蓋骨・椎骨・肋骨および主要な四肢骨などが同定されるが、手根骨や足根骨・指骨など細かな部位は残存していない。頭蓋骨は縫合から分離しており、各部位の骨も完存する資料は少ないが、全体的にはおおむね解剖学的原位置に近い状態を保っているものとみられた。

その中で、上下の顎骨は比較的良好に残存しており、乳切歯が萌出済みで乳犬歯・第1乳臼歯が萌出中、第2乳臼歯及び第1大臼歯が未萌出である状態をみてとることができる。このことから、本個体は乳児から幼児にかかる頃合いの年齢であったものと推定される。なお、上顎の左右の第1乳切歯の舌側面に齶蝕とみられる穴が開いている様子が確認された。

## (2) 57号墓

### ○蔵骨器2

側頭骨や後頭骨の破片、四肢骨・手根骨・中手骨・足根骨・中足骨などが断片的に残存しているものの、遺存状態は悪いことから詳細を窺うことは難しい。残存する遊離歯は全て永久歯であり、咬耗にそれほど進行が見られないことから、比較的若い年齢段階であることが窺えるが、具体的な区分の判断はしかねる状況である。

### ○蔵骨器3

蔵骨器内から人骨は出土したものの、全て破片あるいは細片であることから分析は不能であった。

### ○蔵骨器4

残存状況はそれほど良くないものの、頭蓋骨破片・椎骨・中手骨・手根骨・中足骨・足根骨・指骨などが同定された。部位重複は認められないことから、1体分であることが想定されるが、頭蓋や四肢骨などが完存するものがなく、詳細な分析は困難である。ただし、残存する遊離歯に一程度の咬耗が観察される点から、成人であることは窺える。

### ○蔵骨器5

57号墓の蔵骨器の中では、納められた人骨の残存状況が最も良好であったものである。観察してみると、成人のほぼ全身の部位が同定され、その多くが2点ずつ存在していることから、2体分を含んでいることが窺える。頭蓋骨は破片となって形状を保っていないものの、それ以外のほとんどは全体形を残しており、重複する同一の部位を比較すると全て大小のサイズ差を明瞭に見てとることができる。加えて、寛骨形状および四肢骨の骨端幅などから男性と女性が含まれることが想定される。このことから、本蔵骨器中には男女各1体ずつが納められていると考えられ、個体識別が可能である。男性の一群をNo.1、女性をNo.2として分類した。

No.1は下顎骨がおおむね完形に近く、ほぼ全ての歯が残存しており、いずれの歯にも強度の咬耗が見てとれることから、熟年程度の年齢段階に達しているものと推定される。寛骨は腸骨の一部と恥骨が欠損しているものの、大坐骨切痕角の形状から男性と推定し、上腕骨頭や大腿骨頭の径あるいは四肢骨の端部幅が大きい点でも合致すると判断できる。また、腰椎の椎体復縁にはわずかに骨棘形成が見てとれる。

一方、No.2はNo.1に比べやや残存状態が悪く、残存しない部位も多い。ただし、寛骨は恥骨が一部残存しており、その形状から女性であると判断できる。完存ではないものの下顎骨も形状を観察することができ、切歯以外の歯槽が既に閉鎖している状態であることから、老年段階に達していたものと推察される。

なお、頭蓋骨破片・胸椎・肋骨・指骨についてはサイズによる分類が困難であったことから個体識別は行わず、一括して一覧表には記載した。

### (3) 59号墓

マンガン釉甕形の蔵骨器が1基のみ納められる規模で構築された墓遺構で、蔵骨器内から成人1体分の人骨が検出された。完存する部位は残存していないものの、頭蓋骨、下顎骨、四肢骨などの主要な部位が同定された。頭蓋は前頭骨・頭頂骨・後頭骨・側頭骨が残存しており、乳様突起の発達形状から男性ではないかと推測される。また、下顎骨をみると左の第2および3大臼歯の歯槽が閉鎖済みであり、また臼歯の咬耗も一程度進行している様子を窺うことができることから熟年～老年段階ではないかと想定される。同様に冠状縫合・矢状縫合も癒合が進行していることから追認される。

### (4) 64号墓

墓室の一部がわずかに残存するのみであった遺構で、蔵骨器も断片的に残存していた遺構である。

#### ○蔵骨器1

人骨の出土もごくわずかなもので椎骨および上腕骨・大腿骨・脛骨が断片的に残るのみである。ただし、上腕骨には中央付近で捻転状の変形を呈する様子が観察された。

### (5) 65号墓

蔵骨器が4基検出されたうちいずれからも人骨が出土しているものの、細片となっており分析不能な状態である。

#### ○蔵骨器4

わずかながら遊離歯が残存していたことから、最小個体数の推計が可能であった。複数の歯種に重複があったこと及び咬耗の状態に明瞭な差が見られることから、成人と未成年が含まれる可能性が窺える。未成年は、永久歯に咬耗がほとんど見られない点及び第2大臼歯が未萌出ないし萌出中であると思われることから小児段階と推測される。さらに未萌出あるいは萌出中ではないかとみられる第1乳臼歯および乳犬歯が同定されることから、乳幼児段階のものが含まれていたことが示唆される。

### (6) 66号墓

出土した蔵骨器のうちボジャー形蔵骨器5基からそれぞれ人骨が出土した。ただし、残存状況はそれほど良くなく、部分的に残存するものがほとんどである。

#### ○蔵骨器1

人骨の残存は認められたものの、大半は細片となっている状態である。手根骨・中手骨・足根骨・中足骨が部分的に同定されたが、頭蓋骨・四肢骨等は同定対象となるものはない。

#### ○蔵骨器2

破片も含め残存する人骨は少なく、頭蓋骨破片及び大腿骨ほか数点が同定されたのみである。頭蓋骨破片に見られる縫合の癒合が進行している状況が見られる点から、成人であると推定したものの、それ以上の詳細は不明である。

#### ○蔵骨器3

断片的に数点の部位が残存するのみであることから詳細は不明であるが、遊離歯の咬耗から成人

の可能性が推測される。

○蔵骨器 4

66号墓から出土した蔵骨器の中では比較的人骨が残存しているもので、四肢骨を中心に部位同定される。ただし、完存する資料は少なく、詳細な観察は難しい。歯の咬耗がある程度見られることから成人であると推測している。

○蔵骨器 5

蔵骨器 2 あるいは 3 と同様、同定可能な部位は少数である。

○蔵骨器 6

人骨は残存していなかった。

(7) 67号墓

出土した4基の蔵骨器中のいずれからも人骨が検出されたものの、大半が破片・細片であり、分析可能な状態で残存していた資料は、蔵骨器 2 から出土した一部のみである。

○蔵骨器 2

椎骨や四肢骨などの部位が同定できたものの、完存する資料は無く、いずれも骨端や破片などが残存する程度で、かろうじて判別が可能な状態である。そのため詳細な観察は困難で、重複する部位がないことから最小個体数は1と考えられる。残存している骨端は癒合済みで、遊離歯は全て永久歯で一程度の咬耗を見ることから成人であるとまでは推測した。

○その他の蔵骨器

前述のとおり蔵骨器 2 以外は、最小個体数を1と計数するのみである。

(8) 72号墓

墓室から出土した2基の蔵骨器中から検出された人骨のほか、墓室の覆土中からも人骨が出土している。ただし、散乱した状態であったことから一次葬の痕跡であるのか、蔵骨器中からこぼれたものであるか等の判別は不能であった。そのため、本報告では個体数の計数には含めず、同定された部位の一覧のみ掲載する。蔵骨器中から出土した人骨については、これまで通り蔵骨器ごとに観察・計数を行う。

○蔵骨器 1

完形のボージャー形蔵骨器で内部には天井崩落土と思われるニービが充満した状態で検出された。土を取り除くと、多量の四肢骨が納められている様子が窺われた。観察してみると、最も多いもので大腿骨が左13点、右13点が部位同定された。次いで上腕骨が左10点、右11点と多く、下顎骨・肩甲骨・尺骨・橈骨・脛骨なども複数点ずつ出土している。頭蓋骨は細かな破片となっており全体形を把握できるものはないが、側頭骨の外耳道周辺などの破片を見るに、やはり複数体が含まれていることが分かる。残存状況を見ると完形を保つ部位は無く、四肢骨は全て骨端が欠失する骨幹のみが残存している。そのため、各部位の個体識別は極めて難しいことから、個体ごとへの類別はせず、一括して一覧表には記載し、最小個体数のカウントのみ行う。

また、下顎骨で歯が残存するものと歯槽閉鎖の痕跡を窺うことができる資料から熟年および老年の個体が少なくとも1体ずつ含まれること、明らかに小型のサイズの四肢骨があることから未成人を少なくとも1体分含んでいることを窺うことができる。しかしそれ以外は骨端の無い四肢骨からは成人

あるいは成人と同等サイズの未成人（若年）の可能性のある個体であると考えられる。

#### ○蔵骨器 2

四肢骨を中心に部位同定が可能であり、骨端が癒合済みである点などから成人であると判断される。また、遊離歯のなかに未咬耗及び歯根形成中のものがみられることから、成人とは別に未成人が含まれることが窺われる。

### 第3節 まとめ

観察の結果、本丘陵に納められた人骨は少なくとも成人 27、未成人 6、年齢不明 8 の合計 41 人分であると考えられる。しかし、前章までに述べてきた通り、近世の墓域としての本丘陵の状態は、後代の改変により大きく攪乱されていることから、この数字をもって本丘陵の墓域としての規模を反映しているものとは考えにくい。また、人骨そのものについても残存状況は完形を保ったものが少なく、骨長計測を含めた形態的な特徴を検討することは困難であった。

一方で、72 号墓の蔵骨器 1 から最小個体数で 11 体分の人骨が出土したことについては特徴的な事例と捉えられる。遺構としての 72 号墓は大きく削平されていることから、蔵骨器もどの程度原状を保っているものかは慎重な検討を要するが、改葬ないし合葬を示す状況であるだけに、注視すべき内容であると考えられる。

これまでの『前田・経塚近世墓群』の発掘調査報告書でも述べられているが、人骨の分析については更なる専門的な視点からの分析による新たな知見が期待されるものであるとともに、銘書や蔵骨器といった他の要素との複合的な視点による考察が今後の課題であると思われる。

#### 〈引用・参考文献〉

- 浦添市教育委員会 2011 『前田・経塚近世墓群 2 首里大名地区一那覇広域都市計画道路事業 3・3・16 号国際センター線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』 浦添市文化財調査研究報告書
- 浦添市教育委員会 2012 『前田・経塚近世墓群 3 前田真知堂 B 丘陵 (1)・前田真知堂 C 丘陵 (1)一都市計画街路国際センター線及び沢岬石嶺線工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』
- 浦添市教育委員会 2013 『前田・経塚近世墓群 4 経塚子の方原 A 丘陵 (1)一浦添南第一土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書一』
- 浦添市教育委員会 2014 『前田・経塚近世墓群 5 経塚南小島原 A 丘陵 一浦添南第一土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書一』
- 江藤盛治編 1991 『人体計測法 2』 人類学講座別巻 1 雄山閣
- 谷畑美帆・鈴木隆雄 2004 『考古学のための古人骨調査マニュアル』 学生社
- 土肥直美・北條真子 1998 「那覇市銘苺古墓群 (B・E) 地区出土の人骨」 『銘苺古墓群 (I) 一那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告 V 一』 那覇市教育委員会 那覇市文化財調査報告書第 39 集
- 土肥直美・譜久嶺忠彦 1999 「那覇市銘苺古墓群南 (A・C・D) 地区出土の人骨」 『銘苺古墓群 (II) 一那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告 VI 一』 那覇市教育委員会 那覇市文化

財調査報告書第 40 集

- 譜久嶺忠彦・土肥直美・石田肇 2000 「那覇市ナーチャー毛古墓群出土の人骨」『一那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告VII一』那覇市教育委員会 那覇市文化財調査報告書第 44 集
- 譜久嶺忠彦・土肥直美・石田肇・瑞慶覧朝盛・泉水奏・佐宗亜衣子・比嘉貴子 2001 「ヤッチのガン・カンジン原古墓群出土の人骨」『ヤッチのガン・カンジン原古墓群原古墓群一県営かんがい排水事業（カンジン地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 山本美代子 1988 「日本古人骨永久歯のエナメル質減形成」『人類学雑誌』96 日本人類学会
- I.W.Cornwall 1964 *Bones for the Archaeologist*. Phoenix House LTD
- D.R.Brothwell 1981 *Digging up Bones*. Cornell University Pres
- E.SCHMID 1972 *Atlas of Animal Bones For Prehistorians, Archaeologists and Quaternary Geologists*. Elsevir Publishing Company

第45表 出土人骨一覽表

遺構 No.	蔵骨器 No.	人骨 No.	年齢	性別	出土部位	備考
16	一括	1	不明	不明	肋骨破片、寛骨破片、大腿骨L/R	
27	一次葬	1	乳幼児	不明	前頭骨、頭頂骨L・R、後頭骨、側頭骨L・R、下顎骨、椎骨(14)、肋骨L(6)・R(6)、肩甲骨R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、尺骨L・R、基節骨、腸骨L・R、坐骨L・R、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R	
33	—	1	成人	不明	大腿骨L・R、脛骨R	
33	—	2	成人	不明	大腿骨L、脛骨R・R	
33	—	3	幼児	不明	椎骨破片、肋骨L・R・破片、鎖骨L・R、尺骨R、恥骨R、大腿骨L・R、脛骨L、遊離齒	遊離齒がi~M <sub>1</sub> /'まで残存のため小児段階と推測
37	一括	—	—	—	椎骨椎体(2)	集計対象外、未成人
38	一括	—	—	—	脛骨R	集計対象外
45	1	1	成人	不明	頭頂骨L・R、下顎骨L・R、大腿骨L	
46	一括	—	—	—	破片のみ	集計対象外
48	一括	—	—	—	第3中手骨L・R	集計対象外
49	1	1	乳児	不明	頭頂骨L・R、側頭骨L・R、軸椎、肋骨L(8)・(9)、肩甲骨L・R、鎖骨R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、腸骨L・R、坐骨L・R、大腿骨L、脛骨L・R、腓骨L/R(2)	
51	一括	—	—	—	側頭骨L(2)・R(2)、上顎骨L・R、下顎骨L(2)・R・L+R(3)、軸椎、胸椎、椎骨(6)、肋骨L(2)・破片、肩甲骨L(4)・R(4)、鎖骨L(4)・R(5)、上腕骨L(6)・R(8)、橈骨L(3)・R(3)、尺骨L(4)・R(6)、大菱形骨R、小菱形骨L(2)・R(2)、有頭骨L・R、舟状骨L(2)・R(2)、月状骨R、第1中手骨R、第2中手骨R、第1基節骨L・R(2)、基節骨(12)中節骨(6)、末節骨(5)、腸骨L、寛骨臼+腸骨R、大腿骨L(7)・R(5)・L/R(11)、膝蓋骨R(4)、脛骨L(5)・R(4)、腓骨L(6)・R(3)・L/R、踵骨L(2)・R、距骨L(3)・R(3)、外側楔状骨R、中間楔状骨R(2)、内側楔状骨R(2)、立方骨L、舟状骨L・R(2)、第1中足骨L(2)・R(2)、第2中足骨R(2)、第3中足骨L・R、第4中足骨L・R(2)、第5中足骨L(2)・R、基節骨(3)、末節骨(3)、中手/中足骨L/R(14)、指骨	集計対象外
52	一括	—	—	—	腰椎(3)、椎骨(3)、肋骨L(2)・R・破片、肩甲骨L、鎖骨R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、第1中手骨L、第2中手骨L、第3中手骨L、第4中手骨L、基節骨(3)、寛骨L・R、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨R、L/R(2)、距骨R、第1中足骨L	集計対象外
53	一括	—	—	—	頸椎、胸椎、椎骨破片、肋骨破片、第2中手骨L、基節骨(3)、中節骨(4)、遊離齒	集計対象外
57	2	1	不明	不明	後頭骨、側頭骨L、上顎骨R、胸椎、腰椎(2)、鎖骨L、尺骨L、大菱形骨R、有鈎骨L・R、舟状骨R、月状骨L・R、三角骨R、第2中手骨L、第3中手骨L・R、基節骨(4)、中節骨(2)、坐骨L、大腿骨R、脛骨L、腓骨L、踵骨R、中間楔状骨L、内側楔状骨L/R、立方骨R、第5中足骨R、基節骨、末節骨、中手/中足骨(4)、遊離齒	咬耗状態から比較的若い年齢段階か?
57	3	1	不明	不明	分析不可	
57	4	1	成年~熟年	不明	前頭骨、頭頂骨L・R、環椎、頸椎(3)、胸椎(7)、腰椎(5)、椎骨、胸骨体、肋骨破片、上腕骨R、橈骨L・R、大菱形骨L・R、小菱形骨L、有鈎骨L、舟状骨L、月状骨L、三角骨R、豆状骨L、第1中手骨L、第2中手骨L・R、第3中手骨L・R、第4中手骨L、第5中手骨L、基節骨(3)、中節骨、末節骨(2)、寛骨臼・R、大腿骨R、脛骨L・R、踵骨L・R、距骨L・R、外側脛状骨L・R、中間楔状骨L・R、内側楔状骨L・R、立方骨L・R、舟状骨L・R、第1中足骨L・R、第2中足骨L・R、第3中足骨L・R、第4中足骨L・R、第5中足骨R、第1基節骨L・R、基節骨(3)、末節骨、中手/中足骨(6)、手根/足根骨、遊離齒	
57	5	1	熟年	M	下顎骨、軸椎、頸椎(5)、腰椎(4)、仙骨、胸骨、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、尺骨L・R、大菱形骨R、小菱形骨L・R、有頭骨L・R、有鈎骨L、舟状骨L・R、月状骨L・R、第1中手骨L、第2中手骨L・R、第3中手骨L・R、第4中手骨L・R、第5中手骨L・R、寛骨L・R、大腿骨L・R、膝蓋骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨L・R、距骨L・R、外側楔状骨L・R、中間楔状骨L・R、内側楔状骨L・R、立方骨L・R、舟状骨L・R、第1中足骨L・R、第2中足骨L・R、第3中足骨L・R、第4中足骨L・R、第5中足骨L・R	

第45表 出土人骨一覧表

遺構 No.	蔵骨器 No.	人骨 No.	年齢	性別	出土部位	備考
57	5	2	老年	F	下顎骨、軸椎、頸椎(4)、腰椎(5)、仙骨破片、胸骨丙、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、大菱形骨R、小菱形骨L・R、有頭骨L・R、有鈎骨L・R、舟状骨L・R、月状骨L・R、第1中手骨L・R、第2中手骨L・R、第3中手骨L・R、第4中手骨L、第5中手骨L、寛骨L・R、大腿骨L・R、膝蓋骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨L・R、距骨L・R、外側楔状骨L、中間楔状骨L、立方骨R、舟状骨L・R、第1中足骨L・R、第2中足骨R、第3中足骨R、中足骨L/R	
57	5	一括	—	—	上顎骨L、頭蓋骨破片、胸椎(22)、肋骨L(15)・R(16)・破片、第1基節骨L(2)・R(2)、基節骨(12)、中節骨(9)、末節骨(5)、第1基節骨L・R・L/R、基節骨(10)、中節骨(4)、末節骨(3)	集計対象外
57	一括	一括	—	—	頭蓋骨破片、肋骨破片、上腕骨L・R、腸骨R、大腿骨L、脛骨L・R、遊離歯	集計対象外 墓室床面一括
59	1	1	熟年～老年	M	前頭骨、頭頂骨L・R、側頭骨L・R、後頭骨、下顎骨、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、第2中手骨R、第3中手骨R、基節骨(2)、中節骨、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L/R(2)、第1中足骨L、第4中足骨R、中手/中足骨L/R(9)	
64	1	1	不明	不明	椎骨(2)、上腕骨R、有鈎骨L、第1中手骨L、第4中手骨L・R、基節骨(2)、大腿骨L・R、脛骨R、外側形状骨L、内側楔状骨R、舟状骨R、第2中足骨R、第4中足骨R、第5中足骨R、第1基節骨L、基節骨、中節骨、末節骨	
65	1	1	不明	不明	分析不可	
65	2	1	不明	不明	分析不可	
65	3	1	不明	不明	分析不可	
65	4	1	成人	不明	遊離歯	
65	4	2	小児	不明	遊離歯	M <sup>2</sup> / <sub>2</sub> 未萌出ないし萌出中
65	4	3	乳幼児	不明	遊離歯	乳歯のみ
66	1	1	成人	不明	上顎骨、環椎、肋骨破片、尺骨L、大菱形骨L・R、小菱形骨R、有頭骨R、有鈎骨R、舟状骨L・R、月状骨L・R、三角骨R、第3中手骨L・R、基節骨(3)、中節骨(2)、末節骨、距骨L、外側形状骨L・R、中間楔状骨L、舟状骨R、第1中足骨R、第2中足骨R、第4中足骨R、第5中足骨L、第1基節骨R、基節骨(2)、中節骨、末節骨(2)、中手/中足骨(5)、遊離歯	
66	2	1	成人	不明	後頭骨、下顎骨、尺骨R、基節骨、大腿骨L・R	
66	3	1	成人	不明	上腕骨R、有鈎骨R、基節骨、膝蓋骨L・R、舟状骨L、中手/中足骨(3)、遊離歯	
66	4	1	成人	不明	鎖骨L、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、遊離歯	
66	5	1	成人	不明	肋骨破片、橈骨L・R、尺骨L・R、大腿骨L・R、遊離歯	
67	1	1	不明	不明	破片のみ	
67	2	1	成人	不明	頭蓋骨破片、頸椎、胸椎、肋骨破片、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、有頭骨L、有鈎骨L、月状骨L、豆状骨R、基節骨(4)、中節骨(3)、末節骨(3)、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L、立方骨L、第3中足骨L・R、第4中足骨L、中手/中足骨L/R(4)、指骨、遊離歯	
67	3	1	不明	不明	破片のみ	
67	4	1	不明	不明	破片のみ	
72	1	一括	成人	不明	頭頂骨L・R+後頭骨、上顎骨L(1)・R(4)、側頭骨L(5)・R(4)、下顎骨L・R・L+R(3)、鎖骨L(2)・R、肩甲骨L(2)・R(3)、上腕骨L(10)・R(11)、橈骨L・R(2)、尺骨L(4)・R(4)、第3中手骨R(2)、中節骨、寛骨L、大腿骨L(13)・R(13)、膝蓋骨R、脛骨L(4)・R(6)、腓骨L/R(8)、第1中足骨L、指骨(2)	残存状態から検討すると大腿骨右から最小個体数は11と推定される
72	1	一括	未成人	不明	上腕骨L、大腿骨L・R、脛骨L、腓骨L/R	



第45表 出土人骨一覧表

遺構 No.	蔵骨器 No.	人骨 No.	年齢	性別	出土部位	備考
72	2	1	成人	不明	後頭骨、頭蓋骨破片、下顎骨、鎖骨L、上腕骨L、橈骨L/R、尺骨L、中手/中足骨L/R、寛骨L・R、大腿骨L・R、脛骨L・R、遊離歯	
72	2	2	未成人	不明	遊離歯	未咬耗であることからNo.1と別個体と判断
72	—	一括	—	—	頭蓋骨破片、下顎骨、肋骨破片、肩甲骨L(2)・R、鎖骨L・R、上腕骨L(5)・R(4)、橈骨R(5)、尺骨L・R(5)、基節骨、大腿骨L(2)・R、脛骨L・R(2)、腓骨L(2)・R(4)、踵骨L・R、中手/中足骨	蔵骨器外出土集計対象外

第46表 最少個体数 集計表

墓 No.	成人									未成人					年齢性別不明	合計	総計	
	成年			熟年～老年			年齢不明			小計	若年	小児	乳幼児	年齢段階不明				小計
	M	F	性別不明	M	F	性別不明	M	F	性別不明									
16										0					0	1	1	
27										0			1		1		1	
33									2	2			1		1		3	
45									1	1					0		1	
49										0			1		1		1	
56										0					0		0	
57				1	1	1			1	4					0	1	5	
59				1						1					0		1	
64									1	1					0		1	
65									1	1		1	1		2	3	6	
66										5	5				0		5	
67									1	1					0	3	4	
72										11	11			1	1		12	

第47表 骨に見られる変異等の観察表

墓 No.	蔵骨器 No.	人骨 No.	部位	LR	変異種別	観察所見
27	一次葬	1	i'	LR	齧蝕	舌側面の歯冠に齧蝕
49	1	1	頭蓋骨	—	未形成	前頭縫合及び大泉門未癒合
52	一括	—	腰椎	—	骨棘形成	椎体復縁に骨棘形成
57	5	一括	後頭骨・環椎	—	癒合	後頭骨大孔周辺と環椎が癒合して一体化
57	5	一括	胸椎	—	骨棘形成	胸椎の一部の椎体復縁に初期の骨棘形成
64	1	1	上腕骨	R	変形	骨幹中央にねじれ状の変形
66	1	1	C(下顎)	L	エナメル質減形成	線状の形成不全

凡例) 歯種記号: 残存歯, ○: 歯槽開放, ×: 歯槽閉鎖, /: 歯槽破損,  
 △: 歯根のみ残存, ( ): 未萌出, [ ]: 萌出中・閉鎖中,  
 網掛: 齲齒, 空白: 欠失・未形成

第48表 上顎骨及び下顎骨の歯列残存状況

墓No.	地点	人骨No.	残存状況																	
			R							L										
27	一次葬	1	(M <sup>1</sup> ) (M <sub>1</sub> )	(m <sup>2</sup> ) (m <sub>2</sub> )	[m <sup>1</sup> ] [m <sub>1</sub> ]	[c] (c)	○ i <sub>2</sub>	i <sup>1</sup> i <sub>1</sub>	i <sup>1</sup> i <sub>1</sub>	i <sup>2</sup> i <sub>2</sub>	(c) (c)	[m <sup>1</sup> ] [m <sub>1</sub> ]	(m <sup>2</sup> ) (m <sub>2</sub> )	○ [M <sub>1</sub> ]						
45	1	1					○	○	○	○	○							○	○	○
49	1	1	(m <sup>2</sup> ) (m <sub>2</sub> )	[m <sup>1</sup> ] [m <sub>1</sub> ]	[c] [c]	[i <sup>2</sup> ] [i <sub>2</sub> ]	[i <sup>1</sup> ] [i <sub>1</sub> ]	[i <sup>1</sup> ] ○	○	[c] [c]	[m <sup>1</sup> ] [m <sub>1</sub> ]	(m <sup>2</sup> ) (m <sub>2</sub> )								
57	2	1		M <sup>2</sup>	○	○														
57	5	1	M <sub>3</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>1</sub>	C	I <sub>2</sub>	I <sub>1</sub>	△	I <sub>2</sub>	C	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>3</sub>		
57	5	2	×	×	×	×	/	/	/	/	/	/	○	○	×	×	×	×	×	×
57	5	一括									○	I <sup>2</sup>	C	○	/	/	/			
59	1	1	○	M <sub>2</sub>	×	P <sub>2</sub>	P <sub>1</sub>	○	○	/	/	○	○	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	×	×	×	×
66	2	1				/	/	/	/	/										
72	1	一括									/	/	○	○	○	○	○			
72	1	一括	○	○	○															
72	1	一括			○	○	○	○												
72	1	一括			○	○	○	○												
72	1	一括	○	○	○															
72	1	一括				○	○	○	○											
72	1	一括				○	○	○	○	○	○	○	C	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>3</sub>		
72	1	一括		/	/	/	/	/	○	○	○	○	○	○	/	/	/	/	/	/
72	1	一括		/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
72	1	一括	○	○	○															
72	1	一括																○	○	○
72	2	1						○	○	○	○							○	M <sub>2</sub>	

## 第6章 総括

### 1. 遺構の特徴と墓域の形成について

前田A丘陵の墓は、塚に改造された結果当初の形状がわからなくなっているものも多いが墓室平面形の分類では大半が1類と5類である。ところが丘陵南斜面に限っていえば2類や4類もあり後述の出土蔵骨器と合わせて考えると、墓室類型とその年代について示唆を与えるものとなっている。

墓域の形成についてはその基準となる遺物が少ないが次項で述べるように丘陵南側南斜面の墓が古いと考えられる。銘書では乾隆12年(1747)の年紀が確認できるが蔵骨器の形式では18世紀前後のものが存在しており、遅くとも18世紀にはこの周辺で墓が造られていたと思われる。丘陵北側も同時期に墓が造営されていたのか不明であるが、銘書から57号墓は明治32年(1899)に造られた可能性があり近代でも墓が造られ続けていたようである。前田集落に近いがため集落側にあたる丘陵北側に墓域が広がるのは比較的新しいのかもしれない。

なお丘陵南側の東面は崖になっており大規模な崩落を起こしたと思われここに墓があったか不明だが、その崖下の76号遺構より下方は傾斜地であるものの地盤が泥岩(クチャ)であり墓造営には不向きなことからこちらに墓域は広がらなかったようである。

### 2. 遺物の特徴と年代観について

蔵骨器はボージャー形とマンガン釉甕形が大半でほかにマンガン釉底付甕形や御殿形が出土している。ボージャー形は丘陵南側(平成26年度調査区)でのみ出土しておりしかもすべて南斜面の墓からの出土である。64号墓は詳細が不明であるが65～67号墓はきれいに横並びである。このうち括弧付きではあるが64号墓、そして65・66号墓には転用を除きボージャー形しか使われていない。64号墓は安里分類(安里・新里2006)では身Ⅲに分類され18世紀とされる2墓が残されている。65号墓は蓋Ⅱ・Ⅲ・Ⅴに身Ⅲ・Ⅳに当たる。蓋と身のセット関係がわからないものが多いが蓋は17世紀末から18世紀後半、身は18世紀初頭から19世紀初頭に位置づけられていることから65号墓はおおよそ18世紀代の遺物で構成されていることがわかる。隣の66号墓は蓋Ⅲ～蓋Ⅶ、身Ⅱ～身Ⅵであり18世紀初頭から19世紀初頭にかけての遺物である。いずれもスペースに余裕がありながらより新しいマンガン釉甕形の蔵骨器がないことから19世紀初頭には新たな追葬が停止されているのであろう。天井崩壊による埋没が原因であれば墓前祭祀さえも行われなくなったかもしれず廃絶ともいえよう。横並びのもう1基の67号墓についてボージャー形は1組のみで18世紀後半から19世紀初頭に、マンガン釉甕形は3組あり18世紀末から19世紀いっぱい比定される。しかし庭に塹壕と思われる遺構があり棚の上には手榴弾が置かれていたことから昭和20年にはまだ埋没していなかったはずである。これらの墓より一段上に69号から72号墓が並んでいるが蔵骨器が出土したのは72号墓のみでボージャー形1組は分類・銘書から19世紀初頭に位置づけられる。遺物を見る限りではこれらの墓が前原A丘陵では最も古いものであり、19世紀初頭には追葬停止もしくは廃絶しているものがあることから遅くとも18世紀には墓が造られ始めているといえよう。

丘陵北側(平成25年度調査)でも蔵骨器がまとまって発見された墓は少ないのだが少なくともボージャー形は見つかっていない。57号墓は蔵骨器がまとまって発見されているが、全てマンガン釉甕形もしくはマンガン釉底付甕形で安里編年(安里1997)及び銘書から19世紀後半以降20世紀までに相当する。他に単独で出土したものや攪乱を受けたものにしても同様の年代が与えられる。

蔵骨器以外の陶磁器類で多く出土した碗、皿は砥部産や美濃産に代表され、近代のものであり統制番号を付したのも見受けられる。破片を含めれば多くの遺構から出土しているが41号墓・47号墓などは特にまとまって出土している。沖縄産もあるのだが極端に少ないうえデザインは吉祥文が使われていることからこれらは日用雑器というよりはハレの日のための器物で、それがために戦災からの避難であろう。

### 3. 銘書からみる本丘陵の特徴

一つの墓からまとまって銘書が確認されているのは51・57・67号墓である。それ以外の墓も含め年代は死亡年か洗骨年か不明だが乾隆12年(1747)が最も古く(66号墓)、その他は全て嘉慶年間(1796～1820)以降で、明治も多い。士族と判断できるものはなく、前田村(67号墓)や屋号ではあるが「ちょーちか」=経塚(51号墓)という地名に、現在の前田地域でも多い親富祖、石川、佐久田などの家名から地元の人々によって使われた墓域と判断できる。これは前原A丘陵が前田・経塚近世墓群でも最も前田集落に近い丘陵の一つであることが影響しているのであろう。先に述べたように57号墓のマンガン釉底付甕形の銘書に明治36年(1903)に「墓ヲ造リタリ」とあることから、近代に入っても墓が造られていた可能性がうかがえる。

### 4. 戦争遺構からみる前原A丘陵の様相

前原A丘陵は地元ではクマラーモーと呼ばれ日本軍の陣地があったといわれる。その中枢であったであろう63(77)号遺構は確認されただけで長さ35m、幅2～3mを測り幅0.7～0.9mの通路が枝分かれしていくつかの小空間につながっている。62号遺構は小規模ではあるが、地山削り出しのかまどが確認された。そのほか東側に口を向ける5・7・9号遺構は縦穴によって西側に口がある55号遺構とつながっており丘陵を横断している。2・3・4・6号遺構や69・71・72号墓を連結させたものなども陣地を構成する遺構である。そして尾根上にはタコ壺と考えられる7基の遺構がある(17・43号遺構など)。頂部と裾で比高差が大きく砲爆撃の影響を軽減できる丘陵南側に規模の大きい坑道(63号)を掘削し、そうでない北側は既設の墓を利用するなどして丘陵全体が陣地となっていた。丘陵東側斜面の多くの遺構が沖縄戦時の壕であり、丘陵西斜面にも壕はあるが東側に比べ著しく少ない。これは西海岸からの艦砲射撃などを想定してその影となる東側斜面に壕を構築したのかもしれないが、これは前田・経塚近世墓群全体を見て判断するべきであろう。

前田周辺では当初は第62師団通信隊が、のちに同師団輜重隊が陣地構築を行っている。輜重隊という部隊の性格から一帯は補給・輸送基地といえ、戦闘用陣地の構築は遅れて昭和20年2月中旬以降から行われたものの陣地構築は思うに任せないまま地上戦を迎えている。前田高地争奪戦が始まった同年4月末頃から前田集落付近に米軍が姿を現し始め、以後戦闘の進捗とともに日本軍の様々な部隊が前田・経塚に進出している。前原A丘陵もこれら多くの部隊によって利用されたものと思われる。

#### 〈参考文献〉

沖縄県立浦添商業高等学校図書館『平和 図書委員生徒会によるフィールドワーク 浦添の戦禍を歩く 第2号』

第三十二軍残務整理部1947「第六十二師団輜重隊戦闘経過の概要」

防衛庁防衛研修所戦史室1968『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社

